

支那論

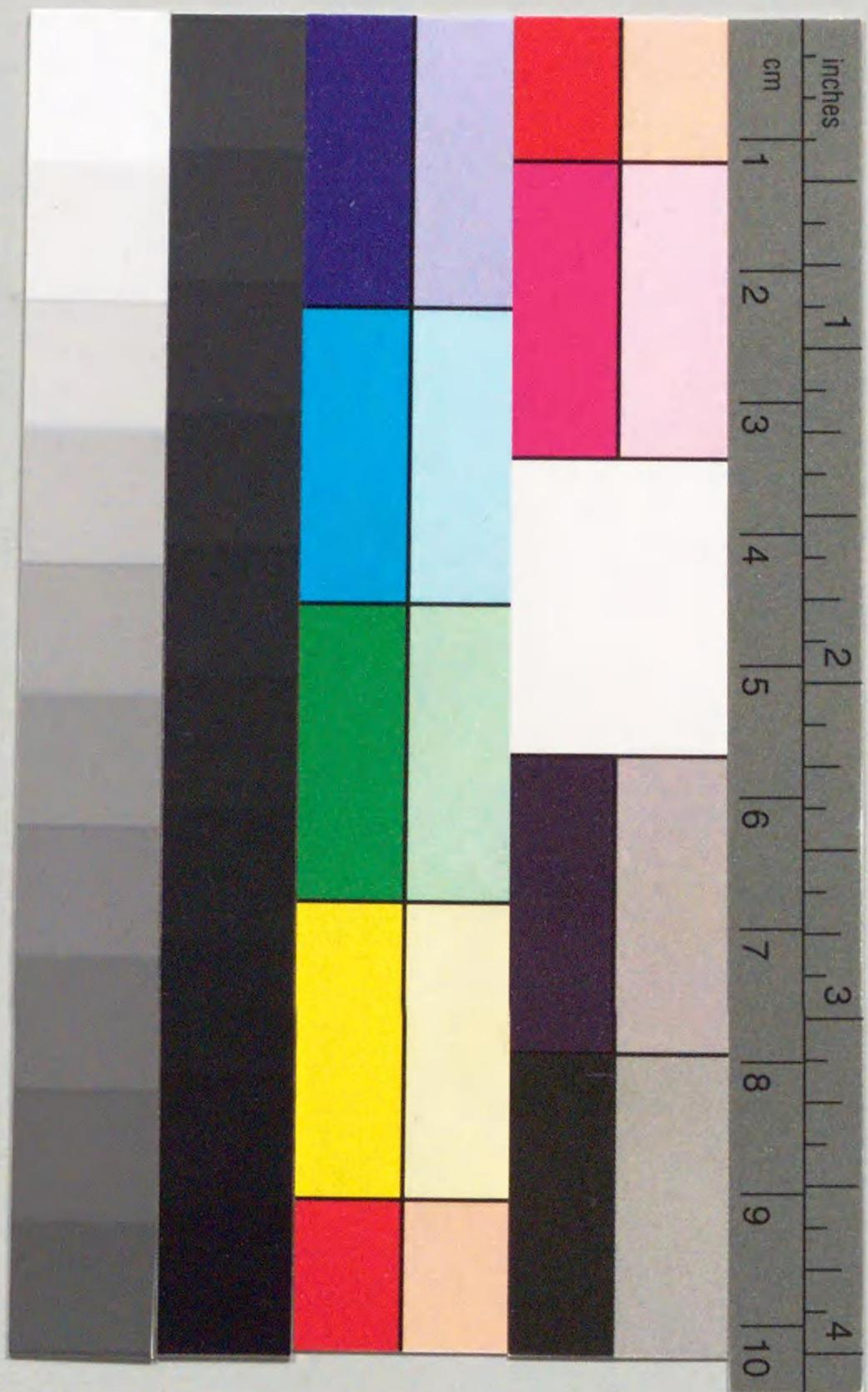
山路愛山著

東京民友社發行

222.068  
Y517s



00512797





東京都千代田区丸の内二丁目十番館六号四二室  
芳澤中國記念事業財團  
電話(28)四一〇八番



山路愛山著

支那論

東京民友社發行



222.068  
Y517A  
III



512797

## 與黎元洪

黎足下。此書論貴國近事。求足下一閱。僕竊謂貴國與日本。兄弟之國。始無畛域。何則貴國春秋時。人種蓋有四。所謂胡夏楚越是也。日本與東胡、夫餘、渤海、滿洲、高麗。陸海連續。人長弓馬。才秀武藝。語言相類。風俗亦似。共所謂北方之強。則知日本、東胡、渤海、滿洲、高麗、均胡也。越人水居。文身壓大魚。自稱龍子。日本古俗。又有與之相近者。今薩摩洋、與琉球、澎湖、小島碁布。而連於閩廣。其人有骨格相似者云。蓋本於此。然則日本亦有越也。況秦漢諸氏。入海爲國邑者。有秦王國。有漢部。日本諸大姓出於此輩者多。譜牒或存。不容疑焉。秦漢諸氏。則夏與楚也。然則日本併有胡夏楚



越也。總而言之。日本與貴國。誼同一家。情如兄弟。僕素論如此。故僕不能視貴國爲他人之國。貴國之憂。實則僕之憂也。以僕所見。今日之勢。貴國與日本。猶坐一舟。雲海渺茫。風浪非常。若能協心戮力。則可橫行於萬國而無所受侮。分而相猜防。則勢孤力弱。強國乘其隙矣。惜日本大官。與貴國當路。多非經國之器。坐井見天。各國其國。各民其民。無混同之略。缺一視之仁。管仲之器小哉。是僕所以長大息也。此書略舉其大綱。若得與足下同論。何啻一書生之幸而已哉。僕嘗有詩曰。

萬里長城禦狄人

混同六國帝王真

二千餘歲如流水

歎息中原無強秦

貴國與日本。同舟相濟。國雖二、心則一。則方今五世界之內。秦皇漢武之業。豈難豫期乎。聖人視四海如家。多得友邦之心者。爲霸王之業。自古皆然。足下思諸焉。

大正五年十月

日本 山路



# 支那論目次

## 支那論

- (一) 憫むべき支那研究……………一
- (二) 支那は日本人の墳墓の地なり、支那人は廣き意味に於ける日本人なり……………二
- (三) 小なる哉、政治家の膽……………五
- (四) 漢人は國の價値を解せず(一)……………六
- (五) 漢人は國の價値を解せず(二)……………九
- (六) 戰敗者たる漢人の特質……………一〇
- (七) 個人主義と拜金主義……………一五
- (八) 滿洲人漢人に同化し、其優越なる特色を失ふ……………一八
- (九) 綠營無用の長物となる……………二二



(一〇) 滿洲の兵力衰へて土匪起る	二四
(一一) 長髮賊起る	二七
(一二) 洪秀全の成功したる原因	三一
(一三) 漢人の義勇軍起る	三六
(一四) 長髮賊の討平は多く外人の力を待つ	四〇
(一五) 支那は外形に於て復活す	四三
(一六) 恐支那人病	四八
(一七) 日清戦争の原因	五二
(一八) 日本軍の勝利は當然のみ(一)	五六
(一九) 日本軍の勝利は當然のみ(二)	六〇
(二〇) 支那將に列強に分割せられんとす	六二
(二一) 變法自彊の失敗(一)	六四

(二二) 變法自彊の失敗(二)	六九
(二三) 康學は廢すべし、變法自彊は已むべからず	七二
(二四) 北清事件(一)	七五
(二五) 北清事件(二)	八二
(二六) 變法一轉して革命戰となる	八七
(二七) 日本學の感化	八八
(二八) 支那に於ける日本學の價值	九五
(二九) 日露戦争、支那分割を不可能にす	一〇三
(三〇) 夷を以て夷を制す	一〇八
(三一) 米國、清國の歡心を得	一一四
(三二) 袁世凱の失脚	一一七
(三三) 袁の位置、其政府引退の結果	一二八



(三四) 革命主義と軍人の握手、革命戦起る……………一三一

(三五) 袁、民國の大總統となる……………一三六

(三六) 『いや／＼ながら袁を推戴』……………一三九

(三七) 第二革命の失敗……………一四二

(三八) 支那は中央集権の國たらざる可らず……………一四五

(三九) 南北支那の性情の差違……………一五一

(四〇) 袁將に皇帝たらんとす……………一五六

(四一) 袁皇帝の出現の急務……………一六一

(四二) 袁皇帝の現出を急ぎたる理由……………一六七

(四三) 藪から棒の警告……………一七二

(四四) 人心袁を去る……………一七九

(四五) 第三革命の性質……………一八二

(四六) 深くして且つ大なる疑問……………一八六

代議政體と支那……………一八七

鄭成功論……………二二九

現代支那年表……………二八九



# 支那論

山路愛山著

(一) 憫むべき支那研究。

袁世凱が死んだ。私は此飛報を或る田舎寺で聞いた。そうして此機會に日本人民として支那の現狀を研究する必要を高唱したいと思つた。日本には支那通と云ふものが澤山居る。しかし我々は彼等の支那に關係する智識が斷片的であつて全體として徹底した理會の無いことを氣の毒に思ふ。我々は日本に支那問題を賣物にする政治屋が多いことを知つて居る。しかし我々は彼等の思想の根底に横はつて居る偏狹の感情を悲しむ。我々は日本人として支那に對する明白な概念に缺乏して居る。我々は支那に對す



る政治家の小膽を侮る。袁の死は我々をして痛切に支那を思はしめる。我々は此機會を以て支那に關する正直な、要領を得た觀察を聞きたいと思ふ。他人の議論を促すために我々は先づ自身の説を提供する。是に依りて支那に對する研究的精神を挑發し、我々の缺乏を感じて居る正當の智識に達することを得んとするは我々の希望である。

(二) 支那は日本人の墳墓の地なり。

支那人は廣き意味に於ける日本人なり。

日本の政治家の支那問題に對する口癖は斯うだ。

『盛衰興廢自ら一國の運命を決するは其國民の心柄に由るものにして他より如何ともすべからざるものなり。(時事新報の語を取る)』

『支那人の事は支那人自ら治むべきである。他人の日本人が餘計な世話を焼くに及ばぬ。自分の頭の蠅は自分で逐ふべきである。支那人の盛衰榮枯は其自ら取る所であつ

て日本人に關係のないことである。』是が日本の政治家が議會で公言する感情である。成程我々も政治家としては一應尤の言草であるとは思ふ。別して日本は支那に對して野心を懷て居るなどと歐米諸國の猜疑する時代には斯う云ふ冷淡な態度を示すことも日本の外交政策としては必要なことかも知れない。しかしながら我々日本人の全體は政治家ではない。日本の政治家として支那を眺めれば日本と支那の間には勿論國境があらう。しかし日本人として支那を眺める時には日本と支那の心には國境は無い。日本人と支那人とは他人ではない。日本人と支那人とは殆んど同じ血肉である。日本人の血には支那人の血が雜つて居る。我々は歴史の上から此事實を證據立てるとが出来る。昔は日本人の中に支那人村があつて支那の旅行者はそれを秦王國といつた。平安朝以後にも九州には唐人町があつた。中國の大内氏も、薩摩の島津家も其祖先は朝鮮半島を経て日本に移住した支那人であつた。薩摩のひとと福建の人の相貌、音調などを比較して見れば我々は今日でも其中に同種同族の多い事を暗示されやう。そうして



此支那人の血がいつか他の種類に混じて日本人の血になつてしまつた。日本人の血は或部分までは支那人の血だ。支那人と日本人とは一所になつて『我々』と云ひ得べき兄弟である。加之日本人の思想は殆んど全部漢學思想である。日本人の用ふる文字は漢字である。日本文學は漢文の直譯くづしである。日本に於て國文學の祖と誇る源氏物語でも其思想も、其文章としての結構も、漢學、漢文から脱化したものだ。日本の法律制度は支那の法律制度を模倣したものだ。此同胞、此兄弟の利害休戚に對して我々はどうして冷淡で居られる。支那人と日本人の心には關も垣も無い。同じ感情、同じ血液、同じ主義が流れて居る。況んや交通機關の發達した今日に於ては支那と日本とは眞に親しい隣家である。上海に一萬人、漢口に三千人、天津に數千人の日本人が居る。東京の町には數千人の支那學生が居る。婚姻も盛んに行はれて居る。支那の上流社會の家庭にも我々は日本の教育を受けた日本婦人を發見する。日本人と支那人とは生活に於て既に混同して居る。支那人に冷淡なのは獨り政治家ばかりである。我々

日本人民として曰へば支那人は決して他人ではない。『我々』と謂ふべき一人稱の中に包轄し得べき同胞である。支那と日本島とを併せた大きな區域は我々の活動すべき場所、我々が同感の空氣を呼吸し得べき場所、我々の祖國、我々の墳墓の地である。我々の祖先は日本の歴史を學ぶと同じ程度の親みを以て支那の歴史を學んだ。我々の祖先は日本の英雄豪傑を崇拜すると同じ程度の熱心を以て支那の英雄豪傑を崇拜した。情の麻痺したものは其子をすら愛することが出来ない。情の健かなものは世界をも我々の分内とする。支那は我々の分内である。然らば即ち我々は支那を明白に了解しなければならぬ。

(三) 小なる哉、政治家の膽。

支那に住む日本人には近頃まで随分不心得のものがあつた。彼等は支那人に對して無遠慮に輕蔑の態度を示す。彼等は支那人に對して野鄙の語を放つ。彼等は支那人の風



俗習慣を侮る。斯う云ふ支那人に對する無禮の態度はどうして起る乎。『支那人は日本人ではない、日本人は支那人ではない』と云ふ小さい他人根性が其基礎に横はつて居る。斯る小さい他人根性は『我々』と云ふ大きい、廣い、そして親しい同感を以て支那人と日本人との隔ての垣を撤去することの出来ない政治家の冷淡に依つて養はれたものたることは勿論である。我々は日本政治家の膽玉を更に大きくしたいと思ふ。

(四) 漢人は國の價値を解せず。(一)

支那は國として存在して居るけれども支那人は國としての共同生活を味つては居ない。支那人は國としての難有味を経験したことが無い。我々は近年の支那に革命が起つたことを知つて居る。滿洲朝廷は遂に亡びた。漢人の共和政治が起つた。袁大總統がクーデターを行つて將さに帝たらんとした。是れ實に大なる政變である。日本ならば舉國の血を湧かすべき驚心駭魄の大事件である。しかしながら支那人の大部分は總

て無頓着である。支那商人に時事を問へば彼等は『左様、別段變つたことは御座いません』(年々都是差不多)と答へる。彼等は帝政でも、共和でもかまはない。そんなことには無頓着で暮らして居る。斯う云ふ支那人の心理状態は我々の一寸理會し難い所であるが善く考へれば不思議はない。彼等は未だ國としての共同生活を味はつたことが無いのである。支那人の共同生活を味はざる寂しい心は日清戦争の時に善く現はれて居る。日清戦争を以て大抵の支那人は支那帝國と日本帝國との戦だとは感じなかつた。彼等は國としての共同生活を深く味はざりし故に日清戦争を以て國と國との戦争だと痛切に理會することは出来なかつた。各省の大官連は此戦は直隸と滿洲とが日本と戦ふものであるとして彼等には殆んど無關係なものゝやうに感じて居た。彼等は唯だ其支配する領地を守るばかりで糧食の手傳もしなければ軍隊も出さなかつた。少しは出して、それはほんの申譯ばかりの埒もないものであつた。彼等の此冷淡な感情は此戦争の最後の悲劇であつた劉公島に於ける海軍降服の時の一話に最も善



く現はれて居る。此時劉公島に廣丙號と云ふ廣東の軍艦があつた。支那人は降服の時、此軍艦の解放を求める書を日本の當局に贈つた。其書には廣丙號は廣東のものである、今度の戦争は廣東には關係がないから、どうか廣丙號だけは放還の特典を得たいと書いてあつた。日本人から見れば全く想像することも出来ない意外の要求である。しかしながら國と國との戦争であることを痛切に理會し得ない支那人に取ては當然の希望であつたと云はねばならない。狭い島國に住む日本人と、廣い大陸に住む支那人とは此點に於て全く思想の立場が違ふ。支那は一個の大世界である。此世界は數個の方言を持つて居る。別々の方言を話すものは通譯がなければ互に理會することが出来ない。此弱點を濟ふ爲に、支那には官話といふものがあつて別々の方言を話す人民の意思を疎通すべき機關になつて居る。官話の任務は恰も歐羅巴の中世に於けるラテン語、回教徒の盛時に於けるアラビヤ語の任務の如きものである。我々は中世の歐羅巴が總て羅馬字を用ひ、總てラテン語を用ひ、總て羅馬法王を耶蘇の代官として尊敬した故に

中世の歐羅巴は一國であるといふことは出来ない。それと同じやうに我々は支那人が總て漢字を用ひ、其紳士が總て官話を操り、そして孔子が到る所に崇拜され關帝廟が到る處に存在するが故に支那人は全く一國民としての共同生活を味つて居るものだと思像してはならない。支那人の心理状態を解剖すれば彼等はまた日本人が體驗して居るやうな國民としての共同生活を知らない。彼等は理智に於ては或は之に達して居る。しかしまたそう云ふ生活の中に泳いだことは無い。彼等の大多數が革命にもクーデターにも無頓着なのは是が爲である。

(五) 漢人は國の價値を解せず。(二)

しかし支那が何程廣くとも、支那の方言に何程の差違があつても、支那の人種が色々であつて日本のやうに人種の合金作用が行はれなくても、若し支那人の幹部たる漢人自身が自身で治めた國であつたならば支那人の國民的感情は猶ほ濃厚なることを得た



一〇  
であらう。しかしながら支那人の幹部たる漢人は不幸にして久しく治者の權威を失ひ他の少數の人種の支配の下に屈した。此事實が更に支那人をして國の價値を知らざらしめる原因になつた。遼。金。蒙古。滿清。いづれも漢人ではない。そうして遼と金とは北支那の漢人を支配し、蒙古と滿清とは南北の支那を統一し漢人の全部を支配した。此事實を簡單に語れば支那人の幹部にして其人口に於ても、其文明に於ても、其經濟上の力に於ても當然支那全國を統治すべき位置に在る漢人は被治者の位置に落ち少數の滿韓型蒙古型の人民が治者の位置に立つたのである。少數の治者を以て多數の被治者を制する術は成るべく被治者の勢力を分割して其相合して我に當るを豫防するに在ることは言ふまでもない。此政略が更に支那人の國民としての同感を鈍からしめ何時迄も國の生活の價値を知らざらしめたことは勿論である。

(一六) 戰敗者たる漢人の特質

歴史の示す所に依れば漢人は希臘人に似て居る。彼等は凝集力に乏しい。宋の時代にも彼等は勁敵を前に控へながら學派の争、君子小人の争に餘念がなかつた。秦檜が金國と和を議したと云て彼を奸邪の小人なりと罵つた胡詮の上書は我々の少年時代に愛讀して痛快を感じた所であるが、我々は斯う云ふ文章に於ても金人を惡む心よりも秦檜を惡む心が盛んであつた結果黨同伐異の精神を慷慨激烈な詞を以て言現はした漢人の弱點が窺はれるやうに思ふ。それ故に秦檜も斯様な議論に甘心せず、諸君は慷慨激烈の言語を以て大名を得て朝廷を去れば善からうが、私は天下の事を始末せねばならぬと云つた。明の末路には漢人の此弱點は殊に善く現はれて居る、彼等は眼前に大敵あるを忘れて黨派の争に従事した。彼等は社稷の亡びるのを見ながら猶ほ黨派の争に其血を熱くし、相合して敵を禦ぐことをしなかつた。獨りそれのみでは無い。彼等は滿洲人に支那本部の大部分を征伏され僅に南支那の一部に割據し、小獨立を保つて居た時でも猶ほ一致することは出来なかつた。廣東で近年其士人の教育に従事した人



の經驗に依れば『西洋の法律思想は、若し彼等の理會する所となれば甚だ彼等の趣味に合したものでらしく見える、彼等は法律書を愛讀する、そうして好んで法理を論ずる』と云ふ。是は必ずしも廣東人に限つたことではないらしい。漢人は一般に法理論を好む。議論は漢人の長所である。袁が死んだ今日でも漢人の血の割合に濃厚である南人の間には國約復舊とか何とか云ふ法理論が喧ましい。支那の勢力を統一して外に當ると云ふ凝集力よりも寧ろ日本學者に學んだ法理論が花を咲かせて居る。そうして明末の議論倒れの面影は今日にも其輪郭が彼等の動作に有り有りと映る。滿洲人は漢人の斯う云ふ分裂性に乗じて支那に割り込んで來た。漢人には哲學がある。程朱學。陸王學。考證學。さまざまの哲學は漢人の理論を好み哲學を愛する感情に満足を與へた。しかしながら漢人には信仰が無い。國民の感情を統一すべき崇拜物が無い。滿洲人は之に反して信仰の人民であつた。滿洲朝廷の建設者たる太祖皇帝は曰つた。『愛親覺羅氏の人は天から降つたものである、何人も彼を辱しめることは出來ない。』又曰つた。

『大なるものも以て小ならしむべし。小なるものも以て大ならしむべし。皆天の意の儘に由る』と。自ら天の選民なりと信じ、人事は皆天の意の定むる所なりと信じ、此信仰に依りて堅く結ばれたのが最初の滿洲人民であつた。彼等は此信仰に依つて無信仰の漢人と戦つた。滿洲人は騎射に長じて居た。彼等は馬上の勇者であつた。宗室大臣と雖も外に出る時は常に馬に乗つた。漢人は之に反して口舌の民であつて兵を知らなかつた。彼等は常に軍人を輕蔑した。彼等も時としては孫吳を講じ、六韜三略を説いた。さりながらそう云ふ場合でも彼等は誰だ兵學として之を口舌に上せただけである。彼等は躬ら矢石の間に立て實戦に加はることを敢てしない。彼等の大臣は馬に乗らないで輜に乗つた。滿洲人は物質的の人民であつて實功を尊んで虚名を卑しんだ。漢人は之に反し文學を好み、詩歌を以て其事業を飾つた。漢人は遂に滿洲人に支配された。そうして滿洲人は遂に支那全土を取つた。金、遼、蒙古の漢人を征伏して之を支配したも大抵同じ徑路であつた。斯うして數ば且久しく他の人種に支配された漢人



は其心に一種の癖を生じた。彼等は國として自ら立ち自ら治むることが出来なかつたので國としての共同生活の味を知らない。其代り彼等は郷黨の利害に執着する人民になつた。彼等は國を治め、天下を平にすることを人間の最高の理想とすべく其古典から教へられたけれども彼等の實際的生活は寧ろ一郷の善士たらしめた。彼等は國としての共同生活には興味を持つことが出来なかつた。しかしながら彼等は一郷を守ることには於ては日本人よりも寧ろ濃厚な感情を持つて居る。天下の亂れた時、里人と共に其城市を守り、或は郷人と共に安全な場所に移住し、其小さい團體の憲法を作り、其存在を維持すべき防禦の道を講じ、天下の治亂に關せず一郷の治安を樂むのは彼等の士君子の理想とする所であつた。水滸傳の英雄九紋龍史進が史家村の平靜なる存在を維持すべき約束を立て盜賊を防いだのは獨り小説家の畫いた空想ではない。善く一郷を守るのは彼等の士君子の趣味である。そうして若し平和な郷里の生活に安んじながら子弟を集め身心性命の學を講論し、若しくは人を避け客を絶ちて靜かに易でも讀

むことが出来れば彼等はそれを理想の生活としたものである。清朝の初に漢人の大學者顧炎武が封建論を作り、地方の自治を獎勵すべきことを論じ「天下の人の各、其家を懐ひ、各其子に私するの人は人の常情である、天子となつて天下を治むるものは百姓の常情に従ひ、其自ら爲すに（即ち自ら治むるに）任ずるに如かず」と云ひ、今は郡縣の世ではあるが、封建時代の産物であつた自治の精神は郡縣時代の今も存して置きたいものであると論じて封建の意を郡縣の中に寓せざるべからずと云つたのはやはり戦敗者たる漢人が國を治め天下を平にするよりも寧ろ一郷を守ることには於て濃厚な興味を持つた思想の流れを示す藁の一片であると言つて善い。

(七) 個人主義と拜金主義。

他國に征伏された人種の常として漢人は又極端な個人主義に陥つた。漢人の血を湧かすべき公心は唯だ善く一郷を守るに在つた。其外は唯だ身を保つことをのみ努めた。



長髮賊の起つた時に、其亂の爲に損害を蒙つた都市、村落の所謂賢人君子は大抵潜伏して身を保つたと曾國藩は書いて居る。彼等は危険の起る時には君の馬前に打死するよりも、城門の外に敵を防ぎ其鮮血を以て城壁を塗り犠牲の精神を現はすよりも、寧ろ身を保つことを計る。彼等の最初の、最大の問題は自己保存である。彼等は政界に波瀾の起つた時、其恩人と共に反對黨と戦ふよりも寧ろ多く恩人に背いて強者に降る。彼等は草の風に靡くが如く權力の中心に向て靡く。彼等は恩怨を知らないものではない。彼等は仁義を解さないものではない。しかしながら自保は彼等の總ての行爲を支配する第一の律である。彼等はさう云ふ反覆の行爲をすることを不人情なことも殘忍な事とも思はない。そうしてさう云ふ冷淡な不人情も世の常態として寛容するのが彼等の強者の徳である。執着すべき國家の利害がなく、樂しむべき國の共同生活が無い、或は有つても其香味の極めて稀薄な場合に於て彼等が個人主義に執着するのは自然の勢である。しかし彼等の強い個人主義は獨り彼等が被征伏者たる位置のみの産

物ではない。所謂郡縣の制度も亦個人主義を産み出すべき一要素である。日本人は久しい間封建制度の下に育つた。日本に於て封建制度の外形が破壊されたのは僅に四十五年の昔である。日本人は、殊に日本の士君子は一種の共產主義を實行して封建社會に生れ、若しくは其流風餘韻の未だ存在して居る時代に育つたから純粹の個人主義になることは出来ない。しかし支那人は殆んど三千年に近い間郡縣制度に養はれた。郡縣の時代に於て頼むべきものは獨り個人の智、勇、辯、力である。斯う云ふ社會狀態は支那人をして早く個人主義に執着せしめ同時に拜金主義の信者たらしめた。錢は神なりとは西曆第四世紀頃の漢人も知て居た。資本家の恐るべき力は紀元前の支那政治家も既に注意した。(鹽鐵論)。身を守るべき城郭の無い、面目と獨立を維持すべき劍を頼むことの出来ない漢人は其強い個人主義の背後の力として錢を頼んだ。此の心理狀態が産み出した結果として支那の官吏は多くは富を其一身に集める。さうして革命のやうな政治的危機に際しては彼等は其積み得た金を以て公共の用に供せずして寧



ろ一身の安全を計るべき武器にした。一言にして曰へば支那の士君子は公共心太だ薄く、私心太だ盛んなりと謂つべきである。國民としての生活の興味に乏しい彼等は斯う云ふ個人主義に甘ずるに至つた。興味は久しく之を味はざる者に取ては時として無味になる。久しく用ひざる機關は其能力を失ふ。斯うして漢人の政治的興味は萎縮してしまつた。

(八) 滿洲人漢人に同化し、其優越なる特色を

失ふ。

滿洲人が若し久しく其固有の長所を失はなかつたら漢人は何時までも其治下に甘心して服従して居たであらう。しかしながら滿洲人はいつか其鹽の味を失つた。どうして滿洲人は其特質を失つたのであらう。此理を説明する爲に我々は漢人の他の特質を説かねばならない。漢人は數ば力を以て他の人種に征伏される。しかしながら、之と同

時に漢人は其風俗習慣を以て彼等を征伏した人種を逆々に征伏する。羅馬人は嘗て其武力を以て希臘人を征伏した。さりながら被征伏者たる希臘人は其文明を以て逆々に羅馬人を征伏した。多くの點に於て希臘人に似て居る漢人は此點に於ても希臘人に似て居る。第五世紀から第六世紀に掛けて支那の西北邊から侵入した拓跋氏は武力強盛な異人種を率ゐて河南山西に帝國を建て漢人を足下に蹂躪した。さりながら彼等は都を洛陽に移すと共に漢人の風俗に感染した。漢人の文學、哲學は彼等に愛せられ、彼等の武力は衰へた。第十二世紀に於て北支那の漢人を征伏した金國の政治家は其武勇の人種が被征服者の漢人の爲に逆々に精神的に征服されることを恐れて嚴重な規律を立て、其固有の風俗を維持しやうとした。しかし金人は遂に事實に於て漢人の弟子になつた。そうして漢人の風俗習慣を學んで弱い國になつて亡びた。蒙古人は支那の全部を統一し、漢人全體を臣妾にした。蒙古人は權勢に執着する人種であるから支那を統一して後に色々の制度を立て、永久に統治者たる位置を失ふまいと努力した。しか



しながら彼等は非征伏者たる漢人の風俗習慣に魅せられた。彼等は其固有の風俗を棄て、漢人の風俗を學んだ。天幕に住んだ彼等は漢人風の家屋に移つた。彼等は漢人の言語文章を學び巧に詩賦を作るやうになつた。北方の蠻人たる彼等の王侯は宛然たる漢人の士君子になつた。狭い袖の衣物を着て馬背に跨つた彼等は漢人のやうに寛かな衣を着て、ゆたりにと濶歩する文弱の人民になつた。これが爲に彼等は遂にその固有の武力を失つて漢人に輕侮されるやうになり、政權を棄てて故郷に退居した。漢人は政治の才がない。國を造る力に乏しい。他國を征伏する武力の如きは其長い歴史を通じて餘り多く現はれない。しかしながら漢人は文明の人民である。彼等は哲學を持つて居る。彼等は詩歌を持つて居る。勞働者としても商人としても、農夫としても彼等は堅忍不拔、其守る所に執着して急がず、怠らず、ちりちりと進んで來る人民である。彼等の人數の多數なるは大海の如くであつて、彼等を征伏した人種の人口は其海中の島の如くである。彼等が彼等の治者たる位置に上つた人種を逆まに精神的に征伏して

彼等と同じものにしてしまふ力の秘密は思ふに此點に存するであらう。其原因の何であるかは暫く論じないこととして兎に角漢人の同化力の盛んなことは疑なき事實である。歴史は線代へすものである。滿人は其優越な武力に依て漢人を征服し、同時に滿洲の政治家は滿洲人の漢人に同化されることの危険を恐れ其豫防策を講じたけれども、漢人は例の如く、滿洲政治家の作つた人種間の堤防を破り、とうとう武力に強い滿洲人を全く文弱な漢人同様のものにしてしまつた。今から五六十年前の支那の全土には五百萬人からの滿洲人が居た。しかし其時すら彼等は其祖國の言語なる滿洲語を全く忘れてしまつた。勿論滿洲語はそれを教へるのを専門の家業とする教師の間に残つて居る。滿洲人の滿洲語を學ぶ必要のあるものは此語學の教師に就て學んだ。しかし彼等の常に話す詞は漢語であつて滿洲語ではなかつた。憫むべし滿洲語は拉丁語、希臘語と同じく死語になつてしまつた。滿洲人は其言語さへ死語になつてしまつた、その風俗、習慣を守り得なかつたことは勿論である。昔しは其武を誇つた滿洲八旗も



いつか漢人の風俗に化せられ、博奕をするものもある、女狂をするものもある、江戸の幕府の所謂御家人の墮落したものよりもつとひどい貧乏に陥り、種姓を隠して漢人になり、本籍を脱して他省に走り、辛くして生命を繋ぐものもあつた。昔は武門を鼻に掛けた彼等も生活に窮した結果、平人の輕蔑する賤業に就くことをさへ厭はなんだ。滿洲人の頼む所は其兵力に在る。八旗は其兵力を代表するものである。八旗既に斯の如くなれば滿洲の頼む所は何處である。滿洲人が其固有の風俗習慣を失ひ、其祖國の言語を忘れ滿洲八旗が其武を失つた時に滿洲朝廷は既に其存在の理由を失つたものである。しかしながら人間の惰性は猶ほ漢人をして滿洲朝廷を仰がしめた。

(九) 綠營無用の長物となる。

異人種を統治する天才を持つた滿洲の政治家は支那を征伏すると同時に早くも滿洲人をして猶ほ長く漢人と戦はしむることの善い政策でないことを覺つた。彼等は之が爲

に漢人を募集して各所に兵營を作り、漢人自身の戰亂を平げしむる政策を取つた。『漢人の治安は漢人自ら維持すべし。滿洲人は漢人の敵に非ず。漢人の叛亂を滿洲人に依つて討平するのは自治の理に反して居る』。是れが滿洲政治家の主張であつた。是に依つて滿洲の朝廷は漢人の兵營を支那全土に星羅棋布したから滿洲人に取ては此政策は恰も多くの敵を設けたやうにも見へる。さりながら漢人の武力は由來滿洲朝廷の深く見縊つた所である。斯うして全國に漢人の兵營を設けても若し精銳な滿洲八旗に逢へば彼等は虎狼の前の群羊である。敢て恐るゝには足りない。しかし若し此漢人の軍營に依て漢人の叛亂を討平することが出来たならば是れ多少は漢人自治の希望を満足させると共に、滿漢の反感を和らげ、且漢人を以て漢人を制することが出来る。滿洲朝廷は斯う云ふ政策の上に立脚して八旗の外に漢人の兵營を作つた。綠營と云ふものは則ち是である。此主義に依て康熙帝は三藩の反亂を起した時、綠營の諸將をして之を討平せしめた。此綠營は清朝の末路に於ては五六十萬人の兵數があると稱せられた。し



かしながら是もいつか帳面だけの兵數になつてしまつた。彼等は依然として糧食を要求する。しかし彼等は其實老弱用に堪へざる廢兵同様のものになつてしまつた。

(一〇) 滿洲の兵力衰へて土匪起る。

滿洲朝廷の影は既に薄くなつた。滿洲朝廷が其統治する支那全土の治平を維持する爲めの背後の力則ち八旗と綠營は既に虚しさ影になつた。支那名物の土匪は是に於てか起らざるを得ない。土匪は國と云ふ共同生活の趣味に乏しい支那に在ては其社會組織の缺陷から起る必然の副産物である。明末の英雄鄭成功も海賊の首領であつた。彼は其黨を以て支那海を支配した。我々は今日と雖も關東州の海上に時としては支那海賊の出沒するを聞いて之を驚異する。しかしながら仔細に彼等の歴史を尋ねたならば彼等の來歴は倭寇以來、鄭成功以來の海賊史に連なつて居るかも知れない。海賊は則ち海上の土匪である。義和拳會の騒動は我々の記憶に猶ほ新しい事實である。しか

し義和拳會はずつと古いものである。其起源は少くとも第十八世紀の下半期に溯ることが出来る。彼等は水滸傳の英雄のやうに拳と棒とを揮ふことを習ひ一種の迷信を有する無賴漢である。彼等は山東、直隸二省に威力を揮つた國定忠次である。彼等は其武藝を頼んで各其繩張をこしらへ、良民を苦しめることもある。彼等は此點に於てたしかに亂民と目すべきものである。しかしながら彼等は亂民であると共に村落の保護者である。彼等は殆んど無政府同様な支那の政治に於て、其武力を以て治安を維持する道具にもなつた。直隸、山東に拳匪があるやうに河南省には白狼がある。滿洲には馬賊がある。其外會匪と云ひ鹽梟と云ひ様々の無賴漢が各省に出沒する。彼等の眼中には固より法律、制度は無い。彼等は自己の社會を爲し、自己の制裁を有し、政府が強ければ影を潜め、政府が弱ければあばれ出す。北京に於てすら彼等は時として燈火を照らして公然強盜を試みる。各省の都會、村落に於て彼等が思切つた亂暴を働くことのあるのは勿論である。我々は盜賊といへば日本の小泥棒をのみ聯想する。し



かしながら支那の盜賊は全く日本のとは違ふ。彼等は一種の團隊である。支那の小説に彼等の首領を大王と云ひ、彼等の集會する所を集義廳と云ふのは必しも文學上の洒落ばかりではない。支那の帝王も時としては彼等の中から出たことがある。支那の諺に盜賊が王となると云ふのは則ち此事である。斯うして支那の海には幾多の毛刺九右衛門が居り、支那の内地には幾多の國定忠治、熊坂長範が居る。彼等は治者に兵力のある時は爪を隠くして良民の眞似をして居る。しかしながら治者の威力が減じたと見れば直ぐ騒ぎ出す。世々の支那の政治家はいづれも彼等に惱まされた。明の朝廷は遂に彼等に亡ぼされた。滿洲朝廷も其兵威の既に衰ふるに及んでは、例に依て例の如く土匪の騒ぎを免れなかつた。西曆一七九六年(嘉慶元年)に起つた白蓮教匪の騒亂は其年から始まつて八年の間續き、湖南、四川、河南、陝西、甘肅の五省に蔓延した。白蓮教匪の煽動者は民心を得る爲に自ら明の遺臣と稱した。白蓮教匪の亂がやうく鎮定すると間もなく安南を根據にし兩廣、閩浙の海を荒らした海賊の騒動が起つたが、

是もやうく鎮定してほつと一息休む間もなく一八一三年(嘉慶十八年)には山西、河南、山東、直隸四省に掛けて所謂天理教の騒動が其頂點に達した。そうしてそれもやうく鎮定することが出来た。斯様に野火のやうに且焚へ且消へて支那の全土が何時も土匪の爲に不安を感じずるやうになつたのは滿洲人が支那を治むべき實力を失つた結果であつた。

(一一) 長髮賊起る。

しかしながら人間は多くの場合に於て惰力に支配される動物である。八旗、綠營の既に用を爲さない虚しき形式に過ぎないことは土匪の争動で明白になつたけれども漢人は猶ほ滿洲朝廷を覆へそうと云ふ野心を起すには至らなかつた。八旗と綠營は弱くとも滿洲朝廷は猶ほ四海に君臨する威嚴ある天子であつた。康熙、乾隆の盛時は尙ほ漢人の忘るゝ能はざる所であつた。人民は猶ほ滿洲朝廷を侮るべき理由を發見しなかつ



た。さりながら滿洲朝廷は今や土匪、海賊よりも強い恐ろしい敵と戦はざるを得ないことになつた。此強い恐ろしい敵との戦とは何である乎。言ふまでもない、一八三九年(道光十九年)に始まつた鴉片戦争である。滿洲朝廷は漢人を征伏して支那の全部を取つた。其威力の既に衰へたる後と雖も猶ほ辛うじて多くの土匪を征伏することを得た。さりながら此威望の重い滿洲朝廷は今や支那の歴史に取つては全く新奇の敵と云ふべき白人種の英人と戦はざるを得なかつた。匈奴の歐洲入寇、蒙古の露西亞征伐以來、白人種と黃人種とは再び此處に鋒を交へた。そうして其結果は勿論滿洲朝廷の敗北に終り一八四二年(道光二十二年)の南京條約に依り香港を英國に與へ、二千一百万兩の償金と阿片燒棄の損害賠償六百萬兩を拂ひ、世界の貿易の爲に五港を開くことに依て結着した。是れ實に日本帝國の仁孝天皇天保十三年、江戸は將軍徳川家慶の時に當る。江戸の政府は此敗北に驚き、始て白人の極東に於ける勢力を識認し、家光以來の鎖國政略に手加減を加へた。日本の事は此に説く必要はない。支那に於ては此大々

的屈辱の講和に依て始て漢人の間に滿洲政府を興みし易しとする感情を生じた。滿洲政府とて恐るゝに足らない、あの醜態を見よ、英夷の爲にもろくも敗北して土地を奪はれ、港を開いたではないか、八旗は役に立たない、綠營も空しき影だ、我々は義勇軍となつて外夷と戦つた、我々は敗北した、さりながら我々が若し義勇軍となつて戦はなかつたら堂々たる大帝國に於て一人の敢て起つて敵と戦ふものさへ無かつたらうとは廣東地方に於て防禦戰に従事した土兵の感情であつた。此勇悍なる土兵は講和と共に解散された。彼等は其解散に依つて生活の資を失つた憤りと滿洲朝廷を侮る情の爲に起て反亂を企つるに至つた。滿洲朝廷の戰鬥力の極めて薄弱なるを最も明白に見た嶺南(廣東、廣西)人は滿洲朝廷の存在に向て疑問を發した最初の人民であつた。さりながら滿洲朝廷に向て先づ反旗を翻へし漢人の獨立を計つたものが嶺南人であつたこと理由は唯だ是計りではない。嶺南の人民は始から清國政府に心から服従して居なかつた。彼等は滿洲人に征伏された最後のものであつて、滿洲人に反抗した最初の



ものであつた。加之福建と廣東とは昔から海賊の藪窟であつて支那の東洋と南洋とは此海賊が常に暴威を逞くした場所であつた。彼等は他の漢人の多くが郷里に執着する性あるに反して未知の海に運命を試みる冒険者であつた。日本人が徳川氏の鎖國政策の爲に日本島に蟄居して居た時代に彼等は既にボルネオ、瓜哇に植民した。一八四八年(道光二十八年)則ちペリト提督が江戸の關門たる浦賀に一道の砲聲を轟かして日本の開國を迫つた日より五年前に彼等は既にボルネオには多くの唐人村、唐人町を作り、瓜哇には數代續いて生活して居るものが萬を以て數へる程あつた。彼等は此意味に於て世界的の人民であつた。彼等が世界的の人民であつた歴史は眞に古い。我々は所謂八大家文で名高い韓退之の文に於ても彼等が既に世界的の人民であつた面影を見ることが出来る。韓退之の文に依れば嶺南(則ち廣東、廣西地方)は彼の時代でも海外諸國人の集まる所であつて耽浮羅(今の濟州島)流求、毛人、夷亶の州、林邑、扶南、眞臘、干陀利の屬は皆其港に集まり、蠻胡の賈人の舟が海中に交つたと云ふ。千年以

前既に此の如しとすれば彼等が世界的の人民であつたことの由來は眞に久しいと言はなければならぬ。故に彼等は總ての漢人に先つて世界の文明を吸収した。支那以外に廣い世界の在ることを知つた。西洋の宗教、西洋の國體、西洋の歴史に就ても臆氣なから多少の摸索を試みる事が出来た。斯う云ふ境界は彼等の思想に多少の自由を與へた。總ての改革は心の古い繩墨、古い信仰から解脱し得た時、若しくは解脱しやうと煩悶する時に起る。清國朝廷の權威を侮つて正面から反抗した長髮賊の騷動が嶺南地方から起つたのは此地方の漢人が其生活に於ても其智識に於ても他の漢人よりは世界的であつたことが其重要の原因の一である。

(一一一) 洪秀全の成功したる原因。

長髮賊の巨魁洪秀全は落第生であつた。彼は數は落第した。彼は多くの落第書生が經驗する煩悶と不平の淵に沈んだ時に遇然耶穌教の小冊子を讀んだ。そうして一種の耶



蘇信者になり、教團を結んだ。其教團はやがて滿州朝廷に對して反旗を翻して革命軍の中堅になつた。彼の成功は意外に早かつた。彼は恰も無人の境を行くが如く其兵を廣西に起して以來僅に二年にして南支那を席の如く卷いた。彼の味方は雲の如く集まつた。八旗も綠營も此恐ろしい革命軍に對して何等の有力な抵抗を試みる事が出来なかつた。彼は遂に一八五三年(咸豐三年)清曆二月朔日を以て南京城を陥れ、彼新建てた新しい國の首府にした。彼は何故に斯様な非常の成功を收める事が出来たのであらう乎。其第一の原因は滿洲人に支配されることを恥辱とする漢人の自負心に投じた爲であつたことは勿論である。それ故に彼は滿洲朝廷を覆へし、漢人を帝とすべしと主張した。滿洲朝廷が恭順の記號として漢人に強要した辮髮の風俗を廢して髮を生やすことを其人民に奨勵した。斯うして彼は漢人の心に投じた。彼が成功の第二の原因は彼が水上の勇者であつたことである。彼と官軍との戦は我々をして源平氏の戦を聯想せしめる。南船北馬と云ふ諺のあることが之を證する如く南支那は水路縱横の

國である。大江がある。小さい川もある。多くの湖水もある。是れ正に瀬戸内海沿岸に根據地と身方とを持って居た平家の勢力範圍と同じき地勢であつて船軍の勇者が得意の戰場とする所である。福建、廣東地方は古から海賊の國である。従て船も多く、船軍の名人も多い。彼は此船軍を利用し、楊子江を上下した。風次第で彼の船軍は瞬息にして數百里を走ることが出来た。官軍は陸上を練つて来る。彼は江上を自由に往來する。源氏の武者が何程馬上の勇を誇つても海を飛越へることは出来ない。官軍は豚の如く、彼は家鴨の如くであつた。彼が早くも楊子江の沿岸に威を取り、覇を定めたのも、實に此地勢と、彼の軍人の特長とに原因したことが多し。我々は此事實を忘れてはならぬ。さりながら長髮賊の大に成功したのは更に他の大原因がある。我々は決してそれを見通してはならぬ。他の原因を忘れても此原因だけは忘れてはならぬ。それは外でない。歐羅巴人、殊に英吉利人が長髮賊に同情したことである。洪秀全は歐羅巴人の同情を得て置くことの利益を知らないものではなかつた。故に彼は耶蘇教



の信者たることを粧つた。彼は南京を陥れた時偶像破壊を名として多くの廟、多くの  
 神祠を焼いた。彼は大友宗麟が耶蘇信者になつた時、其領内の神寺、佛閣を隅から隅  
 ままで破壊し盡くしたやうに歴史的、傳説的の遺物として久しく支那人に尊敬されて居  
 た南京の諸廟群祀に火を付けて焼いた。彼は彼の戦は滿洲人の壓制から漢人を救ふ義  
 戦だと唱へた。極東の事情に於ては唯だ皮相の觀察をのみ爲し得る歐洲人は彼の爲す  
 所を見て是れ眞に歐羅巴の民権家、革命家に比すべきものだと言讚した。『長髮賊は匪  
 徒でもなく亂民でもない。彼等は文明國民の良友とすべき愛國者である。』支那在住の  
 歐羅巴人、別して英吉利人は斯様に信じた。故に彼等の或者は軍器、彈藥、糧食を彼  
 等が見て以て獨立戦争の爲に其血を流すことを惜まない可憐な人民とした長髮賊に供  
 給した。長髮賊の或部分は之が爲に歐羅巴の精良なる武器を用ひて官軍を惱ますこと  
 を得た。勿論歐羅巴人の長髮賊に同情したのは必しも義侠心から起つたのみではある  
 まい。滿洲朝廷の亡ぶべき運命既に眼前に迫つたと見た彼等は繼で起るべき漢人の政

府に恩を被せて置くことが彼等の利益だと覺つて同情の資本を投じたことであらう。  
 斯うして彼等は滿洲朝廷と南京の新政府とを殆んど同等のものに見做し、勝手に往來  
 もし、勝手に貿易もした。其結果が一八五六年(咸豐六年)上海に於て英國商船アロ號  
 の捕拿に原因した國交の破裂となり、英國は滿洲朝廷と開戦した。此英清戦争は足掛  
 三年で平和に歸したが、間もなく更に英佛二國の清國に對する戦争が起り、一八六〇  
 年(咸豐十年)清曆九月滿洲朝廷は城下の盟同様な屈辱的の平和條約を結んで僅に外國  
 人の怒を霽らすことが出来た。長髮賊は一八五三年(咸豐三年)に其獨立國の首府を南  
 京に定め、一八六四年(同治三年)南京を陥れられて亡びた。此足掛十二年の長い時期  
 に英國は二回滿洲朝廷と開戦し、佛國は一回開戦した。長髮賊は恰も英佛二國から間  
 接に援兵を受けたも同様な都合の善い國際的の位置を占めることを得た。我々は長髮  
 賊の成功が専ら此點に在つたことを興味ある問題として記憶せねばならぬ。



長髮賊の新しい王國は漢人が始めて滿人に對して革命戰の旗を翻へした最初の、最大な試であつた。さりながら我々は滿人對漢人と云ふ意味を世界の歴史に多く現はれる人種間の反感のやうな重いものに取つてはならぬ。同じ種族のみが寄つて獨立の國を作るとか同じ種族を統一して他の種族に當るとか云ふやうなことは漢人の間に存在した滿洲人に對する反感ではない。一國と云ふよりも寧ろ一世界と云ふべき支那に於ては之を構成する人民は決して一種類ではない。長髮賊の幹部であつた嶺南の人民も、中央支那、若しくは北支那の人民から見ればやはり滿洲人と同じく普通の漢人とは毛色の違つた粵人であつた。彼等は滿洲人を見て異類の人とするが如く粵人を見ても異類の人とした。故に滿洲朝廷の政治を異人種の政治として嫌ふことは嶺南人に取りては無意義である。況んや滿洲人の大部分、若しくは殆んど全部は既に漢語を語り、漢文

を作り、漢人の風俗を採用する漢人になつた。彼等の滿洲人たる特徴は其政治的特權に在つて、其言語、風俗、習慣ではない。總ての物を同化する漢人は其周圍の亞細亞人を事實に於て漢人にしてしまつた。若し其系圖を尋ねたらば北支那の漢人は悉く是れ異人種の同化作用の爲に漢人化したものだと云つて善い。斯う云ふ國柄に於て人種間の反感の濃厚な理由はない。近頃武昌に起つた所謂第一革命戰を滿人對漢人の人種戰爭の如く解釋したのは全く日本學の餘毒であつて漢人の心底から感じて居る事實ではない。滿洲人は人種として漢人に嫌はるべき何物をも持つて居ない。漢人は滿洲人との婚姻を忌むものでもない。滿洲人が漢人に惡まれるのは其勝戰者たる態度に在る。其政治的特權に在る。此事實は我々が支那問題を解釋する時に忘れてはならない條件である。若しも或人の想像するやうに漢人對滿洲人の人種的反感が始から極めて猛烈なものであつたらば長髮賊の成功は支那の全部の漢人を驚喜せしめたであらう。北支那及び中部支那の漢人は進んで其仁俠、勇敢なる同胞を合して、直に漢人の大帝國を



作つたことであらう。さりながら北支那及び中部支那の漢人は長髮賊を異人種の壓制から同人種を解放して同じ種族を以て大きな祖國を恢復しやうとした義軍とは見ずして單純な亂民と見た。彼等は八旗、綠營の治安を維持し、亂民の侵掠を防ぐ力の無いことを歎じた。そうして自ら義勇軍を組織して此亂民を討平すべしと覺悟した。勿論斯う云ふ勇ましい覺悟は總ての漢人に共通したものではない。漢人中の所謂紳董に共通した感情でもない。總ての問題の先決問題として自身の安存を計るを第一義とする漢人の所謂賢人君子は斯う云ふ亂世に於ては大抵隱遁して自己の存在を保つことを努めるのが常であつた。しかしながら漢人と雖も無氣力のもの討りではない。公衆の利害の爲に進んで身を献げ、自ら危亡の地を履んで悔いざる豪傑もあつた。名高い曾國藩は則ち此種の有志家の巨魁であつた。彼は其同志者と共に亂民と戦ふべき義勇軍を組織した。彼は身を書生より起し、自ら軍人たるべく教育し、其の同志者をも軍人たるべく教育し、其の募集し得た男子をも軍人たるべく教育した。彼は此點に於て四十

まで兵事を知らなかつた田舎紳士クロンウエルが草深い村落から出て軍人として自己教育を始め、其同志者をも軍人として教育したのに似て居る。支那の近世史に名高い湘軍は斯うして出来た。曾國藩の門下生たる李鴻章の淮軍も同じ目的に依て出来た。各省にも同じ種類の義勇軍が多く出来た。滿洲政府は渡りに船を得たほどの喜悅を以て此義勇軍を歓迎した。そうして彼等の力に依て辛ふじて長髮賊を討平することを得た。滿洲朝廷は是に依て其祖先の遺策たる漢人を以て漢人を制することの成功したのを誇つたかも知れない。しかしながら事實は滿洲人が既に治平を維持する力(兵力)を失つたから漢人の義勇軍がそれに代つて亂賊を平げたのである。滿洲朝廷が支那全土を征伏し大清帝國を造つた昔の歴史を飾るべき政治家、軍人は悉く滿洲人であつた。しかし大清帝國を長髮賊の争亂から救ひ少くとも楊子江を限りて南北の二王國に分かたれやうとした危険至極な形勢から帝國の領土を濟ひ出して其保全の功を擧げたものは悉く漢人であつた。支那の近世史に名高い曾國藩、曾國荃、左宗棠、李鴻章、江忠



烈、江忠源の徒は其勳業の偉大なるを以て我々の忘れ難しとする人物であるが、いづれも長髮賊征伐の時に風雲に乗じて起つた英雄豪傑であつて悉く漢人である。昔しの満洲朝廷は漢人を以て漢人を制せしめたが彼等は同時に其武威を以て漢人全體に當るに足りる満蒙八旗を持つて居た。今や長髮賊を平げ得た満洲朝廷は獨り漢人に依つて其の領土の分裂を免れたのみである。事實の中心を語れば満洲朝廷は此時に於て既に其存在の理由を失つた。

(一四) 長髮賊の討平は多く外人の力を待つ。

しかしながら長髮賊を平げ得たのは獨り湘軍、淮軍の功ではない。南北各省に起つた義勇軍の功でもない。他に大なる有力者があつた。其有力者とは何ものである乎。則ち満洲政府に同情して、物質的若しくは精神的の援助を與へた歐羅巴人特に英人である。前にも記した如く彼等は始には洪秀全に同情して色々の援助を南軍に與へた。

彼等は『長髮賊は亂民に非ず、その祖國を満洲人の壓制から救はうとする義軍である』と信じた故に文明の友を以て之を待つた。さりながら洪秀全の耶蘇教は彼の口實に過ぎなかつた。歐羅巴人が義軍たるべく豫期した長髮賊は、其實やはり亂民に過ぎなかつた。日を経るに従ひ、糧食の要求が多くなるに従ひ、戰鬪區域の廣がるに従ひ長髮賊はビュリータンの假面を脱して土匪に均しき、若しくは土匪よりも甚しき亂民になつた。歐羅巴人の支那貿易は之が爲に大打撃を蒙つた。外交の動機は多くの場合に於て利害であつて仁義道德ではない。歐羅巴人は南軍を助けることの最後の利益たることを信じて同情の資本を南軍の爲に下した。しかしながら南軍が獨立の義軍でなく、満洲政府の壓制に泣く良民でなく單純な流寇、亂賊に過ぎないことを覺つた彼等の同情は長髮賊から満洲政府に轉じた。『是では困る、寧ろ満洲政府を援けて秩序を恢復させた方が善い』とは彼等の心機一轉であつた。英吉利も佛蘭西も亞米利加も是に於て支那に對する外交方針を一變した。彼等は兵力を満洲政府に貸して兎も角も秩序を恢



復しやうと考へた。そうして此趣を北京政府に申出だした。北京政府は各國の好意を感謝した。さりながら最初は外國の兵を借りることを危険に感じ援兵だけは謝絶し、其代り西洋人を招聘して士官にし新兵を訓練しやうと試みた。最初に招聘された士官は合衆國人であつた。名高いゴルドンが此招聘に應ずるに及んで、其下に集まつた兵士は武器の精良と訓練の行届いたことに因て常勝軍の名を博した。戦争の潮流は變じた。滿洲朝廷は氣力を恢復した。英佛諸國は軍艦を以て長江を溯り官軍と共に一方は陸から一方は水から長髮賊を夾撃した。長髮賊の遂に亡びたのは實に是が爲であつた。此事實は支那の將來を暗示するものであつた。滿洲朝廷は其朝廷を支ふべき實力を失つた爲に事實に於ては空しき影になつた。漢人の義勇軍は自ら起て秩序を恢復し、再び南北の支那を統一することを得た。さりながら其背後には西洋人の力があつた。漢人は滿洲人に對して事實に於て殆んど獨立し得べき力を示した。さりながら彼等は自身よりも優越した人種の力を頼まざることを得なかつた。將來の支那問題は既に其影

を此關係に映して居る。

(一五) 支那は外形に於て復活す。

漢人と日本人とは外國の文明に對する態度が丸で違ふ。日本人は鎖國の夢の猶ほ濃かであつた第十八世紀の下半期でも自ら西洋の書物を翻譯して居る。漢人は始から日本人のやうな嚴重な鎖國主義を取つては居ない。外人は何時でも支那に往來した。南支那には多くの外人居留地さへあつた。しかし漢人は斯うして常に多少、西洋文明に觸れて居たにも拘はらず、毫末も西洋文明を研究しない。彼等は日本人が自身で西洋の書を翻譯した後殆んど百年第十九世紀の下半期になつても自ら外國の書を翻譯するとは出来なかつた。嘉永安政年間(一八四八年—一八五九年)に日本に舶來した支那文の西洋科學書、たとへば『全體新論』『航海金鍼』など、云ふものも支那人の手で出來たのではない全く歐羅巴人の手で出來たのである。日本では第十八世紀の初に既に日



本人自身の著述に成つた可なり精しい萬國地理の書が出来て居た。しかし支那人は阿片戦争の時迄は萬國地理に就ては全く夢中であつた。阿片戦争の結果として魏源の『海國圖志』が出来た。一八四八年(道光二十八年)には『瀛環志略』が出来た。しかし斯う云ふ地理書も、支那人自ら横文字を讀んで編み立てたのではない。唯だ支那に來た西洋人の話を傳聞の儘に書たに過ぎない。漢人は周圍の夷狄を同化して常に第二の漢人にしてしまふ。しかしながら漢人は容易に他人に同化されない。容易に他國の文明を理會しない。一言にして曰へば漢人は他國の文明に對して極めて鈍感である。しかし斯様な鈍感の人種も自ら西洋人と戦つて敗北し、長髮賊の征伐に於て西洋式の訓練を自國の人民に應用して所謂常勝軍を形造るを得たことを眼前の事實として見た上は、多少は動かざることを得ない。是に於て乎、此争亂を時期として支那にも西洋學はすこしは起つた。魏源は『海國圖志』を著して始て萬國の形勢を論じ、『夷の長技を師として夷を制すべし』と云ふ説を唱へた。廣東で阿片を焼いて英清戦争の原因を作つた

頑固な林則徐も西洋人を頼んで西洋新聞の翻譯をさせた。鴉片を焼いた頑固黨の旗頭林則徐が逆々に支那に於ける西洋新聞翻譯の創始者になつた事實は眞に善く人生のアイロニイを語り盡くしたものと云へる。天下の形勢を見るに明敏なる曾國藩、李鴻章の徒が西學輸入の首唱者になつたことは勿論である。彼等は眼前に西洋人の長技を見た。そうして此長技を漢人の物にするには西洋書の翻譯を盛んにし、通譯事業を獎勵し、留學生を海外に派遣することを必要とする事實を認められた。彼等は數ば之を滿洲政府に建白した。勿論彼等の進歩主義は多くの反對論者に妨害された。程朱の學を修めた大家で宰相になつた或る政治家の如きは極力彼等の建議に反對した。さりながら諺にも論より證據と云ふ。何程外國の文明に鈍感な、何程外國の文明を嫌つた滿洲朝廷でも眼前に突き付けられた實物教育の前には多少は頭を屈せざるを得ない。一八六三年(同治二年)に李鴻章の奏議に依り上海に同文館が出来、支那の士君子が始めて外國の言語文章を學ぶことになつたのを手初めとして一八七二年(同治十一年)には留



學生を海外に派遣し、一八七五年（光緒元年）には洋學局を各省に設くべき上諭が出た。斯うして支那人は兎も角も其國に於て西洋學の起るべき端緒を開いたのみならず、西洋流の工藝を起し、西洋流の兵備を修めることに盡力した。左表は其梗概を示すものである。

一八七〇年（同治九年） 李鴻章機器局を天津に設く。

一八七一年（同治十年） 太沽に西洋式の砲臺を造らんとす。

一八七二年（同治十一年） 李鴻章、鐵礦、炭礦を開かんことを奏請す。李又西洋船を購ひ、若しくは製造し、天津、上海の港務を整理し棧房碼頭を建設し、海上保險の法を設け江浙の米穀を海上より北京に輸送すべき方法を講せんことを請ふ。

一八七三年（同治十二年） 輪船招商局を設く。

一八七五年（光緒元年） 海軍を起すの議あり。李鴻章を以て其任に當らしむ。

一八七九年（光緒五年） 獨逸人ハンネケンを招聘して海軍の建設を計る。李鴻章太

沽北塘海口に於て砲臺を建築し始めて天津に電線を通じ、號令を傳達す。

一八八〇年（光緒六年） 始めて甲鐵艦を購ふ。天津に水師學堂を設く。

一八八一年（光緒七年） 公司船（輪船招商局の持船）を創設し、英本國と直接貿易を試む。天津より上海までの電線成る。

一八八二年（光緒八年） 旅順にドックを築く。織布局を上海に設く。

一八八四年（光緒十年） 安南事件に關し清佛戰爭。

一八八五年（光緒十一年） 武備學堂を天津に設く。戰艦定遠、鎮遠及び巡洋艦濟

遠を米國に購ふ。

一八八六年（光緒十二年） 北洋水師を創設す。

是は唯だ著者の手帳に存したものを摘録したのに過ぎない。さりながら是だけ見ても支那の文明、支那の兵備が外面だけは兎も角も面目を一新して來たことが分る。加之此時代には支那名物の土匪も餘り多く起らず、外國との葛藤は唯だ安南事件に關し



て佛國との小戦があつた計りであつたが、此戦争も佛國の方で餘り氣乗がせず、佛國の輿論も飽くまで支那を追窮すると云ふ態度に出なかつたので支那は唯だ安南に對する有名無實の宗主權を失つたのみで、殆んどぐづぐづの結果に了つた。斯うして支那は長髮賊の滅亡以來三十餘年間、滿洲朝廷の歴史には珍らしい小康を得た。長髮賊の亂に風雲に乗じて勳業を建てた宿將老臣及び其子弟後進はさすがに其武勳の威力に依つて支那に秩序を興へた。極東の問題に於ては常に皮相の觀察に陥り易い白人種は此状態を見て、支那は眞に復活した、支那の將來は恐るべきものであると考へた。『支那は眠れる獅子である、さりながら獅子の眠は既に覺めた、四億の人口と無限の富力を持つて居る支那の醒覺は世界列國の均勢に恐怖すべき大威力を新たに加へたものとすべきである』とは白人種、別して英吉利人の支那觀であつた。

(一六) 恐支那人病。

支那人は人種としては眞に恐ろしい人種に相違ない。彼等の同化力の盛んなことは前に記した。さりながら彼等の恐ろしい人種たることは獨り同化力の盛んなことのみではない。彼等の忍耐と勤勉と、如何なる處にも脚を立て、運命を開拓する執着力に至つては流石のアンダロサキソン人種と雖も後へに瞠若たらざるを得なかつた。和蘭人は政治的に瓜哇を征服した。さりながら支那人は人民として瓜哇の利源を開拓した。シンガポールは英國の海上權に依て英國貿易の樞要地になつた。さりながらシンガポールに於て最も繁昌して居る商人は支那人である。北米合衆國の白人種は自ら新大陸開拓の功を誇り、有色人種の平和の侵入を暴力を以て防がうとして居る。さりながら合衆國をして今日あらしめたるは黒人と支那人の努力に待つことが多かつた。別して太平洋岸に於ける米國の開拓は支那人の忍耐と勤勉との賜が其の重なる源因であると言はねばならない。恩知らずの白人種は其暴力を頼んで不仁不義の支那人放逐を敢てしたけれども、カリホルニヤをして今日あらしめた最初の草分けは正直に言へば大部



分支那人の功たることを認めねばならぬ。スラブ人種は早く西伯利に侵入し其廣大な土地に於て政治的に威を取り覇を定めた。しかしながら黒龍江岸のコサツク兵の村でも大工をするもの、煉瓦を積むものはスラブ人種ではなくて支那人である。ウスリ地方には露西亞人の地主が威張つて居る。さりながら其土地を開拓し、原始的の山林原野から兎も角も相當の收獲を得たものは支那人である。ウスリ地方の市日に於て穀物と馬糧を提供するものは支那人である。西伯利の鑛山に働くものも支那人であり、家を建築するものも支那人であり、商人も番頭も、帳付も支那人である。平和の戰に於ては支那人は常に戰勝者である。本書の著者は日露戰爭の前から露西亞征伐論者の一入であつて日本の勇士に露都侵入を獎勵すべく『ペテルブルグに筒むけて、進め大和の武士よ』と歌つたことは古き獨立評論を讀だ人の猶記憶する所であらう。日本の武士は我々の豫期する如く露都侵入を現實にすることが出来なかつた。さりながら見よ。支那の行商は平和の戰爭に於て平然として露都侵入をやつて居るでは無いか。彼等の

風俗は勿論みすばらしい。彼等の慣習は固より文明國人の與に齒するを恥づるやうなものもある。さりながら兎に角、露都まで歩いて行つて支那特産と云ふ織物類を行商して居る。スラブ人種は政治的に西伯利を其手に收めた。彼等は北滿洲までも其領分同様に心得て居る。さりながら支那人は平和の事業を以て逆まに西伯利を征服し、露都に侵入して居る。此支那人の侵入を防禦し得べきものは唯だ政治的に彼等の入國を杜絶するより外にはない。此事實を知つて居る我々は支那人の人種として恐るべきものたることを否定することは出来ない。此恐るべき支那人が兎も角も三十餘年の小康を保ち得て西洋の文明を採用し兵備を修めた。各省には製造局が出来て銃砲の製造が始まつた。造船事業を起して軍艦さへも自ら造らうと意氣込んで居る。西洋武器を使用する神器營の兵四十萬人は堂々として北京を衛ると云ふ。北洋水師の外に長江水師南洋水師も出来た。南京には水師學堂も出来た。況んや當時の極東の海に於ては絶倫無双の姉妹艦、定遠、鎮遠が山の如き重威を以て太平洋に虎視して居る。白人種殊に



英吉利人が支那を恐ろしいものに思ひ、『眠れる獅子は今や覺めんとす』と信じて、しきりに滿洲政府の歡心を買ひ、依て以て露西亞の南下を牽制しやうとしたのは彼等として智慧相應の分別であつた。

(一七) 日清戦争の原因。

支那が若し『覺めた獅子』であつたならば最初に其搏噬に逢ふべき運命を持つて居るものは勿論日本であつた。日本は國としての生存競争を積極的に現代に試みる爲に封建制度を破壊して統一的、有機的の堅固な帝政に復古する必要を感じた。そうして士族階級の愛國者の努力に依て維新の事業を爲すことを得た。封建時代に於ては國際問題も曖昧模糊、有邪無邪の間に放棄して置くことも出来た。しかしながら既に統一的、有機的の帝國となつた上は國際問題も、さう云ふ未解決の状態で濟まして置く譯には行かない。是が爲に露西亞に對して樺太問題を解決した。是が爲に從來薩摩と清

國とに兩屬した形であつた琉球問題を解決して兩屬の形式を破壊し琉球王を日本の華族に列し、尋で琉球島を沖繩縣にした。琉球人民の臺灣生蕃から受け取った損害を償ひ、南洋の航海を安全ならしめんが爲に臺灣島の主權に關して清國の責任を問ふたことから葛藤を生じて遂に日本自身生蕃を膺懲することになつた。國際關係を明白にする同じ必要から日本は朝鮮と日本との位置を確定する爲に從來支那の宗主權を認めて居た朝鮮を自主の國だと宣言し、日本同様の獨立國として取扱ひ盛んに貿易に従事した結果、朝鮮の京城に於て日本と支那の勢力が正面に對立するやうになつた。斯う云ふ國際的關係は日本側から言へばわざ／＼支那の主權、宗主權に犯觸しようとした惡意から出たので無いことは言ふまでもない。漢學に育つた日本人は維新の始から東亞の大局を維持する道は日清兩國の和衷、協力に俟つことの多いことを信じた。支那公使は日本の外務省に歡待され、支那の文人は日本の新聞記者に親しんだ。其時代の日本人は決して支那人を侮らなかつた。さりながら新たに組織的、統一的の帝國として極東



の海に現はれた日本は其政治家の當然の義務として其四隣に對する國際的の關係を徳川時代よりも一層明白にする必要があつた。琉球、臺灣、朝鮮の問題は總て此必要から起つた。しかし支那人側から言へばさうは思へない。廬山の面目は見るもの、位置に依て違ふ。支那人から言へば『日本は琉球を支那から奪つた、無理な喧嘩を臺灣にしかけて清國を脅かした、當然支那の屬國たるべき朝鮮を世界に對して自主の國なりと宣言して公然支那の宗主權を奪つたのみならず、官吏と商人を朝鮮の京城に派遣し、貧弱な朝鮮人を誘惑して支那人の朝鮮に對して持つて居る既得權を侵害しようとして居る、日本の野心、實に恐るべく、惡むべし』と云ふのが殆ど總ての支那人が日本に對して懷いた感想であつた。それでも支那が弱ければ日本としては何の憂ふる所は無。日本は唯だ當然の事をしたのみである。さりながら支那は兎も角も強くなつたらしく見へる。白人種の御世辭は支那を驕らせた。日本の輿論も支那を恐ろしいやうに感じた。著者の友人竹越與三郎君が年少氣銳の政論家を以て『支那論』を書いたのは

恰も其時であつた。我々は其明快の行文と、其議論の常に大所、要所を衝いて居るの感じた。さりながら其論文の底に流れる思想はたしかに歐羅巴の恐支那人病を代表したものであつた。『支那は強くなる。強くならない中に一撃を加へて極東に於ける日本の位置を確實にしなければならぬ。』是が竹越君の『支那論』に漲つて居る思想の波であつた。支那は世界の賞讚に依りて自ら驕り、事毎に日本を抑へやうとした。一八八五年(光緒十年)伊藤博文、李鴻章の名に依て朝鮮出兵に關する天津條約の訂結された年に袁世凱が二十七歳の青年官吏を以て朝鮮公使となり、清國の勢力と言はんよりは寧ろ其先輩李鴻章の勢力を遺憾なく京城に代表し、威風堂々として大國の公使たる地歩を占め動もすれば朝鮮半島に於ける日本の利權を縮小せしむべき態度を取り日本の輿論をして憤慨せしめたのは實に之が爲であつた。支那は驕り、日本は憤り、朝鮮半島は支那と日本とが雌雄を決すべき晴の場所になつた。日清戦争は斯う云ふ國際状態の下に始まつた。



日清戦争の結果は支那は『眠れる獅子』でなく『化石した動物』であることを世界の環視の中に曝らした。支那の新學、支那の兵備、支那の物質的文明の進歩は、要するに政治法律の根本義に觸れない言はゞ義齒のやうな造り付けであつた。日本の維新改革は政治の主義、政治家の階級を根本的に顛覆して先づ新銳の元氣を造り、此元氣から内長的に發達すべく國民の氣質の變化を促した。一言にして曰へば日本の維新は新しい人、新しい空氣、新しい主義に依り國民の耳目を全く一變することを以て始まつた。其根本的改革から新しい日本は生れた。しかし支那の改革は此點に於て全く其意義を殊にして居る。支那は滿洲朝廷を其現状の儘に存し、科擧の制度を其儘に存し、所有支那の古法を殆ど一點一劃にも觸れず、古い頭の人、古い頭の官吏を、古い制度の儘用ひて唯だ其表面だけを新しい學問と新しい兵備を以て粧ふとした。古き皮囊に新し

い酒を盛ることは出来ない。新しい制度の運用は唯だ新しい人を待たねばならない。水と油は一にならない。支那の改良家が古い人、古い制度を以て新しい文明を運用させようとしたのは全然失敗であつた。長髮賊の討平に有功であつた義勇軍は滿洲朝廷に公認され、戦争が濟んで功成り名遂げた後も其幾部分は解散されずに残つて各路の所謂防營になつた。それより様々の新しい試を経て西洋式の銃砲も多く使用され、西洋式の訓練も多少は獎勵され、日清戦争の當時は單純なる數の計算に於ては日本よりも餘計な陸海軍が存在して居る筈であつた。さりながら是は唯だ表面のみのことである。各路の營勇と云ふものは實は名のみであつた。其兵營の經濟を預つて居る長官は『私方に於ては是だけの兵隊を置いてあります』と云て人數だけの費用を取る。しかし事實の兵數は表向の兵數の八掛、七掛位しか居ない。甚しきに至ては三掛位しかないのすらあつた。費用は表向の人數だけ取つて差額はみんな長官の私囊に收めてしまふ。そうして平時は兵士の給養を薄くしてそれから出る差額もやはり自分の懐に入れてし



まふ。中央政府、若しくは上役でも流石に此弊害を全く知らぬではないから、注意深いものが監督の任に當るときは時としては委員を派出して實際の検査をさせる場合もあつた。しかしさういふ時には必ず前觸れがあつてゆつくりやつて來るから兵營の長官は其前に配下の地方から間に合はせの傭兵を募つてちやんと表向の兵數だけを揃へて置く。人口の多い支那では、かう云ふ臨時傭の兵隊を作るのに何の造作もない。檢閲の委員が來る時分には立派に號衣(制服)を着せて置く。委員と言ても所謂科擧に應ずる爲に入股の文を學んで役人になつただけの御坊様であるから號衣を着けて人數だけ揃つて居る上は、ずらりと並んだ兵隊を見て其過半は急拵えの間に合はせだなど、云ふことの直ぐ分りやうは無い。或は兵事に經驗があつたものにした所が古兵も新兵に較べて、言はゞ五十歩百歩の不規律無節制の兵隊に過ぎない以上はどれがどれやら一寸分る譯がない。分つたにした所が多くは例の袖の下を取つて『ウム善し善し』で呑込んでしまふ。そうして委員先生が無事に檢閲を終つて歸れば一時傭ひの兵隊は直ぐ

に解散になる。残つて居る兵隊は無規律、無節制の餉殺しであるから多くは所謂手に雞を縛るほどの力もない、兵士としては殆ど役に立たないものが多い。甚しきに至ては鐵砲を見たことも打たことも無い奴があつたと云ふのは誠に詐のやうな話である。兵役に一定の制限がなく、兵士の年齢にも極まりがないから年寄りも、小供も居る。阿片を喫することが常習で病氣になつて居る奴もある。武器も西洋から買ふ時は必しも悪いもの計りを買ふ筈ではない。可なりの武器を買ひ得べきだけの金は出して居る。しかしそれを買ふ當事者が其中から例の通り横取りして私囊を肥す。そうして廢物同様の、若しくは時勢後れの埒もない武器を買つて渡して置きながら政府へは『精良の品を置入れました』と報告する。支那の政府が年々費す數十百萬兩の軍費は斯うして半は慾の深い役人の懐に收まつてしまふ。斯う云ふ素質の兵士を以てどうして日本軍に勝つことが出來よう。淮軍、奉軍、正定軍など、云つた兵士は西洋式に訓練された精兵だと云ふ評判があつたが是も評判だけであつた。況んや其他の多くの兵士



は前文のやうな事情で戦争になつてから臨時に募集した急拵の間に合せものであつた故に鐵砲の打ち様も知らない、元來臆病な奴であるから日本兵の影を見ない中に無暗に打出して無益の銃丸を費すものも多かつた。日本軍の支那征伐が恰も無人の境を行くが如く、さつぱりと手筈のしない弱敵にのみ逢つて意外の大勝利を博したのは自然の勢であつた。

(一九) 日本軍の勝利は當然のみ。(二)

戦争には始から無用の人間と云ふべき年寄、小供の多く雜つて居る兵士、それでなければ破落戸同様の遊民が急拵へに兵士になつた奴、それがどうして兵器の精良な、訓練の行き届いた、さうして年齢に於ても、健康に於ても國民中の精銳を集めたと言ひ得べき日本軍に齒向ふことが出来よう。まだしも海軍だけは支那で、多少の訓練があつたから日本海軍に對しても少しは戦争らしい戦争をすることが出来たが陸軍に至て

は全く物になつて居なかつた。滿洲政府の外面を粧飾した文明主義は列國環視の中央に於て遺憾なく其愚劣な正味を現はした。總ての文明は精神的であらねばならない。滿洲政府は政治、法律、教育の根本に向て何等の改革を加へないで技藝の末だけ唯だ西洋の文明を真似ようとした。人を造らないで、たゞ兵器と軍艦を買つて真似事ばかりの西洋式を採用した。滿洲政府は祖先以來の制度であつた武舉と云ふもので將校を採用した。八股の文に熟したものゝみを文官に採用する科舉の制度が善い官吏を造る道でない愚劣のものであつたことは勿論であるが、將校を採用する武舉も、それに輪をかけて愚劣のものであつた。文明の世に弓箭、刀石の藝を試み、それに應じ得た奴が將校に採用されると云ふ武舉の法の馬鹿々々しいものたることは此處に改めて説く必要はない。斯う云ふ愚劣な制度の生んだ自然の結果として支那人の兵學の智識は何時までも極めて低級なものであつた。一九〇〇年(光緒二十六年)の義和團騒ぎの時でも支那人の將校には西洋式の訓練は、清國の舊式に劣つて居ると信じて居たものもあ



る。銃砲よりも刀や矛の方が有効な武器だと信じて居るものもあつた。一九〇〇年は即ち明治三十三年である。明治三十三年に於てすら支那の兵學の智識は斯様に愚劣なものであつた。日清戦争勝敗の理由は一言にして盡さる。精神的文明が模倣的文明に勝ち、人を中心とした文明が物を中心とした文明に勝ち、有智が無智に勝つたのである。

(二一〇) 支那將さに列強に分割されんとす。

恐支那人病は是に於て世界の群集心理から一掃された。支那が土耳其に比しき垂死の國であることは列強の耳目に明白になつた。支那は眠れる獅子ではない。支那は永久に覺めさうもない。果して然らば三十年間、遠慮して極東に領土の擴張を試みなかつたのは馬鹿馬鹿しい。『いざ極東の大きな餌物を分割して呉う。』是が『世界は我が領分だ』と殆んど先天的に自負して居る白人種の極東に對する新しい感情であつた。そう

して無慈悲な支那分割は着々として事實に現はれて來た。獨逸は青島と膠州灣を、露西亞は旅順を、佛國は廣州灣を、英國は露西亞の旅順に對抗する爲め威海衛を、いづれも滿洲政府から強て租借した。支那の領土の各部に於ける優越權、勢力範圍、特定地、不割讓の約束など、云ふことの競争は列國の間に始まつた。是れ眞に他人の田地に榜示の杭を打つて我物顔をする横道者の所爲に似たりと云ふべきである。斯うして支那の分割は眞に眼前に迫つた事實であつた。世界の形勢に對して鈍感な支那人も流石に此に至ては鬼怡を懷かざるを得なかつた。當時の湖廣總督であつた張之洞は獨逸が膠州灣を取つた時『たとへ中華が外人の爲に分割されても、残らず取られることはあるまい、滿洲朝廷は猶ほ小朝廷として残つて居るであらうから予も獨ほ小朝廷の大敵たることを失ふまい』と言つた。強いものは憤慨し、弱い者は恐怖し、支那人の支那分割を懸念する神經は可なり鋭敏になつた。米國が一八九九年(光緒二十五年)を以て列強に向つて支那の領土保全、機會均等を提議し其賛成を得たのは恰も支那人の此



恐怖の時機に投じたものであつて支那人は深く米國人の好意を感謝した。さりながら自國の領土保全も纔に他國の協議に依て維持されるやうでは、支那は事實に於て既に其獨立を失つたのである。支那の詩人は『人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂、他人に頼る』と云つた。支那の位置は他人の恩恵に依頼して辛うじて其獨立を保ち得る弱い女性と同様になつた。米國は是に依りて支那人より良友を以て待たる、ことを得た。しかしながら支那分割の大勢は決してかゝる單純な外交上の辭令に依て遮斷され得べきものではない。實際領土保全の提言が列國に依て承諾された時でも支那分割の事實は着々として其歩を進めた。

(二二) 變法自強の失敗。(一)

是に於て支那人の間にも始めて根本的改革の必要を感じたものも出來た。『船や大砲を西洋流にした所で、西洋風の練兵を行つた所で、それが唯だ表面ばかりの附焼及では

何にもならない。日清戦争の敗北は明かに此事實を證明して居る、今や根本的改革が必要である、政治、法律、教育の根底から全然一變しない限りは列國と對抗して大清國の獨立を全くすることは出來ない』とは此改革主義者の主張であつた。そうして此改革主義の最初の唱道者が廣東の人康有爲であつたことは不思議ではない。何故なれば前に言つた通り嶺南地方には新思想の起るべき情況が具備して居たからである。古から支那の南北では思想、感情が違ふ。老莊學は南支那の産物であつて北支那の産物ではない。神農學と云ふ一種の農業社會主義を唱へる學者が南支那から出て北支那の學者と其主義を討論したことは孟子にも見えて居る。老莊若しくは孟子時代の南支那は今の揚子江沿岸であつて、嶺南は其頃は異人種の藪窟らしかつたから、今の嶺南の思想、感情を以て、古の南支那の思想、感情と同じものであると云ふことの出來ないのは勿論であるが、兎も角も今の支那でも南北の思想感情には大きな差違がある。別して嶺南人(廣東、廣西)の空氣は中清とも北清とも違ふ。彼等の思想は世界的であ



る。彼等は世界を股に掛けて旅行する。文明國の言語を解し、若しくは語り得るものも多し。彼等は他の漢人に較べれば多く世界的智識に富み、多く漢人固有の保守主義に囚はれない傾向がある。康有爲は此氣質を代表した一人であつた。勿論彼は他の嶺南人に比して特別に世界の事情に通じて居ると云ふ程の新智識があるのではない。彼は他の嶺南人の或るものゝやうに外國の文學に通じては居ない。彼の世界的智識の資料は上海あたりで外國宣教師などが傳道の暇に支那の文人に口授して作らせた地理、歴史の翻譯書、日本文から翻譯した政治、法律書などに過ぎない。此點から曰へば學問淵博の名を博した康南海先生の世界的智識は極めて淺薄なものである。さりながら、それでも彼は兎に角漢人の中に出れば新智識である。歐洲通である。況んや其文才は非凡である。其豊富な想像と其明快暢達之文とは眞に人心を鼓動するに足りる。後は一八八四年(光緒十年)の清佛戰爭に依て眼前清國の軍備の脆弱なのを見た。そうして支那の屬國であつた安南が全く佛國の物になり了つたのを見て憤慨した。彼は此の

時に於て滿洲政府に上表して世界の形勢を論じ、露國と日本の野心を説き、朝鮮を保護して清國の藩屏とする必要を論じ、今に及んで國家の政治を立直さなければ數年の後には堂々たる大清帝國はその獨立すらも保つことは出来まいと論じた。一八八八年(光緒十四年)には彼は布衣の書生を以て北京に上り闕下に伏して更に國家の大計を痛論した。彼は日本近代の歴史を研究した結果、日本の進歩を驚歎し、其進歩の原因は實に維新の改革に依りて根本的に政治、法律、教育を革新し、人と、法とを全然一變したことに有ることを知り、滿洲朝廷も日本の維新に倣ひ、政治、法律、教育の根本から改革しなければならぬことを主張した。所謂變法自彊の叫びは日清戰爭より六年前の此時に於て既に彼に依て叫ばれたのであつた。さりながら列國の諛言に誘はれて自國の強大なることを自負し、李鴻章の兵制改革さへも今年以來は一切中止し、船も機械も新購入を止め、「吾既に強くなれり」との一種の驕慢病に罹つた滿洲朝廷は勿論一書生の慷慨論に耳を傾くべき氣色はなかつた。彼は其策論が當局者の顧みる所と



ならなかつたのに落膽し怏々として廣東に歸つた。さりながら彼の文章、識見は此時から多少支那の進歩主義者に認められた。尋で日清戦争が起つた。彼の先憂は着々として事實になつて現はれた。光緒皇帝は此書生論に耳を傾けた。皇帝の周囲の人物にも彼の議論に同情を表するものが出来た。そうして變法自彊の新主義は日清戦争の終つた後、光緒皇帝を中心とする宮中の努力に依り事實として現はれかけた。一八九七年(光緒二十三年)獨逸は膠洲灣を占領し、支那分割の危機が眼前に迫るに至りて變法自彊の必要は益す進歩主義者に認識された。康と其同志者梁啓超は進歩主義者の同情に包まれた。一八九八年(光緒二十五年)の清曆正月に光緒皇帝は王大臣に命じ、賓禮を以て康有爲を總理各國事務衙門に延き天下の大計、變法の事宜を問はしめた。漢人の間に最も人望ある老政治家張之洞も康有爲の人物を稱賛して其言の大に用ひられんことを希望した。進歩主義の政治家を以て知られた直隸の按察使、袁世凱(時に年四十)も勿論康と梁との二人に同情を表した。斯うして變法自彊は事實となつて現はる

べき瀬戸際にまで進んだ。さりながら不幸にして變法自彊の政策問題は西太后對光緒皇帝の間に横はつた宮中の暗闘と聯絡した。そうして變法自彊その物が直ちに西太后派の滅亡を意味すべきものゝ如く見へた。これが爲に西太后と西太后派は變法自彊に強い反感を持つやうになつた。そうして其年清曆八月に於て支那人の所謂戊戌政變と云ふクーデターが西太后派に依て行はれ、光緒皇帝は囚人同様の幽閉の悲境に陥り數年前に兎も角も政を皇帝に還した形式であつた西太后は再び公然簾を垂れて政を聽くやうになり、多くの改革黨は殺され、康有爲は倫敦に亡命し梁啓超は日本に奔り所謂變法自彊の運命は全く失敗に歸してしまつた。

(二二二) 變法自彊の失敗。(二)

袁世凱の反對黨は言ふ。『袁世凱は始め康有爲と梁啓超に同情し光緒皇帝の變法自彊を賛成し、已むを得ざれば西太后派の蠢動を抑壓し、是非とも國是を一定しなければ



ならないと秘密に約束した。光緒皇帝は袁世凱の密語を信じて改革を断行しやうとした。果然、西太后派と保守主義者とは變法自彊その物を以て彼等自身の存在を危くする危険の事業だと感じて反動の大波瀾を起した。皇帝は袁に其新軍を率ゐて入京すべきを命じた。袁は是に於てルビコンを渡るべき乎、渡らざるべき乎の危機に立つた。そうして用心深く、自保に巧みなる彼は寧ろ其友人を賣り、光緒皇帝を賣るも西太后及び西太后派に媚びることの利益なるを覺つた。彼はシーザルの如くルビコンを渡ることを敢てしなかつた。そうして逆々に西太后に皇帝派にクーデターの計畫のあることを密告した。西太后派は是に依て武力を以て自ら守ることの殆んど正當防禦たることを覺つた。戊戌の政變は斯うして起つた。そうして袁世凱は此一舉に依て西太后の親任を博し得た』と。我等は是が果して事實なるや否を知らない。さりながら皇帝派に若しクーデターに依て西太后派を抑へようとする計畫あつたとするならば、そう云ふ計畫は支那の當時に在ては極めて大膽な、極めて突飛な空想に過ぎないと云は

なければならぬ。西太后は兎も角も支那に於ける近代の女傑であつた。彼は勿論則天武后ほどの英雄ではない。さりながら彼は武后ほどの失行もない。彼は女ながらも曾國藩、李鴻章、張之洞等の人物を駕御し得て、敢て異言なからしめた。支那の長い間の小康は此女傑に待つことが多い。中央の大官、各省の督撫も目星しい人物は多く西太后の黨派である。西太后を倒せば支那は政治的中心を失はねばならぬ。總ての改革は先づ根本を確立すべきである。變法自彊の主張者が先づ兩宮の調和を計り推譲と犠牲の精神を宮中に奨励し、合躰同心して改革に従事したならば改革は或は彼等の希望した如く事實となつて現はれたかも知れない。事、此に出でずして宮中の暗闘に加勢し若しくは宮中の暗闘を利用し、名を變法自彊に假りて西太后派を倒さうとしたのは失策の甚しいものと言はねばならない。如何なる場合に於ても私心が先に立つのは支那人の通癖である。變法自彊の主張者、贊成者は公の事を爲すべき場合に於て不幸にして餘り多く私意を混じた。變法自彊は公けの仕事である。兩宮の暗闘は私心であ



る。公心と私心とは交叉して分ち難きものになつた。そうして是が爲に變法自彊の計畫は遂に無益の血を流し、西太后派が再び威を取り、霸を定めて支那の政治界を壟斷するに終つた。強きに靡く支那の政治家は一人として不幸なる皇帝の爲に西太后の威力に對して敢て抵抗を試みるものは無かつた。君子人の名ある張之洞すら始は康有爲、梁啓超の同情者らしく振舞つたに係はらず、政變後は頓に其態度を改め極力康學の危険思想たることを攻撃した。

(二三) 康學は廢すべし、變法自彊は已むべからず。

さりながら變法自彊の主唱者は失敗しても、康學は危険思想の烙印を押されても光緒皇帝は幽閉されても變法自彊其ものは支那に取つては眞に必要な問題であつた。滿洲朝廷は二の點からは非とも根本的改革を必要とした。其一は康學の失敗から著るしく焚えて來た革命論に對して人心の波瀾に堤防を供することであつた。康學は決して康

有爲、梁啓超の二人の私有物でない。康學が光緒皇帝を動かして實際の政治問題とならうとしたのも、それが多くの同感者を支那全國に持て居た爲めであつた。支那には日本の意味に於ける輿論はない。しかしながら官界に志を得ない所謂不第の秀才は澤山居る。支那の平民は政治に無頓着である。しかしながら支那には謠言、飛語を作つて一部の民心を煽動せしめ得べき言はゞ無賴の人民は非常に多い。長髮賊の亂の時に募集した義勇軍の中に、戦が濟んでから、解散されたものが、今でも哥老會と云ふ一種の秘密結社のやうになつて揚子江の上下游に蔓延し機會があれば騒ぎ出すことは支那の國情の何ものたるかを示す善い標本である。一言にして曰へば支那は萬事整頓して居ない極めて落付の悪い國である。變法自彊の説は日本の意味のやうな輿論ではない。支那人の一般の信念には康學は勿論彼等を驅りて革命に赴かしむべき程十分根を張つて居ない。さりながら既に多くの同感者を得て皇帝をさへ動かした程であれば其聲は(其意義でない)以て支那を動かすに足りる。絲を以て空中に釣つてある物は指一



本でも動かすことが出来る。謠言の起り易い國、土匪の國、給養の不足の爲に兵士に不平の多い國、其兵士も半ば土匪に均しい國、政府の威力の輕んせられた國の人心は空中に釣つてあるものゝ如くである。之を定めることは六つかしいが之を動かすことは容易である。康學の失敗を見た康學の同情者は滿洲朝廷の與するに足らざるを憤慨した。康學の徒として滿洲朝廷に惡まれ或は殺され、或は海外に遁れたことは彼等の同情者を驅つて健穩な改革論から革命主義に轉せしめた。滿洲朝廷は斯う云ふ危険思想に對して民心の動搖を防ぐ爲にも自ら改革しなければならぬ。況んや日清戰爭以來明白の事實となつて現はれて來た白人種の支那分割は滿洲朝廷を張之洞の言つたやうな小朝廷にしなければ已まない勢である。此二の事實は滿洲朝廷及び滿洲朝廷の忠臣を以て自ら任ずるものに根本的改革の已むべからざることを感せしめた。張之洞は此意味に於て『勸學論』を書いた。此書は新聞の論說ほどの小冊子ではあるけれども穩厚の君子人たる彼の心にも改革の波の寄せたことが分る。彼は其『正權』の篇に於て民

權論の勃興に應じて上下の權を正しくすべしと論じた。『益智』『遊學』『設學』『學制』『廣譯』『變法』『變科舉』『農工商學』『兵學』『鑛學』『鐵道』の諸編に於て新智識の輸入の必要なこと、科學の制を改むべきことを論じた。そうして『知耻』の篇に於て支那は日本に及ばざることを耻づべしと言ひ、『知懼』の篇に於て支那は印度たることを懼れよと言つた。彼の議論は頗る微溫的であつたけれども滿洲朝廷の忠臣を以て自ら任ずる彼すらも其中心に於て變法自彊の已むべからざることを認めたと此一篇が善く之を證して居る。

(二四) 北清事件。(一)

斯うして所謂戊戌政變に依て康學を排斥した滿洲朝廷も其心に於ては既に變法自彊の已むを得ざるを覺つた時に、(若ししか言ふことが言過ぎならば)已むを得ざるを覺りかけた時に所謂義和團騷動なるものが起つた。此騷動は一言にして曰へば徳川時代の



百姓一揆に似たものだ。そうして或る意味から曰へば支那の將來に對して一種の暗示を與へたものとも見ることも出来る。日本人は支那には日本に於て見るやうな忠君愛國の感情は全く無いと云ふ。成程所謂士君子の階級に於ては自保、自足の念のみ盛んであつて日本のなうな猛烈な愛國心を發見することは出来ない。さりながら支那の平民は決して外國人の橫梁跋扈に對して憤慨せざる意氣地なればかりではない。此事實を我々は支那の近世史に數ば起る教案なるものに於て發見する。教案と云ふのは言ふまでもない、支那の耶穌教徒と土人との反感が昂上して白人宣教師の建てた教會堂若しくは宣教師自身に危害を加へた爲に起る國際問題である。支那の政府は數ば此問題に惱まされた。一八七〇年(同治九年)に起つた天津教案の如きは其結果として遂に直隸總督曾國藩の免職を見るに至つた。教會堂を倒し、白人宣教師を殺し、是が爲に國際問題を起すと云ふことは支那全體の保全を計る政策から言へば勿論愚劣な仕事と言はねばならない。現に獨逸が膠州灣を取つたことも山東省の人民が獨逸の國籍に屬す

る二人の白人宣教師を殺したと云ふことが獨逸側の口實になつて居る。しかし實際支那に於ける白人宣教師の行爲には支那人民として默視し難い無法のものがある。我々は此處に支那に於ける白人宣教師の歴史を述べる積ではない。唯だ一言すべきは支那の白人宣教師は單純なる福音の宣傳者ではないことである。彼等は支那と其本國との條約に依て彼等の身體と教會と傳道との自由を保證されて居るのを楯とし、支那の内地に入り込み、恰も他人の國に獨立の城塞を築いた如く振舞ふ。日本の耶穌信者は普通の良民であるけれども支那の所謂教民は此獨立の城壁に屬した治外法權の人民である。泥棒をしたり、間男をしたり、不義理の借金をしたり、詐偽を働いたりして良民に齒されない奴も白人宣教師に媚びて罪を懺悔し、信仰の告白をさへすれば教民になることが出来る。教民になりさへすれば彼等は漢人でありながら實は外國人になつたも同様の利益を受ける。彼等から損害を蒙つた良民は知縣、知府に訴へて彼等の罪を訊そうとすれば彼等は宣教師に泣き付く。宣教師は土民と知縣が無罪の耶穌教信者を



七八  
虐遇するものとのみ妄信して知縣の廳に押掛け猛烈な談判を試みる。國際法の心得のない、世界の形勢を知らない、宗教と政治の區別さへ分らない、そうして極端に外國人との交渉の起ることを恐怖する知縣は白人宣教師に掛合はれれば小さくなつてしまふ。そうして良民は結局其損害を賠償さるべき道を失ふ。悪黨はそれを善いことにして益す教民の皮を蒙る。一言にして曰へば白人宣教師の建てた教會堂は日本の元龜天正時代に跋扈した門徒寺よりも甚しい悪黨の隱家であつた。我々は白人宣教師に惡意があつて斯う云ふことを書くのではない。唯だ事實を語るのみだ。勿論白人宣教師自身に立入つて見たら其濟世救民の宗教事業が斯んな結果にならうとは夢にも思はないことであらう。しかし其所が人種の相違から起る悲しさである。我々は十餘年間、日本に住居し、日本語を善く話しながら日本人の内情はちつとも分らない宣教師あることを知つて居る。白人宣教師は自分は耶蘇教の福音を支那人に傳へるものと信じて居ながら其實良民の齒しない悪黨の隱家を作つてそれを保護して居る。支那

七九  
の役人は國際問題の起ることを恐れて教民の横暴を見て見ぬ振り、聞いて聞かぬ振りをして居る。しかし支那の平民はそれを我慢しては居ない。彼等は世界の形勢に對しては元來全く盲目である。さりながら盲目なるが故に彼等は白人種を恐れない。彼等は教民の横暴を『無理が通れば道理が引込む』と云つて黙つては居ない。彼等は官憲が教民の罪を罰することをしない故に自ら起つて私刑を教民に加へなければならぬと信じて居る。合衆國の白人は立派な法廷があり、立派な官憲のある國に居ながら猶ほリンチと云ふ私刑を黑人に加へて居るぢやないか。支那の平民が國民でありながら非國民の態度を敢てして居る教民を寛容するとの出来ないのは無理はない。別して此感情に油をかけて其火を煽るものあれば猶更である。直隸、山東地方には昔から拳匪と云ふ一種の團隊がある。彼等は前に記した通り支那の國定忠治、熊坂長範である。彼等は劍と棒とを使ふことを練習した一種の武藝者であつたから其武藝を頼んで悪いことも勿論したが同時に郷里の平和を維持する機關にもなつた。徳川時代の關東平原の



八〇  
中で所謂天領と云ふ幕府の直轄地は八州手代、代官手代など、云ふ小數の官吏が稀れに村落を廻はる外、平時は無警察、無裁判、極端に言へば無政府の状態であつたから親分、口利など、言はれた長脇差が威張つて居た。博奕を常習とした彼等は決して良民であつたとは云へない。さりながら命知らずの彼等は社會の秩序を破壊する力を持つて居た代りに其力を轉用して社會の秩序を維持することも出来た。所謂長脇差が長い歴史を持つて徳川幕府の滅亡まで亡びなかつたのは是が爲である。拳匪の山東、直隸に於ける位置は此長脇差に善く似て居る。彼等の善き半面を言へば其武藝を以て身を保ち郷里を守護したことである。彼等は曾國藩の直隸總督辭職に終つた天津の教案以來、教民に切齒して居た。教民が白人宣教師と其背後の強國の力を笠に着て良民を侮り壓し、『郷里に武斷す』とも云ふべき暴威を揮ふに對して彼等は猛烈な憎惡の念を焚やした。山東、直隸には白人宣教師が多い。從て教民も多い。教民が多ければ之に對する拳匪の憤慨も昂上する。斯うして拳匪と教民とは恰も壘を對して相向ふ敵國の

如き態度を取るやうになつた。獨逸の膠州灣占領は教民と拳匪との反感に更に強い熱を加へた。拳匪は遂に起て攘夷の斷行に従事した。彼等は其兵を起した理由を三の標語に約した。曰く『扶清』、滿洲政府を助けて何處までも國家の統一を維持しなければならぬと云ふのである。彼等は無學である。南の支那を刺撃した西洋思想は北清の彼等には馬の耳に念佛である。彼等には南人の西洋臭い議論は分らないのみならず、彼等は康有爲、梁啓超が國政を西洋流に改めやうと試みて失敗し外國に遁げて行つたと聞いて、いづれ外國から兵を連れて來て清國政府を脅かすことさへあらうと信じた。坊主が憎くけりや袈裟まで憎いと云ふ諺もある。白人宣教師を惡み、教民を惡んだ彼等は南方に勃興した新學もやはり耶蘇臭い異端として、それと相容れなかつた。斯うして彼等は何處までも滿洲朝廷を古の儘に維持しやうと云ふ保守黨になつた。曰く『滅洋』、天津教案より膠州灣割據に至るまで彼等は外國人の横暴を目撃して久しく憤滿不平の氣を貯へた。彼等は西洋人の恐ろしいことを知て居ない。世界の形勢に對しては



勿論何の知識もない。さりながら眼前に外國人の支那を分割せんとする勢を見たる彼等は個人としては何者も恐れない虻のやうに強い武者である。彼等は官吏の外國人に對して意氣地なさを憤り是非とも自身の手で攘夷を行はなければならぬと決心した。曰く『仇教』、彼等の目指す當の敵は白人宣教師の威力を假り同胞を侮る教民である。其教民の信仰を粧つて居る耶蘇教である。彼等は是非とも教民と耶蘇教とを全滅させなければならぬと考へた。彼等は斯うして『扶清』『滅洋』『仇教』の三標語を其運動の目的として兵を山東に擧げ先づ鐵道を破壊し、耶蘇教會を焼打にし、世界の大勢と戦ふべく背水の陣を張つた。此騒動は一八九九年(光緒二十五年)には既に其端緒を開いて居たが一九〇〇年(光緒二十六年)に至て其絶頂に達した。日本の新聞紙に北清事件とも言ひ、團匪の騒動とも云つたのは則ち是れである。

(二五) 北清事件。(一)

諺に『盲人は蛇に怖ず』と云ふ。又『螻蛄は隆車に向ふ』と云ふ。拳匪が世界の大勢に抗して攘夷の斷行を試みやうとした無智無謀の舉動は眞に惑むべきである。さりながら我々は拳匪の運動に於て美はしい支那魂を發見した。支那の士君子は自保の道に巧である。彼等は時世の難に逢へば直ぐ身を隠してしまふ。彼等は身と家との危険な位置に立つことを避け國家、社稷の覆亡を見ながら『吾關せず焉』を極め込む。さりながら是は士君子の常態であつて必しも一般の人民の狀態ではない。一般の人民は誠に國事に冷淡の如く見へるけれども教養次第で彼等は愛國者の如く死ぬことが出来る。拳は政府の祿を受けたものではない、政府に養はれたものでも勿論ない。しかし彼等は政府の一兵を借りず、政府の一粟を費さずして猶ほ其攘夷熱の爲に奮闘した。彼等の少年すら干戈を取つて群がり來る外國人と戦はんとした。『三軍も帥を奪ふべし、匹夫も志を奪ふべからず』と孔子の言つたのは此事である。我々は是に依て支那の平民も教育次第で立派な愛國者になり得べきことを學ぶを得た。拳匪は一種の迷信に依



て其仲間を堅めて居たと云ふ。たとへ迷信にもせよ、妄想にもせよ人をして國の爲に死を甘んせしむべく教育した効果は偉大である。我々は拳匪の騒動に依て支那人の美しい半面を見ることが出来たやうに感ずる。拳匪の評論は是だけにして我々は更に筆を進めねばならぬ。滿洲朝廷の中には此時でも勿論保守分子が多い。李鴻章は一生の間此保守主義を代表した儒生の爲に罵言讒謗の目標になつた。彼の文明政策が單純な皮相の模倣に留まり日本軍の打撃に依て其弱點を曝らし出したのも實は斯う云ふ保守黨の空氣が濃厚であつて彼に自由の手腕を揮ふことを許さなかつた爲である。李も自ら其弱點を知つて居た故に日清戦争の始まる前にも成るべく戦争を避けやうとした。彼は是れが爲に英國と露西亞に調訂を求めやうと提議した。しかし日本は其要求を容れなかつた。そうして『極東の事は極東自ら決すべきである、日清兩國の問題は日清兩國の間に於て纏まりを付けたい、他國を其間に雜へる必要はない』と主張した。『日本能く爲す事なし』と見縊つた清國は騎虎の勢、遂に戰に赴かざることを得なかつた。

た。その開戦の結果は李鴻章の懸念したよりも太甚しい支那側の大敗北に終つた。滿洲朝廷の保守黨は支那の敗北を憂ふるよりは寧ろ李鴻章の『ハイカラ政治』の失敗したことを愉快に感じた。『それ見よ、外國の眞似をしたとて、何の益もないじやないか、西洋式の訓練よりはやつぱり支那式の訓練の方が善い、李鴻章の敗北は善い見せしめだ』など、言つた。彼等は其保守主義に依て李鴻章の進歩政策を不具にし、無能力にして置きながら其不具、無能力の爲に李鴻章の事業が日本軍に破壊されたのを見て、深く李鴻章を攻めた。彼等の頑愚は實に驚くべきである。彼等の中にも中央政府に勤めない地方官には最も甚しい愚物があつて『西洋人は海上の勇者ではあるが陸を歩くことは出来ないから、若し公使館、教會堂を破壊すれば西洋人はもう支那に來なくなるであらう』と眞面目に信じて居たものすらあつた。北京に勤めるものでも『洋行歸りの言ふことはみんな妄誕だ、總理衙門(外務省)の役人はみんな醜惡な外夷の風に汚された奴だ』と心から信じて居たものもある。北京朝廷には斯う云ふ保守黨が多く、



剩へ保守主義、反動主義の盛んなのを利用して自身の政治的位置を高めやうとする野心家も多かつたので、獨逸の膠州灣割據以來、支那人に排斥熱の起つたに乘じ、拳匪と結んで攘夷を行ひどさくさ紛れに火事場泥棒を働かうとしたものもあつたので拳匪は愈よ勢を得、滿洲朝廷は公然拳匪の忠義を稱揚し、滿洲政府は遂に事實に於て世界の列強に向つて開戦した形になり、北京に居た外國公使は將に悉く虐殺されんとした。列國は外交界に有勝な小面倒な辭令を交換した後聯合軍を作り、辛ふじて拳匪の暴威を抑へ諸公使の危急を救ひ北清の秩序を恢復した。此聯合軍の中に於て日本軍の活動が最も有効であつたことは勿論である。若しも列國が始から日本軍隊の單獨運動を承認したならば、日本に取つては言はゞ近火の事であるから、もつと早く出兵して大事にならない中に始末を付けることが出来たかも知れない。不幸にして國際間に有勝ちな猜疑心は日本軍の神速なる運動を妨害した。それでも諸公使の虐殺せらるべき運命を轉じ北清の秘序を割合に早く恢復することを得たのは先づ以て意外の幸福であつたとも言はねばならない。

(二六) 變法一轉して革命戰となる

拳匪の騒動が已むと共に滿洲政府の保守黨は全く聲を收めた。そうして變法自強の政策が愈よ事實となつて現はれて來た。

一九〇一年(光緒二十七年) 張之洞、劉坤一連署して國政改革の已むべからざることを建議す。前事の失を監み、迂繆の談を破り、外國の長を取り、中國の短を補ふべきことの上諭を發す。科擧を廢す。

一九〇五年(光緒三十一年) 立憲政治を行ふべき準備として、載澤。李盛鐸。尙其享。端方。戴鴻慈等を憲政出洋大臣に任じ歐米に派遣す。

一九〇六年(光緒三十二年) 憲政出洋大臣歸る。立憲豫備の上諭を發す。官制を改革して立憲政體に適合せしめんことを計る。



滿洲朝廷の改革事業は着々として進んだ。諮議局が出来た。法律編纂委員も出来た。憲法の大綱も既に略ぼ形が出来た。資政院も開かれた。是で其儘、順に進んで行つたならば支那を改革するは容易のやうに思はれた。さりながら法は或は一日で改革することも出来やうが人を入れ代ふことは容易でない。曾國藩、李鴻章、左宗棠、江忠烈等の起つた時代には長髪賊と云ふ相手があつたから此亂民を退治する必要の爲に無数の人才が頭を出して兎も角も人物の入替が出来た。しかし拳匪の騒動や、近頃起つた國際問題は人才をして風雲に乗じて起つた好機會を得せしむる程に永續のものではない。それ故滿洲人は依然として政權の奥に坐はつて居る。紙の上の變法自強は事實に於て支那の國勢を變ずるに足りなかつた。

(二七) 日本學の感化。

どうして革命戦争が起つた乎。是に就ては更に悉しい説明を要する。我々は先づ議論

の順序として『日本學』の感化を説かなければならない。漢人は外國の文明に對して鈍感である。漢人が外國の文學を理會することは日本人が外國の文學を理會するよりは餘程むづかしいらしい。歴史の示す所に依れば金人、遼人、蒙古人、朝鮮人、日本人が漢文を理會し、若くは漢文を作り得るに至ることは餘りむづかしいことでは無かつた。しかし漢人自身が外國の文學を釋譯し得る力は極めて遲鈍なものらしい。或人は魏晉時代から唐に掛けての佛敎大小乗の翻譯を見てあれ程の大きな翻譯事業が出来たのを見れば漢人と雖も他國の文明を理會する力が薄弱だとは言へないと云ふ。さりながら、我々の研究した結果に依れば世界文學史上の大驚異と云ふべき支那に於ける佛典の翻譯事業は決して漢人の功に歸すべきものでない。多くは印度人若しくは印度の文明を漢人に媒介した漢人の所謂胡人の手に成つたものである。其趣は明末に支那で出来た曆書天文書若しくは世界地理書が白人宣教師の手に成り、清朝の全盛時代に出来た數學、科學を始め凡そ西洋の智識を支那人に傳へた漢文の書物が大抵澳門あた



九〇  
りを根據地として西洋人に因つて作られたことに似て居る。近代及び現代でも支那人自身の手になつた西洋書の翻譯と云ふものは勿論絶無と云ふことは出来ないが其數は雨夜の星のやうに少い。漢文を以て西洋文明を支那人に紹介する書籍の稍や見るに足るべきものは大抵は直接間接に白人宣教師の手を経たものである。日本の翻譯書は始めから悉く日本人の手で出來て居る。西洋人が日本に來て日本人の爲に翻譯したものなどは殆んど無い。維新前後には少しは有つたが數ふるに足りる程ではない。私は此處に日漢文明の根底に大差のあることを發見する。勿論支那人と雖も外國語の分るものがないとは言へ無い。外國語を理會し、外國語を話す力に於ては支那人は或は日本人よりも優つて居ると云ふことが出來よう。しかしながら言語を語ると云ふこと、文學を理會すると云ふこと、は同じ仕事ではない。外國人の言語を理會し、彼等と俗談平話を交へ得ると云ふことは低級な腦力でも出来る。教育に於ては何等の素養のない南洋の土人でも巧みに外國語を話すものが多い。無智の小兒も驚くべき精確の程度を以

て自國の語を語り得るではないか。しかし文學を理會する力は單純な言語の才とは全く違ふ。心を以て心を理會するのである。自國の制度、文物、風俗、習慣を以て他國の制度、文物、風俗、習慣に會通するのである。漢人は此點に於て日本人に比すれば殆んど比較にならない程の遲鈍を示して居る。我々は此處にどうして斯様に漢人が外國の文學を讀破する力に乏しいかと云ふ其原因を論じやうとするのでは無い。唯だ兎も角も漢人は白人種の文學を解釋する力が全く缺乏して居るとまでは言へないが、兎も角も極めて薄弱である事實だけを語つて置く。總ての改革は精神的である。如何なる政治的進歩も其源を文學に發しないものは無い。漢人が多年白人種と貿易をして居ながら、澳門、香港、上海あたりの白人生活を見ながら何等の感觸も無く、何等の刺撃も蒙らず、『爾は爾たり、吾は吾たり』と云ふ態度で自國の風俗、習慣を固執し、其隣人たる白人種から何等の學ぶ所が無かつたのは彼等が白人種の文學に對して殆ど無交渉であつたからである。日本の維新は西洋文學の研究に始まつて居る。ミルの自



由の理、スベンサーの代議政體、ブルンチュリーの國法論を讀み得た日本の學生は日本人を憲政時代の國民として造り上げた。支那には不幸にして世界の文明を其心の底に徹せしむべき文學が無かつた。しかし斯様に外國の文學に對して極めて鈍感であつた漢人は獨り日本文を理會することに於てのみ比較的敏捷な能力を示した。張之洞、劉坤一が滿洲朝廷に建白した上表文に依れば『支那學生は容易に日本文を理會する、文才のあるものは半年位、日本文を學べば翻譯も出来る』と書いてある。漢人の書生中には僅に半年で日本文を讀破し得るものもあると云ふのは例の支那流の誇張手段とも言へる。さりながら漢人が西洋書を讀むに比べれば幾倍の容易さを以て比較的短日月の間に日本文を理會し得ることは事實である。日本人としても驚くべき事實である。日本人としての我々は、實は此點に於て久しく日本の支那に對する良好の位置を忘れて居たと云つても善い。日本語と支那語とは言語の系統が全く違ふ。日本語と歐洲語とも勿論言語の系統が違ふ。我々は西洋人が日本文を學ぶ困難を知つて居るが故に、

同じ理由（言語の系統を殊にする）に依て漢人も日本文を理會するに困難を感じるであらうと想像した。さりながら此想像は誤解であつた。漢人に取ては日本語を操るとは勿論歐洲語を操ると同じ程の困難な事業であらう。さりながら語學の才に於ては漢人は必しも劣等のものではない。漢人の難しとする所は外國語を語ることではない、外國文を讀むことである。一言にして曰へば外國の心を理會することである。然るに此點に於ては日本文と漢文とは頗る親密な關係を持つて居るものであるから漢人は容易に日本文を解し得た。事實を言へば日本文は漢文に共通すべき多くの點を持つて居る。其使用文字は、いろは四十七文字を除けば全く漢字である。其の文章の構造は全く違つて居るけれども元來日本文學は漢文の翻譯から發達したものであるから主格、目的格、動詞の位置を顛倒すれば直ぐに漢文にすることが出来る。一言にして曰へば日本文は文法の組織を殊にした漢文である。日本の思想は漢學思想である。日本の文明は漢學書生が其位置から西洋の文明を解釋したものである。福澤諭吉氏は嘗て日本に於



て鋭敏に西洋の學問を理會し得るものは漢學書生である、漢學書生の豎の字を理解し得る力が西洋の横の字を理解し得る力に變じたまでであると言つた。漢學を根にした日本の書生が漢文くづしの文學に依て其理會し得た西洋文明を紹介したのが日本學である。外國の文學に鈍感な漢人も日本の文學に觸れて始めて外國文の読み易さを感じたのは敢て怪しむに足りない。康有爲は一八九五年(光緒二十一年)に於て早くも此事情を覺つて日本書を翻譯すべしと論じた。張之洞、劉坤一も一九〇一年(光緒二十七年)に日本に遊學生を出す必要と日本書を翻譯する急務を論じた。張は近衛篤磨公が北清の漫遊を試みた時を機會にして日本から一時に三十人の教師を聘し、同時に二人の孫を日本に留學させた。間もなく東京は支那の留學生で鼻を衝くやうになつた。歐洲諸國は支那人の日本學に趨く勢の盛なのを見て鬼胎を懷かざるを得なかつた。清國が各種の學術を研究せしむる爲に多數の青年子弟を遊學させる所は日本である、清國に普通學校、専門學校を起すものは日本人である、清國が教育制度を改革するに就て模

範としたものは日本の學制である、改進黨の直隸總督袁世凱が創立した學堂の講師も日本人である、袁の軍制改革に使用したのも日本人である』とは一九〇二年(光緒二十八年)の秋に或る露西亞人の論じた所である。(一九〇一年(光緒二十七年)の清曆九月に李鴻章が死んだ。其十月に袁世凱は李鴻章の後を承けて直隸總督になつた)日本は清國の學生を吸収した。日本の書生は清國の教師として招聘された。そうして日本學は支那人の心に從來未だ嘗て經驗したことのない刺撃を與へた。支那が變法自強から一變して革命に赴いた原因の一は實に此新學則ち日本學であつた。

(二八) 支那に於ける日本學の價值

日本の政府は支那の青年が日本に來り學ぶことを勿論不愉快には感じなかつた。日本の學者が支那に招待されて諸學校の講師となることも勿論日支兩國の前途に取て善いことであると考へたらしい。さりながら日本政府の(今少し制限ある意味で言へば)



日本の外務省の支那に勃興した日本學に對する態度は寧ろ傍觀的であつた。支那に勃興した日本學其ものゝ内容、講師たる日本人の人物性行に就ては日本の外務省は何等の見識も立てず、何等の制限も加へなかつた。之が爲に支那の『日本學』が漢人に學問を賣る所謂學校屋の輸出品になつてしまつたのは支那の爲にも日本の爲にも極めて不利益の事であつた。新しい文明を支那に紹介するものゝ最も大切な心の準備は先づ支那の何物たるかを理會することに在る。土質を知らないで種子を蒔くのは善い收穫を得る道でない。不幸にして支那に招聘された日本の講師は支那の事に就ては豫じめ其心に何等の準備もない人物が多かつた。彼等は唯だ學校で學んだ新智識を其儘受賣するに過ぎなかつた。彼等は支那の歴史も知らず、支那の思想にも觸れず、唯だ學校で口授されたノート、ブックを支那の學校まで持ち出して帝國大學の書店を開いたに過ぎなかつた。殊に痛歎すべきは彼等の多數が單に月給取りの爲に出稼した學問の切賣屋であつて支那に對する同情の絶無であつたことである。支那の白人宣教師の中には

勿論破落戸同様の奴が居る。彼等を以て日本人の講師に比べれば個人としての人格は日本人の講師の方が上かも知れない。しかしながら白人宣教師は兎も角も『支那を基督教國にする』と云ふ大きな旗の下に働いて居る。日本人の講師は唯だ技藝を賣るのみである。彼等は『支那の將來をどうしなればならぬ』と云ふ大きな同情の下に働いて居るのではない。この缺典は支那に於ける日本學の價値を低くした。そうして支那人は斯う云ふ學問の切賣者流から色々の支那人に取つては無益の智慧を付けられた。たとへば國家は一個の民族を以て、若しくは一個の民族を幹部として造られねばならないと主張し、此民族主義に依て漢人は滿洲人を離れて獨立しなければならぬと暗示したるが如きは其一條である。日本人の講師は歐羅巴に於ける民族の歴史を日本の學校で學び、それを鵜呑にして漢人に教へた。そうして其教を受けた漢人は『成程講師の言ふ通だ、漢人と滿人は各別の民族だ、漢人たる我々は滿人に支配されて満足すべきでない、我々は滿人の政府を倒して漢人の國を造らねばならぬ』と考へた。さり



ながら事實に於ては支那には人種の上から漢人、漢人と云ふ區別があるのではない。漢人が既に滿洲語を忘れて漢語を話し、漢人の風俗習慣に従つた上は漢人は則ち漢人である。漢人と漢人の間には何等の差違は無いのである。若し漢人は其始めチュラニアン語系の言語を話し、漢人とは全く風俗、習慣、傳説を殊にしたものであるから漢人とは違つた人種であるといふはなければならぬならば四川、甘肅、陝西、山西、河南、直隸、山東の漢人も亦純粹な漢人とは云へない。四川の異人種の國であつたことは柳宗原が『蜀は戎蠻を混同し、人虜にして、俗剽なり、寇亂を爲すを嗜む』と書いたのでも分かる。五胡の亂以後には長安、洛陽は悉く胡人の手に落ちた。胡人は其所に大きな王國を建てた。漢人の國は僅に楊子江の南に縮められた。歴史は明かに北支那の大部分が異人種の血統たることを示して居る。然らば則ち異人種たるの故を以て漢人が漢人を排斥するのは事實に於ては殆んど無意義のことでは無いか。そのみではない。民族的國家の説を唱へて滿洲朝廷を覆へさなければならぬと主張した漢人

の中に廣東あたりの書生の多かつたことは益す此思想の根柢のない借物に過ぎないことを示して居る。福建、廣東(廣西は勿論)の人民は決して純粹の漢人だと云ふことは出来ない。彼等は無論異人種と漢人の雜種であつた。韓退之が朝州の刺史になつて嶺南に行つた時、彼は自ら『蠻夷の地に居り、魑魅と群を爲す』と書いた。實際其時代の嶺南は蠻夷の地であつた。今日と雖も漢人と全く風俗、慣習を殊にした異人種が澤山居る。廣東人は其骨格から言ふも其習慣から云ふも、其氣風から云ふも長江沿岸の漢人とは一様でない。廣東人を以て滿洲人の朝廷を民族の違つた朝廷であるが故に顛覆しなければならぬと主張するのは自己も亦滿洲人と同様の異人種たることを忘れた手前勝手の議論であつて所謂『臭い者身知らず』の類である。要するに支那には歐羅巴の様な峻烈な人種の區域はない。春秋戰國の時代から漢と云ひ、楚と云ひ、越と云ひ、胡と云つたやうな色々な人種が入亂れて、そうしてそれが同じ文學を持ち、同じ官話を話し(土音方言は各別ではあるが)、同じ風俗習慣を保つて居る上はすべて之を漢人



と云ふべきである。満洲人も此意味に於ては既に漢人になつてしまつたのである。満洲人の他の漢人に悪まれる理由は人種を殊にする爲ではない。唯だ満洲人が祖先の武略と戦功を頼み何時までも政治上の特権を持つて居る其事が他の漢人の利害と衝突するからである。若しも漢人に始から人種的反感を以て満人に對する嫌惡の直覺があつたならば満洲朝廷はもつと早く亡びたに違ひない。其満洲朝廷が燕京を取つて支那に君臨してから、兎も角も二百六十餘年の統治を續けることの出來たのに依て見るも漢人自身に満洲人を異人種として嫌惡する情の稀薄であつたことは明かである。勿論政治の上満洲人が舊のやうな特権を持つて居るのは世界の氣運に對立して獨立を保たねばならない支那の現狀に取つて不都合の制度である。其改革は目前の急務ではあらうが其は民族問題とは適切な關係はない。然るに日本學の講師は、本國の學校で學んだ民族論國家論を何等の遠慮もなく何等の注解も用ひず、其儘支那の學生に切賣した。牛肉を切賣するやうに切賣した。そうして支那の學生はそれを胡椒丸吞にして政治論に

應用した。我々は革命の旗が武昌、漢口に翻つた時に所謂革命黨が『黃帝の子孫たる我等は滿を倒し漢を興さざるべからず』と唱へて民族問題を以て人心を鼓舞しやうとしたのを見て、日本學の結果だと見た。漢人は黃帝の子孫やら、黃帝と云ふのは歴史上の人物やら、小説上の人物やら、それは我々の此に説かんとする所ではないが、實際支那人は満洲朝廷及び其朝廷の存在と離れることの出來ない満洲人の特権を當時の儘にして置いては國民として列國競争の間に獨立し得べき餘地はない。支那は今、分割の危機に迫つて居る。支那は國としての陣形を立直さなければならぬ。支那は此意味に於て勿論革命を要した。少くとも事實上の革命を要した。さりながら其革命運動が倒滿興漢など、云ふ無意義の民族論を以て起つたのは畢竟日本學の餘毒に過ぎない。日本の學校で歐羅巴の政治學を學びながら、それを十分消化しない内に支那に切賣した日本講師の講義を何等の批評、何等の判斷も用ひずして生吞活剝したものゝ過ぎない。我々は此點に於て日本の外務省が支那に行はれた日本學の内容に就て心を用



ひなかつたことを遺憾とする。獨り是のみではない。學問の切賣者流たるに過ぎない。日本の講師は支那の古い思想を以て新しい學問に會通する能力もなく所謂故きを温ねて新しきを知る批判の力もない學校出の未熟生が多かつたから、彼等の教ふる所は單純な理論が多かつた。そうして斯う云ふ理論を教へられた支那人の心は決して健全な消化力を表はさなかつた。我々は嘗て始めて佛國の法理論を學んだ日本の學生が、それを楯に取つて國勢人情と相容れない言行を敢てしたものであることを知つて居る。支那學生の日本講師から學び得た政治、法律の學も之に似て居る。彼等は是に依て精しく法理を論ずることを得た。彼等は理窟を言ふことが上手になつた。昔の漢人は嘗て老莊と佛とを學んで清談に耽つた。五經の學が盛んになつてからは更に經學を種子にして議論の花を咲かせた。其後程氏、朱氏の學が興るやうになつたらそれも理窟を言ふ種子にした。宋の末路は義理を談ずるものゝ空論に亡びた。漢人は空論に泥み易い人種であつて支那は空論國である。上手に空論をひねくる人があれば多くの空論

家が之に附和雷同して大騒ぎをするのが漢人の癖である。此癖のある漢人に日本學は更に全然理論に過ぎない政治學と法律學を教へた。是れ實に猿に木上りを教へたのである。漢人は益す空論の癖を増長せざるを得ない。我々は支那に行つた日本の講師、支那人を教へた日本の學校に對して、彼等が『我々の第二の同胞』たる漢人に世界の文明を紹介した勤勞を感謝すると共に、彼等の支那人に與へた『日本學』が必しも良好の結果をのみ生まなかつたことを悲まざるを得ない。

(二一九) 日露戰爭支那分割を不可能にす。

兎も角も『日本學』は支那の人心に激動を與へた。支那人の中に新しい思想を懷く人物を多くした。此事實は現在支那の政治界に於て活動して居る人物が多く日本に學んだものであることに依て證明される。一言にして言へば支那に在ては『日本學』が起つた後と前とは人物の地圖に一線の境界を劃し、『日本學』と共に新しい人物が生れたと云



ふことが出来る。是は『日本學』の支那に與へた大功でもあり、同時に或は大罪でもあらう。どちらにしても支那は『日本學』に依て革新の氣運に向つた。さりながら其が革命亂になるまでには猶は多少の曲折があつた。特に注意すべきは一九〇四年（光緒三十年）乃至一九〇五年（光緒三十一年）に起つた日露戦争の結果に依て支那と日本の實際關係に激變を生じたことである。十年前の日清戦争は日本が支那に痛撃を與へたものに相違ないが同時に支那を覺醒した。支那に取つては日本の痛撃は嚴格な教師の鞭であつた。然るに支那人は此教育を正當に受用するをしないので所謂夷を以て夷を制する政策に依り歐洲の強國に結んで日本に當らうとした爲に却て強國の餌とならうとする境界に陥つた。無遠慮な強國の支那分割は着々として事實となつて現はれた。米國は領土保全、機會均等を唱へて支那の救世主たることを以て自ら任じたけれども空言は事實に於て何等の益はない。一九〇二年（光緒二十八年）には滿洲は恰も露領の如くになつた。斯う云ふ時期に於て支那人が日本人に同情を表したのは無理はない。

支那人は日本の強いのを制する爲に歐洲の強國に結んだ。歐洲の強國が支那を分割しそゝな形勢になつたので、今度は翻つて日本人に依頼して國を強くしやうと考へた。支那人に取ては是が自然の成行である。『日本學』の支那に歡迎されたのは恰も此時であつた。さりながら支那の分割を坐視するに堪へないものは獨り支那人計りではない。日本自身も歐羅巴の強國が支那を分割することを冷淡に見過すことは出来ない。若しも歐洲の強國が滿洲を其一州とし、強大な兵力を以て朝鮮半島を北方から威嚇するやうになつたならば日本人は日本島に閉息せざるを得ない。日本人は取ては是れ實に國民としては死生の問題であつた。故に日本人は遂に兵戈を執て世界の大陸軍國と戰場に相見せざるを得なかつた。日本と露西亞は滿洲の野に於て古史に比類のない大戦を開いた。此大戦に對する支那政治家の態度は善く其國民の位置を語るものであつた。滿洲は清國朝廷發祥の地である。其滿洲を歐洲の強國が蹂躪する。支那人にして若し自ら其國の權威を保護すべき兵力があつたならば彼等は必ず起て之と戦つたであらう。



さりながら彼等は何等の兵力もない。彼等は其朝廷の發祥地が他人の物になるのを指をくはへて見て居なければならなかつた。彼等は是故に日本軍の起て露西亞と戦ふことに反感を懷かなかつた。彼等は勿論日本が世界の大強國たる露西亞を破り得べしとは信じなかつた。世界の諸國が蕞爾たる小國の日本が、世界の恐怖たる大國に抗戦し得るや否やと疑つたやうに支那人も日本人の成功を疑つた。唯だ多くの支那人は此場合にあつて日本人の露西亞人と戦ふことは支那に取て必しも不利益の事でないかと考へた。兩虎相闘へば相傷つく、双方弱ればそれが支那の利益になる、是は兩方を嗾して戦はした方が善いとは支那政治家の判断であつた。直隸總督袁世凱は是が爲に日本に好意を表した。『日本を敗北させて露西亞側に勝利を與へれば遼河の東熱河の北は支那の有ではない、成るべくは日本が勝てほしい、双方五分五分で和睦すれば猶ほ更面白い、或は日本が敗北しても、今度同情を表して置けば他日日本と結んで露西亞の東漸を制止することも出来やう』とは袁の心事であつたらしい。斯くして支那は日露戦争の當

時に於ては概して言へば日本に好意を表した。さりながら戦争の結果は世界の意外に出た。小さい日本は大きな露西亞に勝つた。少くとも日本は極東に於ては世界の最大陸軍國と快戦し得べき兵力を有することを示した。今までは支那の分割は極めて容易である、と極東の形勢を見縊つた歐米の諸強國も此に至て絶望せざるを得なかつた。白人種の眼中には日本人も漢人も同じ黄人である。同じ有色人種である。世界を我物の如く自負した白人種は支那を第二の土耳其だと獨り極めに極めて居た。そうして日本人もつまりは人種的競争の劣敗者たるべき有色人種に過ぎないと見縊つて居た。さりながら日本人は事實に於て白人の大陸軍國と雄を争つて其堅陣を破り得た。日本はたしかに世界の武力の權衡に變化を與へた。『日本人にして支那の隣に斯様な武力を持つて居る以上は支那の分割は不可能である、義和團の騒動を見ても支那人の教育次第で善い兵士に養成し得るのは明かである、日本人が若し支那人を訓練したならばその強兵となり得べきは勿論である、然らば即ち支那分割は到底不可能の事業である』とは白



人種の列強が始めて覺り得た事實である。米國の門戸開放、領土保存は空言の排列である。日本の滿洲戰爭は實力の顯現である。日本は實力に依て支那の領土を保全し、支那人の爲に黃人亦能く爲すあるに足ると云ふ萬丈の氣焰を吐いた。支那人にして若し益々日本の實力を認め日本と左提右携して極東の強國とならうと云ふ臍を堅めたならば日露戰爭は其政策を實行するに於て眞に善い機會であつた。さりながら不幸にして支那の政治家は斯う云ふ正しい軌道を奔ることが出来なかつた。

(三〇〇) 夷を以て夷を制す。

支那は昔しから多くは眞實の獨立國に達したとは無い。漢と唐と明とだけは、それでもやゝ完全な獨立國であつたと云はれるが其外の時代は純然たる獨立國では無かつた。たとへば北宋は漢人の大帝國には相違ないが遼にも夏にも金にも莫大の歲幣を贈り、其歡心を結んだ點から云へば強國に對しては常に貢國の態度を取つて居たと云へる。

殊に南宋の高宗が金と和睦した時は宋から金に對する通信文の式を定めて『表を奉る』と云ひ『臣』と稱した。是れ明かに強國に對して屬國の態度を取つたのである。さりながら斯様に一方に於ては貢國、屬國の態度を取居ながら支那人は其強國を賤しんで與に齒することを好まない蠻夷として取扱つた。歐陽修の五代史を見れば遼は五夷の中に加へてある。朱熹の孝宗皇帝に上る書を見れば彼は金國を祖宗の讐敵たる野蠻人と考へて居る。事實上の屬國、貢國でありながら強國をすら敵國對等に取扱ふことをせず、蠻夷を以て之を待つのは支那人の古からの通弊である。長髮賊以來、支那は既に事實に於て列強の屬國である。戰亂も列強の援助に依て辛うじて討平することを得た。支那の總理各國事務衙門、即ち外務省は或る時期の間、事實に於て支那の内閣同様の働きをした。そうして此衙門の大臣は事實上列強の好意と信任がなければ其任置を維持することが出来なかつたから、支那の政治家は暗々裏に列強の承認に依て其位置を維持したものと云へる。山東の巡撫であつた袁世凱は義和團事件の起つた



時、其處置が宜しきを得たと云ふので列強の好評を博した。彼は此好評を基礎にして遂に直隸總督、北洋大臣の位置に進むを得た。支那に於ては重要な位置に居る大臣の進退を決すべきものは上、朝廷の意思でもない、下、人民の輿論でもない、中間所謂士論でもない、多くは列強の好意である。加之税關の管理は外人の手に在る。税權も條約に依て制限されて居る。支那固有の銀行、即ち錢莊は極めて舊式のものであつて其信用の區域も狭いから、日清戦争の前から西洋人の建てた銀行は既に支那の經濟界を支配して居た。日清、日露の戦争を経て日本人の銀行も甚だ有力になつた。斯うして支那人は經濟界に於ても事實上列強に分割されて居るのである。領土の保全も支那人自身の力に依て出來て居るのではない。列國の協議と黙諾に依て辛じて國の現形を維持して居るのである。治安も他人に維持せられ、財政も他人に依頼して居る。支那の位置は氣の毒ながら『百年の苦樂、他人に頼る』と云ふ慙れむべき婦人の位置に似て居ると言はねばならない。此慙れむべき屬國的の位置と、強國を蠻夷視する支那

人の自負心とは相雜はつて支那人の外交政策に一種の惡い流儀を造つた。所謂『夷を以て夷を制す』と云ふのは則ち是である。支那の外交には友誼がない、赤心を何て相結ぶと云ふ熱心がない、強國と左提右携して世界の生靈を濟ふと云ふ宗教がない。支那の外交は厭世的である。支那人に取ては列強は虎狼である。虎狼は相闘はしむるを以て良策とする。如何なる場合に於ても支那人の心は孤立である。如何なる場合に於ても支那人は他國の好意を惡意なしに受取ることには出來ない。李鴻章の三國を教唆して日本から遼東を還付せしめた手際は、支那人としては決して拙劣だとは云へない。彼が所謂カシニ條約に依て露西亞に結ばうとしたのも必しも拙策ではない。さりながら不幸にして此等の契約は畢竟其時限りの間に合せであつて露西亞に依頼して支那の陣形を立直そうと云ふ一定不變の政策から出たのでは無い。そう云ふ場合でも李は決して露西亞を信任して居たのでは無い。唯だ露西亞に依て日本を制さうとした計りである。支那は氣の毒ながら婦人に均しい無力の國である。支那が眞に露西亞を信じ、



其友誼に依頼して國家を改造しやうとするならば婦人たる支那は露西亞に於て一個の強い夫婦を發見したのである。支那が若し其夫婦たる強國を信じ、虚心平氣にして其指導に従ふ積りならば支那の將來は其所に曙光を發したのであらう。さりながら支那は露西亞の友誼を信じたのではない。露西亞に依頼して國家を改造しやうと思つたのではない。唯だ露西亞の甘心を買ふことに依つて日本を拒がうとした計りである。露西亞が強くなることは支那の勿論喜ぶ所ではない。そう云ふ場合には支那は勿論日本に亞が強くなることは支那の勿論喜ぶ所ではない。そう云ふ場合には支那は勿論日本に、英國にも媚びて露西亞と戦はしめようとする。支那は獨り女性のやうな無力の國であるのみならず、娼妓のやうな無節操の國である。支那の外交は娼妓の外交である。『夷を以て夷を制す』と云ふのは娼妓の術である。我々は我々の『第二の同胞』たる支那が斯う云ふ無節操の娼妓に均しい國になつたことを悲しまざるを得ない。斯う云ふ支那人の性癖は日本人が露西亞と戦つて戦捷を博したことに依つて、日本人を疎んじ始めた。日露の勢力が極東に對立し、露西亞は寧ろ攻撃的態度を取り、日本は寧ろ防禦的

態度を取つた時期に於ては支那は多くの場合に於て日本人に好意を表した。さりながら日本が露西亞に勝ち朝鮮を保護國とし、南滿洲に於て露西亞の位置に代つたと同時に支那の心は日本に背を向けた。今まで日本に好意を表した袁世凱は一九〇五年（光緒三十一年）の北京條約談判の時に於て早くも反日本の鋒鏑を現はした。小村、對、袁世凱の外交的談判に袁は極めて冷淡な、極めて主我的な態度に依つて日本の輿論を憤慨せしめた。是よりの後、支那人は日本人のポーツマス條約、並に北京條約に依つて得た權利と利益に對し、動もすれば之を無視する態度を示した。一たび歡迎した『日本學』は支那當局者の惡む所となつた。少くとも冷遇する所となつた。夷を以て夷を制する策は此處にも露骨に發現した。支那の經濟界に於て其利害が常に日本人と衝突することが多いと信じて居る支那在留の英人は滿洲鐵道會社の條約上當然持つべき獨占權を破壊する爲に所謂法庫門鐵道の敷設を計畫した。そうして日本政府が之に抗議するに至つて英人は日本政府は彼等の利益を侵害するものだと言つた。倫敦タイムスの北



京特派員たるモリソンは數ば日本攻撃文を本社に通信した。幸に英國政府は此場合に於て猶ほ能く日本の特殊の位置を認めて法庫門鐵道の敷設を非としたが故に日英同盟は猶ほ其効力を續けることが出来たけれども、此時若し英國政府が支那在留の英人に動かされ、彼等の特權と信じたものを保護しやうとしたならば日英の交情は此時から冷却したであらう。さりながら支那人の依て以て日本に對抗し得べき強援としたのは英國でなく米國であつたことは勿論である。

(三二一) 米國、清國の歡心を得。

米國は極東の問題に關しては必しも後進者ではない。極東と相對して太平洋を抱いて居る米國は始から太平洋の問題を閑却することは出来なかつた。米國は之が爲に日本開國の先導者になつた。最近に於て米國は之が爲に布哇を併せ、フィリッピンを取つた。日本人が支那教育に従事しない前から米國の宣教師は支那人の教育に従事した。

義和團騷動の頃には米國宣教師は既に大學其外の學校二百餘を支那に建てた。其内で神學校が五十、醫學校が二十二あつた。支那に於ける米國學の歴史は勿論、『日本學』よりは古い。一九〇八年(光緒三四年)ルーズベルト氏は『アウト、ルック』の紙上に於て米國の宣教師が支那の教育に多大の貢獻をしたことを論じて曰ふ、米國の宣教師は支那に於て一千百五十三の幼稚園、小學校、高等學校、商業學校、大學校を造り、無慮三萬人の支那人を教育したと。彼等の經營した女學校は非常の成功だとは北京に居て親しく其教育の實際を目撃した日本人すら認められた所である。さりながら我々は白人宣教師の支那人教育は彼等の誇り説くやうに支那を文明に導く効があるとも、あつたとも信ぜぬ。白人宣教師の支那を文明ならしめんとした事は獨り米國人に限らない。遠くは明末の舊教宣教師から、近くは咸豐同治以後の新教宣教師に至るまで支那を訪問した白人宣教師は様々の著述をして支那人を世界の文明に接近すべく誘導した。讀者若し東京の市中を歩いて古本屋を尋ねたならば時としては『博物新編』若しくは『格



物探源』などと云ふ書を發見するであらう。是は白人宣教師が支那人に科學を與へやうとした努力の跡である。本書の著者は藏書中に此二の書を持って居ないから何時頃の著述であるかを語ることは出来ないけれども博物新編はたしかに我維新前の著述である。一八五七年(咸豐七年)に出來た『西醫略論』一八五八年(咸豐八年)に出來た『内科新説』は今でも彼の手に在る。彼は又日清戦争が濟んだ年に出版された『マケンジの第十九世史』の漢譯本を持つて居る。いづれも上海の出版であつて共に英國宣教師の翻譯、若しくは口授に成つたものである。支那人が若し西洋文明に對して日本人のやうな鋭敏な感受性を持つて居り、西洋文學を其原文に就て讀破し得る力量があるならば支那人は固より『日本學』を待て始めて動き出すべき理由がない。故に我々は信ずる、米國宣教師の努力は何程盛んであつて、其學校の外觀は何程華々しくても遂に支那人の心に達しまい、彼等の丹精に依つて造り得た新しい教育ある支那の紳士と云ふのは唯だ巧に外國語を操り得る通辯以上の人物ではあるまいと。さりながら米人自身に於て

は決してそうは信じない。彼等は其英雄兒ルーズベルトの信ずる如く、多くの支那人を教化し得たと信じて居る。彼等は太平洋を以て彼等の海なりとするが故に、そうしてフィリッピンの主人になつたと同時に其所謂モンロー主義を或る程度まで極東に廣め得べしと信ずるが故に、領土保全、機會均等の名を以て支那の分割を救はうと試みた。義和團事件の償金米國分二百二十萬磅の權利を自ら棄てた。彼等は斯うしてまで支那の歡心を買はんと試みた。魚心あれば水心ありである。其心の背を日本に向けた支那は米國に於て良友を發見した。親日主義から排日主義に轉じた袁世凱は米清同盟を結んで日露の勢力を阻止せんと試みて失敗した。袁が滿洲朝廷に依つて一旦政治の圏外に投げ出されたのは恰ど此時であつた。

(三三二) 袁世凱の失脚。

袁世凱失脚の事情に就ては變法自彊から革命に赴くべき支那歴史の經路を示すものと



して少しく詳細の説明を要する。從來支那の政治の仕組は滿洲人を以て漢人を治めると云ふ主義の上に立て居た。此主義に依て滿洲八旗は其朝廷を支へる兵力であつた。しかし八旗は遂に惚れむべき影法師になつてしまつた。此主義に依て滿洲政府に於て軍國の重事に當るものは常に滿人であつた。しかし長髮賊の亂以來、事實に於て漢人は支那の重要な政務を以て自ら任ずるやうになつた。曾國藩は漢人を以て清國政府の政治に重きを爲した最初の大人物である。彼の傳記を讀めば彼は恰も大清帝國內外の政務を双肩に負うて立つたやうな形があつた。彼は固より滿洲朝廷に對して何等の異心を挾まなない純忠至孝の忠臣であつた。さりながら彼の兵力と彼の威望とは、彼をして曹操、司馬懿たらしむるに足りた。用心深き彼は多少は自己の位置を覺り、滿洲朝廷の嫌疑を招かないやうにと苦心した。少くも苦心した迹が見へる。彼の門下生から出て其事業を繼承し、彼よりも更に偉大なる勢力を持つて居たのは李鴻章であつた。李の事業を論じたものが彼は大學士(内閣大臣)を以て坐ながら畿輔を鎮め(直隸總督)

内政外交を辨理し、一身を以て天下の安危に繋ぐる三十四年であつたと云つたのは正に事實を得たものであつた。李に亞いで同時に支那に聲望のあつたものは張之洞と劉坤一であつた。斯うして漢人は次第に支那の政治の中心になつた。しか言ふことが出来なければ、支那の政治の中心に缺くべからざる重要な人物になつた。是れ實に滿洲朝廷の政治組織が全く祖宗の遺法を離れたものである。たとへば徳川氏の祖法では三家三卿を始め家門の諸藩は決して天下の政治に關係することを許さない。況んや外様大名が公然政治に吻を挿むが如きは其時代に於ては正に憲法破壊の舉動であつた。然るに文久二年(一八六二年)の大改革に於て三卿の一人たる徳川慶喜が將軍後見職になり、家門の随一たる松平慶永が政治總裁職になり、薩摩の島津久光が勅使に隨行して來て政務に對しても種々世話を焼いた。徳川氏の憲法は此時に於て根本的に覆されたのである。そうして徳川氏の政府は其滅亡を早めた。漢人が滿洲政府の要路に當つたのも之に似て居る。漢人には名を興へて權を興へない主義の滿洲朝廷の下に於て漢



人たる曾國藩、李鴻章の徒が恰も大清帝國を世界に代表するが如き位置になつたのは満洲朝廷としては、是亦憲法破壊である。斯うして滿洲人の天下は事實に於て次第に漢人の天下に移つて行つた。李の門下であつた袁世凱は李の生前から早くも其後繼者たるべき聲望を收めた。義和團騒動の起つた時山東巡撫であつた彼は、善く外人を保護した爲に列國から文明政治家として賞讃された。彼は身を後輩に起しながら李鴻章、劉坤一、張之洞と名を均しうするに至つた。世渡りに巧みなる彼は一方に於て『外人を保護せざるべからず』、『列國の好感を得ざるべからず』と主張し、團匪の思慮なき暴動を悲しみ、彼等に對して何等の同感を表はさなかつたと同時に、列強の聯合軍を避けて滿洲の皇室が山西に蒙塵したと聞いて、其省城の濟南府から二十萬兩を献上した。是に依て彼は益す西太后の信任を博した。米國政府は彼に多大の同情を表し、袁にして若し外人保護の任に當るならば義和團事件に依て清國朝廷が列強から失つた好意は直に恢復し得らるべしとさへ公言した。斯うして袁は支那の政治家に缺くべからざる

一資格たる外人の信任を博し得た。間もなく韃靼將軍增祺、北京駐在露國公使コルトスウェットの名に依て、露清密約が結ばれた。此密約の首謀者は李鴻章であつたと云ふ。張之洞、劉坤一は此風評を聞きて大に驚いて之に反對した。日本も勿論極力反對した。袁も彼が正しく李鴻章の門下から出身したに關はらず、一方に於ては李の密計を慶親王に漏らし、一方に於ては李に向て條約破棄を勸告した。李鴻章は之が爲に死期を早めた。袁は李の死後を承けて直隸總督北洋大臣太子少保になつた。是は一九〇二年(光緒二十七年)の事である。其翌年(一九〇三年)には袁は外務尚書、軍機大臣を兼ね中央政府の政務にも其手を延ばし得るやうになつた。袁の位置は定まつた。曾國藩は漢人にして事實上の支那大總統になつた第一世である。李鴻章は其第二世である。袁は其第三世である。張之洞は漢人の軍機大臣の中では首席であつたけれども一個の學究に過ぎない。彼は政治界に多くの敵を持つて居なかつた代りに同時に味方も持つて居ない。彼は大公至誠の人物だなど、云はれた。さりながら彼は臆病者であつ



た。彼は政治界に何等の羽翼を持つて居なかつた。加ふるに彼は既に先の知れた老人である。張之洞の次は袁の上に漢人の軍機大臣鹿傳霖と云ふ男が居た。しかし鹿は眞の老朽者であつた。軍機大臣ではないが張と名を均うした两江總督劉坤一が居た。しかし彼も亦一個の老武弁に過ぎない。そうして一九〇二年(光緒二十八年)に死んでしまつた。漢人の人望が袁世凱に自然に集まつたのは敢て怪しむに足りない。そうして彼の施設もたしかに此輿望に副ひ得べきものであつた。直隸總督たる彼は日本人百十數名を使用して、政務と軍務の改革を計り、天津に學堂を起して日本式の國民教育を始め、青年を拔擢し、露國が滿洲に大兵を集中したのを機會として西太后の許可を得所謂北洋六鎮の新式兵を養つた。彼の齡は猶ほ四十代の働き盛りである。其元氣は旺盛である。其新學を採用し、新制度を建てる爲に群議を排して邁往した精悍の氣象は曾國藩、李鴻章の壯時よりも寧ろ多くの威嚴があつたと云つて善い。其時代に彼に備はれた日本人の教師は悉く彼を稱讚した。彼を以て支那人中第一の前途有望な政治

家とした。日露戦争の終ると共に彼は親日主義から排日主義に移つた。日本人の彼に對する評論の調子は一變した。さりながら支那の政治家たる彼の位置から言へば日本の朝鮮、滿洲に占めた新しい位置を恐怖し、例の夷を以て夷を制する舊式の政策を用ひやうとしたのは其政策の巧拙は兎も角も猶ほ愛國者の事業であると言はねばならぬ。現代の商戰に古代の様な「詐僞」や「人たらし」を用ふるは猶ほ現代の戰爭に弓矢を持ち出すやうなものである。さりながら「詐僞」や「人たらし」を用ふる商人も商業をするものでないとは言へない。「夷を以て夷を制する」と云ふ政策は、たしかに舊式の外交術には相違ないが、それでも是に依て日本の侵掠(たとへ其の侵掠は事實に於ては空想に過ぎないとした所で)を防がうとした袁の脈管にはやはり愛國者の血が流れて居ると言つてよい。袁の過は日本を誤解したことに在る。彼は日本を以て清國の敵であつて其眞意は支那を分割せんとするに在りとした。是は勿論彼の誤解である。さりながら是は獨り袁の有した誤解ではない。支那人一般の誤解であつた。此一般の誤



解があつたればこそ袁は日本に對する排貨運動を煽動して多少成功することが出來たのだ。排貨運動は支那のやうな、武力のない、他國に對して自國の權利を主張するこの出來ない弱國に取つては唯一の武器である。勿論此排貨運動の背後には英國商人の潜んで居たことは事實である。さりながら兎も角も支那人の日本に對する排貨運動が多少の苦痛を日本に與へたのは勿論であつてさうして此運動が日本に對する支那人全體の誤解に基いたものであつて獨り袁のみの罪でないことも明かである。我々は此點に於て日本帝國の外交の無策無能なることを痛歎せざるを得ない。支那は同文の國である。支那人は我々に取つては『第二の同胞』である。僅に垣一重を隔つる隣家である。それで居ながら猶ほ我々の心胸を以て彼の心胸に觸れることが出來ない。支那人の猜疑心は其病である。さりながら其猜疑心を除き得なかつた日本の外務省の無能力は是れ何の面目ぞ。されば袁の排日主義に若し尤むべきものがあるならば、それは袁が日本を誤解したことである。しかし此誤解を若し正しい解釋であつたとするならば袁が

米國に依つて日本の侵入を防がうとした動機は決して尤むべきものではない。我々は唯だ袁と支那人民を斯様な誤解に陥らしめた事實あるを悲しむだけである。斯うして袁の對日政策は變化した。さりながら袁の政治家として支那國內に於て占めた位地は變らない。獨り變らないのみならず、其勢力は益々増長した。列國は日本を除くの外、否日本と雖も清國に於ける國際上の問題に於ては袁を相手にして相談せざるを得なかつた。袁は世界に向て支那を代表する唯だ一個の巨人になつた。清國に於て新進有望の政治家と云はれたものは過半、袁の勢力範圍になつた。袁は事實に於て新智識の統領になつた。新主義に依て組織された軍隊の師團長、旅團長は大抵袁派の人才であつた。北洋六鎮は袁を擁して其軍旗を翻して居る。滿洲朝廷を包圍する直隸、山東、東三省は事實に於て袁の王國であつて袁、一呼せば直ちに起て北京城を其手に收めることが出來る。純忠無二の曾國藩でさへ滿洲朝廷に代るべき野心なきに非ずやと疑はるべき危険を恐れた。李鴻章が滿洲朝廷に取つて代るに至るべしとは時として滿洲人の



夢を襲つた恐怖であつた。今や民族的國家を建設すべしと云ふ議論は『日本學』に感染した青年の漢人が多く口にする所である。倒滿興漢の説は既に滿洲朝廷の恐怖になつた。之が爲に一九〇六年(光緒三十二年)には滿洲朝廷は遂に憲法政治の採用に決せざるを得なかつた。斯う云ふ場合に於て新智識の統領、袁世凱は事實に於て新主義の漢人の總大將たる位置に立て居る。袁が滿洲朝廷から董卓、曹操の如き人物だと睨まれたのは敢て怪しむべきでない。滿洲朝廷は此恐怖の爲に先づ袁の兵權を解かんとし一九〇七年(光緒三十三年)直隸總督、北洋大臣の任を罷め、外務尚書及び軍機大臣に專任した。しかし袁の勢力は是が爲に直ぐ衰へる譯がない。彼は兵權を解いたけれども彼に代つて兵權を執つたものは彼の乾兒であつたから彼は猶ほ事實の上に於て兵權を保持して居た。彼は兵權を解いた後と雖も北洋六鎮の中四鎮だけは實際其思ふ儘に爲し得た。滿洲朝廷の御前立たる慶親王は彼から贈られる多額の賄賂に依て彼とは離れられない中になつて居る。中央政府の官吏、及び地方官には彼の鼻息を窺ふものが多い。

彼に買収された新聞は彼の爲に常に太鼓を叩いた。列強の使臣は彼を清國政府の代表者と見做して清國の問題に關しては何事も彼に依頼し彼に相談を掛けた。彼の威望に較べては他の軍機大臣、政務處大臣は全く其光を消壓されざることを得ない。彼に對する滿洲人の反感は益す甚しくなつた。一九〇八年(光緒三十四年)の十二月に西太后と光緒皇帝が相繼で没し、平生彼の行爲を不快とする醇親王が宣統幼帝の父を以て攝政の任に當るに及んで翌年(一九〇九年)の一月四日袁は政界から放逐された。袁が政界から放逐された近因に就ては様々の説がある。袁は宣統皇帝の皇儲たることを希望せず、秘密の運動をしたが西太后の同意を得ないで宣統皇帝の世になつた。是が袁の罪を得た理由だとも云ふ。滿洲人の中では當時の軍部尚書鐵良は動や氣骨のある男であつたが此男は袁と仲が悪い、そうして袁を排斥する中心になつたと云ふ。或は曰ふ、光緒皇帝は袁に對して怨骨髄に徹して居る、故に死に臨んで袁に復讐すべきことを遺言した、袁の政界から放逐されたのは是が爲であると。當時の新聞は色



々の流言、飛語を其儘、世に傳へた。我々は勿論其眞偽を判別することは出来ない。さりながら一個の事實は確實である。それは外でない、袁の位置は滿洲政府の存在を威赫するに足りた、滿洲政府の忠臣を以て自ら期する純乎たる滿洲人が陰謀に依て袁の放逐を計畫し、それを斷行したのは敢て怪しむに足りないことである。

(三三二) 袁の位置。其政界引退の結果。

斯うして袁は放逐された。鐵良、肅親王の徒は其陰謀の成功に依り滿洲朝廷の爲に董卓、曹操たり得べき危険人物を除き得たことを祝した。北京に居た日本の新聞記者までも奸雄、袁の失脚を喝采した。さりながら是が革命戰の始まるべき一原因になり、遂に滿洲朝廷を亡ぼすやうにならうとは彼等の夢想せざる所であつた。しかし仔細に考へれば滿洲朝廷が袁を放逐したことはたしかに其滅亡を招く原因であつた。我々は此類例を日本の歴史に求めて足利尊氏に聯想せざるを得ない。思慮淺薄の歴史家は唯

だ尊氏の不忠を譴める。さりながら我々は世に若し足利氏と云ふものもなく、尊氏と云ふものもなかつたならば朝家の御憂は更に甚しかつたであらうと思ふ。太平記は此事實を示して居る。その時代の武士は随分極端の思想を至尊に對して懷いて居るものがあつた。高師直は禁裡は木偶人で澤山であると云つた。土岐某は仙洞の御幸に逢つて御道筋を避けないのみならず、畏くも矢を射かけ奉り剩へ『院か犬か』とさへ放言した。斯う云ふ虎狼に均しい無學文盲、野蠻極まる無禮、非儀を敢てする武士の群を其盲動するまゝに放任して誰れもそれを制裁するものが無かつたら皇室の御難儀は何程であつたらう。今日に於てそれを想像するだに戰慄せざるを得ない。しかし武士には幸にして尊氏と云ふ統領があつた。彼は武士の統領たる位置を利用して随分我儘を働いた。さりながら彼の最も大なる慾望は唯だ頼朝の事業を繼いで征夷大將軍たることであつた。彼はその上に何も望んだのではない。彼の衷情に立入つて見れば彼は皇室の御稜威を畏れない荒武者ではない。彼が有つたればこそ武士も其荒びを抑制し



て猶ほ皇室を尊敬することを學んだとも云へる。袁の滿洲朝廷に於ける位置はやゝ尊氏に類似して居る。兎も角も袁は新主義の漢人を總轄し得べき唯一人であつた。たとへば排滿興漢の議論が漢人の輿論になつたに似た所が袁がうんと言はなければ其議論が事實となつて現はるべき機會はない。袁の位置は誠に上は廟議を定め下は士論を鎮するに足りるものであつた。西太后に如何なる弱點があつたにせよ、その曾國藩、李鴻章、袁世凱等の歡心を失はないで、しかも急所を押へて動かさなかつた操縱策はたしかに女豪傑の手段であつたとも云へる。西太后が死ぬと間もなく滿洲朝廷が袁を政界から驅逐したのは一寸考れば董卓、曹操を除き去つた愉快の勇斷であつたやうだが滿洲朝廷は之が爲に今や相競ふて革命に赴かんとする漢人を抑ゆべき中心的人物を失つた。勿論張之洞の老人はまだ生きて居たが彼も間もなく死んだ。梁敦彥は袁の位置に代つた。さりながら彼は藁人形のやうな役に立たぬ男であつた。滿洲朝廷は斯うして漢人を排斥した。滿洲朝廷の排袁派は袁を惡むの餘り彼を殺すことを欲したらしい。

さりながら袁は外人の寵兒である。支那の政府は其國際的に弱い關係を持つて居る所から勿論、外人の寵兒たる袁を殺すことを欲しない。一九〇九年（宣統元年）一月六日袁は無事に河南に歸臥することを得た。袁、時に歳五十一。清國政府は自ら火山の下に舞踏するものたることを覺り得なかつた。

（三四） 革命主義と軍人の握手。革命戦起る。

『日本學』は漢人の心に新しい刺撃を與へた。戊戌の政變は健穩なる改革論者を化して革命黨にした。漢人の中に在つて兎も角も『廟議を定め士論を鎮する』に足るべき唯一の人物袁世凱は政界から放逐された。日本、新嘉坡、彼南、瓜哇、布哇、合衆國に散在して居る革命主義の漢人は遙に本國の同主義者と相呼應して其主義の傳播に努めた。斯うして革命の勃發すべき時期は日に近づいた。さりながら唯だ是だけでは革命は猶ほ事實になつて現はれて來ない。支那に於て革命が事實として破裂するに



は猶ほ他の一條件を要する。我々は更に此類似を古史に求めたい。昔し秦が六國を亡ぼし天下を郡縣にして暴政を行つた時、天下の人は皆秦に背かうと思つた。さりながら暴政を惡むと云ふことと、謀叛をしようと云ふことは一事ではない。暴政は惡むべきであるが、謀叛をするのは危険である。如何にして秦の兵力に抗して其暴政を覆し得べきか。是れ儒生の爲し得べき事業ではない。刺客の爲し得べき事業でもない。斯う云ふ場合に於てどうして革命の火はついたであらう。それは外でもない此時秦の政府は外は四方の夷狄を防禦する爲に、内は征伏した人民を治める爲に各所に築城し、兵士を籠めた。其築城の人足、戍衛の兵士を徵發して、それを城まで送りつける、云はゞ人足頭のやうな人物があつた。彼等は人足を率領し、人足を統御する役目であつたから自然に人足に親しんで自ら親分氣質を養成した。所謂陳勝吳廣の徒は則ち是であつた。漢の高祖もやはり此種の親分であつた。革命の感情が儒生、俗吏の間にのみ存在して居る間は秦の天下は猶ほ太平であつた。さりながら其感情の火が人足頭、士

方の親分と云つたやうな種類のものに焚え付いた時は是れ革命の感情が始めて活動期に入つたのである。さしもの秦も終に是に依て亡びた。秦の朝廷は讀書を危険とし、讀書生を惡み、書籍の私有を禁じ、所謂書を焚き儒を坑にする暴政を敢てしたけれど、其實革命は讀書生から起らなかつたので、後の世の支那詩人は劉項元來不讀書と歌つて之を冷笑した。危険思想も書生の書齋に在る間は、必しも危険でない。しかしそれが若し組織立つた職工組合とか軍隊とか云ふもの、中に入れば其時から始めて眞の危険は起る。たとひ孫文の議論は何程猛烈であつても日本講師の思慮なき煽動的講義は何程極端なものであつても、たゞそれだけでは未だ革命の火を爆發せしむるに足りない。然るに滿洲朝廷は不幸にして自ら革命に點火し得るやうな仕掛を作つて其結果に深い注意を拂はなかつた。滿洲政府は支那の弱點は其權利を主張する背後の力たる軍隊の缺乏に在りと信じた。此信仰は正當である。支那の世界に於て大國らしい取扱ひを受けないのは實に其弱兵に依る。支那が若し大きな陸軍國になり得たならば世界



は三億の人口を有する大清帝國を恐れざるを得なかつたであらう。さりながらそれも時と場合に依る。滿洲人が既に全く漢人に同化してしまひ、新學の智識は殆ど漢人に獨占され、新式の軍隊を造るにしても今まで出来かゝつた漢人の士官、漢人の軍隊を基礎にして其上に建設しなければならぬ場合に於ては大きな軍隊を起すのは事實に於て漢人を強くするだけのことだ。況んや漢人の中には排滿興漢の感情が可なり勢を帯て居る。そう云ふ場合に軍隊を作るのは革命主義の爲に善い巢窟をこしらへるやうなものだ。しかし其れも滿洲政府の經濟状態が良好であつて軍隊が満足するだけの給養をすることが出来たならば、軍隊は或は尾を振り頭を垂れて滿洲政府の言ふことを聽いたであらう。さりながら滿洲政府の殆ど極端に陥つた財政困難は勿論十分の給金と糧食とを兵營に供し得べき餘地がない。若し給養が不足になれば正兵も直ぐに亂兵になるのは支那の常態である。況んや支那の軍人は、土人を用ひない例であるから其鎮戍する土地と精神的に何等の親しみもない。彼等が給養不足に苦しんで居る

時には、彼等を買収し、誘惑し、煽動することは容易である。給金で働いてゐる奴は、給金をくれなければ不平を言ふ。外に甘い口があれば其方に心を向ける。彼等は惡ずれのした下女のやうな奴である。滿洲朝廷は斯う云ふ事情に深い注意を拂はなかつた。そうして當時獨逸公使であつた蔭昌を呼び返して新式軍の組織に盡力させた。如才のない獨逸皇帝は蔭昌の歸國を送り、『貴國のやうな大國に獨逸式の徵兵制度を施したならば一千万人の常備軍を造るのは造作もない』と云つて油をかけた。蔭昌は歸國して三十六鎮の新式軍を起した。貝子貝勒の公達にカーキ衣服を着せ將來六十鎮にしなればならないなど、騒ぎ出した。兎も角も外形だけは兵備も進んで來た。兵士の給養は勿論十分でない。人足を澤山驅り出したまでは善い。しかし人足を集めて給金を拂はず、尠くとも彼等の忍耐を維持し得べきだけの給金を拂はなければ人足を集めた其事が却て騒動を起す原因を造るものである。果然諸鎮の兵士は給料の不渡りと不足を訴へた。革命主義に感染した士官は之を機會にして革命黨と握手した。一九一一年



(宣統三年)十月十日支那帝國の心臟と云ふべき武昌の要地に於て、其所を鎮守した軍隊が其長官たる黎元洪を總大將として高く革命旗を翻へした。黎元洪は勿論革命の主動者ではない。さりながら彼は最初に革命黨と握手した軍人の代表者であつた。斯うして久しく爆發の機會を待つて居た革命主義は遂に事實となつて現はれた。

(三五) 袁、民國の大總統となる。

始は革命軍を輕視した滿洲政府も事態の次第に重大に赴くのを見て全く途方に暮れてしまつた。漢人を治めるのは、やはり漢人で無ければならぬ。此時に於て漢人の憤を鎮め秩序に還らしめ得べきものはやはり唯だ袁世凱あるのみだ。滿洲政府は斯う思はざるを得なかつた。そうして忽に袁を引き出した。滿洲政府は袁を敵としたものである。袁を以て董卓、曹操の類としたものである。董卓、曹操を亂世に引き出すのは滿洲政府に取つて勿論恐ろしい冒険である。さりながら此外に事局を濟ふべき道はない。

始から袁に同情を持つて居た列強の使臣も此際袁を出すより外に道は無いと信じた。袁、出でずんば蒼生を奈何と云ふのが革命亂の威熾に恐怖した北京の感情であつた。是に於て河南に隱棲した袁は隱棲してから三年目に北京に出て來た。滿洲政府は先づ彼を兩江總督に任じて革命軍の鎮壓に當らせやうとした。しかし彼は任地に向て出發しない前に遷りて國務卿に任じ、新内閣を組織した。吾々は袁の心事に就て何等の報知を持つて居るものではない。さりながら袁の如きものが斯う云ふ場合に於て列國使臣の意向に注意しない筈はない。清國の革命は已むべからざる勢とも見える。しかし列國は果して清朝の滅亡を希望したであらうか。支那に共和政治の成立することは果して列國の好む所であらうか。袁は先づ列國使臣の意向を知らうと努めた。そうして立憲君主制を以て支那の現状を維持しなければならぬと考へた。袁が滿洲朝廷の忠臣であつたか、或は始から皇帝にならうとする奸雄であつたか、なかつたかは我々の知り得る所ではない。さりながら袁は如何なる點から考へても利口者である。彼は積極



的、冒險的に或る目的に向て突進し得る猪武者ではない。彼は時勢の潮合に乗じて進む道を知て居るけれども、時勢を創造し得る人物では無い。彼は北支那の現状を見て猶ほ滿洲朝廷の亡ぶべき時期では無いやうに感じた。故は彼は南支那の革命を以て與し易しとした。故に彼は大清皇帝の維持を宣言し段祺瑞、蔭昌等の革命壓迫の爲に南下の途に就いた。南方は袁の進退に關はず著々として革命の事業を進めて行つた。支那は恰も南北に兩分したやうに見えた。南支那に於て久しい歴史を持つて居る英國人は南北支那の兵戈の間に相見るが爲に楊子江沿岸の戰場となることを欲しなかつた。出来ることなら南北を妥協し、血戦を見ずして事局を収めたいと思つた。モリソンを始め多くの英人が南北調和に直接間接の聲援を與へたのは、たしかに英人の此感情を代表したものであつた。此事情を看取した袁は南下を止め唐紹儀を講和使として革命政府に派遣した。唐は共和論者であつた。彼は南北を妥協する爲には帝國を改めて民國としなければならぬと感じた。形勢の變化に動かされ、且列國使臣の必しも民國

の成立に反感を持つまじきことを覺つて袁は遂に其態度を變じた。彼はもはや清國滿洲朝廷の維持者ではない。一九一二年（民國第一年）の正月に多く袁派であつた官軍諸將は清帝の退位を迫つた。其二月十二日に宣統帝は退位上諭を發して名に於ても實に於ても全く支那の政局から退いた。其翌日を以て袁は共和政府成立の通牒を列國に發し統一政府の組織を見るまでは假政府の首領たるべきことを通告した。此年の正月を以て南京に於て民國政府の大統領に選舉された孫文は袁が此發表をした翌日を以て書を南京の參議院に送つて大統領の職を辭した。南京參議院は約法を議定すると共に袁を大總統に選舉し、袁に向ひ南下して南京に來り其任に就かんことを求めた。袁は之に應じなかつた。南京假政府は更に特使を北京に送り、袁は大總統の就任式を北京に於て行つた。

（三二六）『いや／＼ながら袁を推戴』



袁は何故に大總統の位置を得た乎。形式から言へば袁は南京の參議院に推薦されたものである。さりながら是はたゞ形式である。彼が民國最初の大統領となり得た理由は外に在る。彼は滿洲朝廷の董卓、曹操であつた。彼は滿洲政府の下に在つて『上は廟議を定め、下は士論を鎮め得べき』唯一人であつた。彼は猶ほ自己の勢力範圍たる多くの軍人を持つて居る。一言にして曰へば彼は建武中興の足利尊氏である。彼が大總統になり得たのは唯だ此特別の位置に依る。諺に犬が骨を折つて獵り出したものを鷹が取ると云ふ。革命黨の努力も其結果から見れば袁が一九〇九年（宣統元年）の一月に一旦先つた位置を恢復して更に之を大總統にまで推し進めたに過ぎなかつたのは氣の毒のことである。斯うして袁は大總統になつた。南京の革命派は勿論袁の將來に就て多大の懸念を持つて居た。彼等は心から袁を好むものではない。さりながら其時黃興等の主張したやうに兵力を以て袁を壓倒することは彼等に取て到底『言ふべくして行ふべからざる』ことであつた。北支那の軍人が思の外早く袁に風靡した結果、袁は

北京政府と南京政府が南北對峙した時に於て既に南軍の抵抗し得べからざる兵力になつた。禁衛軍總統馮國璋は袁は革命軍と妥協し、清國皇帝を退位せしむることに同意したと聞いて孤忠を清朝に致さんと敦囑いた。さりながら宣統皇帝の没落を見て彼は之を對岸の火災視して忠孝節義の爲に何等の爲す所なく直ちに袁を謳歌した。倪嗣冲、張作霖はいづれも多少の兵力ある一方の大將であつた。さりながら彼等は憑と同じやうに袁に阿付した。張勳はそれでもどうやら滿洲朝廷の爲に最後まで臣節を守るものゝやうに見えた。さりながら彼の心事も畢竟洞が峠の筒井順慶以上ではなかつた。彼は滿洲朝廷の存在よりも自身の存在に就て餘計に考へた。一言にして曰へば北方の武人は北支那人の特性に従ひ、草の風に靡くが如く議論なしに袁に靡いた。斯うして事實に於て北支那の諸將は袁を主權者に推戴した。獨り北支那の諸將のみではない。袁の部下たり門生たる舊い關係のある總ての軍人は袁を謳歌した。南方の總帥黎元洪と雖も其心は勿論袁の黨であつた。斯う云ふ場合に於ては革命黨が何ほど其心で袁を



嫌つても袁を退け物にして事局を収めることは出来ない。袁派と戦はうとすれば第一兵力も足りない。勿論金もない。是に於て革命派はいや／＼ながら袁を推薦した。さりながら彼等は將來の袁を抑へる爲に極めて民主的な臨時約法を定めた。此約法は其年三月十五日を以て北京政府に依て公にされたものである以上は形式から言つて支那人民の最初に定めた憲法でないとは言へない。さりながら其内容は空論の排列に過ぎなかつた。『國會は政府の召集を待たず、自ら開會することが出来る。』『大總統は一人の意思に依て國務員を任命することは出来ない。必ず參議院、衆議院の同意を得ることを要する。』『憲法は國會に由て制定する。』一言にして曰へば大總統を木偶人にしやうとするのである。斯うして革命は其成就の日に於て早くも喧嘩の種子を蒔いた。

(三七) 第二革命の失敗。

袁總統の勢力威望は日に加はつて来る。袁の爲に獵犬の役を努めた革命黨は彼等の努

力が畢竟袁一人の功名を成すに終つたことを憤慨した。彼等は是非とも袁を倒して民國の實を擧げなければならぬと感じた。袁の政府は財政困難の爲に頻りに各省から金を徴收した。各省の當局者は之が爲に迷惑を感じた。袁は又軍隊を整理する爲に其幾部分を解散した。是が爲に各地に不平黨が多くなつた。兵隊の解散ある毎に、職業を失つた無賴漢が多くなり、從て彼等の間から隱謀と謠言と暴行が出るのは支那の常態である。革命派は此動搖を機會にして第二の革命を計畫しやうとした。同じ理由に於て黃興孫文等に依て代表された反袁黨は救國會を組織し極力袁政府の起さうとする大借款に反對した。袁の威望は現狀に於て既に南方の反袁派を壓倒するに足りる。此上大借款が成立して袁が大きな財力を持つやうになつたらば是れ虎に翼を加へるものである。故に彼等は『國民捐』を唱へて外國借款に反對した。北京に集まつた參議院の三黨は大借款を屈辱的條件と唱へ聯合して反對を試みやうとした。四川の人民は排借款黨に煽動されて一揆に均しい騒ぎを起した。救國會が大借款を屈辱的條件



として反對したのは勿論道理の無いことではない。さりながら若し屈辱呼はりをするならば支那の對外關係は殆ど總て屈辱である。當面の必要の問題は其條件が屈辱的である乎、無い乎ではない。民國になつた支那に秩序を興へ、其政府に重量を加へ、其改革を統一的、組織的ならしむる爲に必要なる金を得ることである。『民國は君に委任した。さりながら其費用を得る道には反對する。』反袁派は斯う云ふ出來ない相談を以て袁の政府を死地に陥れやうとした。尋で所謂第二の革命戦は起つた。一九一二年（民國第一年）七月、長江の中流、湖口要塞の天嶮に討袁の白旗は翻つた。其の大立者は李烈鈞であつた。さりながら人民はもう革命の聲を聞くに飽きた。反袁派が口舌の雄であつて、事實に於て人民に何等の益も爲さないことは彼等の既に経験した處である。國民捐の名に依り脅迫的に義捐を勧められた人民は實際反袁黨の誅求に恐怖を感じた。故に人民は孫と黃とに附くよりも寧ろ袁に附いた方が利益であると考へた。海軍も袁を助けた。諸將軍も袁を助けた。列強も大借款資金を袁に交附し、革命軍の討伐と買収とに従事させた。獨逸は武器と士官を袁政府に貸した。斯うして所謂第二革命は兒戲の如くに終つた。袁の威望は益々重くなつた。

(二三八) 支那は中央集權の國たらざるべからず。

さりながら反袁派は猶ほ二個の武器を持つて居る。それは外でもない、約法と國會である。兎も角も約法は形式に於て中華民國の存在を定める根本律法である。約法に従へば憲法は國會に依て議定すべきものである。袁世凱と雖も公然、約法を蹂躪し、國會を無視する譯には行かない。白人種は民主主義に對して一種の迷信がある。彼等は人民の名に依て政府に抗するものに同情し易い。彼等が長髮賊の巨魁洪秀全に同情したのも實に此迷信に依る。彼等は亞細亞人を理解しない。故に彼等は支那の民主黨を以て白人種の民主主義者と同類のものと見做し易い。英吉利人も多少は斯う云ふ心の傾向を持つて居る。純然たる民主國の北米合衆國が中華民國の成立を見て太平洋を挾



んだ新舊の兩大陸に共和政治の二大國が對立するに至つた極東の新紀元を謳歌したことは勿論である。列國の同情に依つて其位地を維持して居る袁が此事情を覺つて居ない譯はない。故に彼は大總統を木偶人同様にした約法にも敢て公然反對を示さなかつた。彼は恭謙士に下つた王莽を學んで努めて約法を守るが如く粧つた。反袁派は袁の此弱點に乘じ其黨派の多數を占めた國會に依て益す袁を木偶人ならしむべく努めた。彼等は其憲法を議定する權能を與へられたのを利用し佛蘭西の制度に依り政黨内閣制を採ると稱へ、議會の力を萬能にし大總統の權利を極度に制限し國務委員任命權、國會解散權をさへ大總統から奪はうとした。『日本學』の餘毒は此處にも現はれた。彼等は日本の講師から學んだ淺薄な憲法論と、日本の所謂『支那通』から教へられた空論を武器として紙の上の憲法としての外、支那の實務に取て何等の價値のない極端な民主的の憲法を作つて袁の位置を有名無實ならしめやうと試みた。さりながら議論は何程立派であつても支那の現状が斯う云ふ憲法で治りやうはない。さなきだに口舌の雄な

る支那人、一個の國民と云ふよりも寧ろ一個の世界と云ふべき種々の方言、様々の感情、様々の風俗を有つて居る支那人、其支那人を議會に集めて其投票の結果に依り支那を一個の堅固な國民的生活に造り上げやうとするのは木に縁つて魚を求むるよりも甚しい妄想である。支那人の議論倒れは今に始まつたことではない。愷切の議論、慷慨の文字を以て人心を煽動しながら、其實務に於ては何等の捉まへ所のない空論の多かつたことに依て、明も宋も亡びた。支那の急務は高く憲法論の講釋をすることではない。強固なる中央集權を作ることである。極東に於て第二の日本を作ることである。屬國的の位置から脱して物質に於ても、精神に於ても一個の獨立國になることである。稅權も恢復しなければならぬ。鐵道も外人の手から支那人の手に收めねばならない。工藝も支那人自身の手で依つて經營しなければならぬ。銀行も支那人自ら經營すべきである。これをするには先づ堅固な中央政府を作らねばならない。袁の黨は流石に此道理を解して居た。是は袁及び袁の黨のみが支那の政治界に於て獨り聰明



であつたのでは無い。支那の中央政府に坐つて、實際列國の恐るべき勢力に觸れた彼等の位置は勢、彼等をしてしか感ぜざるを得ざらしめたのである。今の日本にも『支那には強固な中央政府は入らない、支那には各省の自治を大きくする必要がある、支那の中央政府の權威は成るべく小さい方が善い』と云ふ論者がある。支那の問題に就ては普通の『支那通』よりも權威を持つて居ると信ずべき學者でも、そう云ふ議論をする人がある。成程支那では今日まで堅固な中央政府を作る試が成功した例が少い。支那は何時でも一個の世界であつて一個の國民ではない、多くの場合に於ては一の強い人種が他の弱い人種を治める二重機關の政體である。秦の政治も遼の政治も、金の政治も蒙古の政治も滿洲の政治もそれであつた。他の場合に於ては多くは獨立國を並べた聯邦のやうなものであつた。天寶以後の唐の藩鎮の跋扈の如きはそれである。明國は長く一統の政治を維持して居たけれども、各省の政治は事實に於て半獨立に均しかつた。宋の神宗皇帝は燕雲を克復し、堅固な中華の帝國を造らうと云ふ雄志を抱き、

王安石を用ひて財力と兵權の集中を計つた。さりながら宋の人民はそれを喜ばなかつた。韓緯は神宗を諫めて『聖人の功名は事に因て見る、先づ功名心あるべからず』と云つた。『聖人は事故が起てからそれに應じて仕事をする、事故の起らない前に積極的に働き掛けるのは聖人の禁物である』と云ふのが其意味である。支那人は積極的の政治を喜ばない。神宗の積極的經營は遂に失敗に歸した。斯う云ふ事例をのみ支那歴史に於て見て居る學者が支那では強い中央政府は入らないと論斷したのは必しも理由のないことではない。さりながらそれは古の話である。白人種の壓迫を感じない、世界の強い勢力に依て分割され若くは併呑さるべき危険を感じない古の支那に在つては其國勢の分裂するの已むを得ないことであるが白人種と戦つて敗北し香港を割譲し、五港を開くの已むを得ざるに至つた以來の支那の位置は古とは全然一變した。今日の支那は中央に堅固な政府を造り、國民の勢力を統一し、集中し、組織し、積極的に働き出さなければ到底其獨立を保つことは出来ない。是は獨り支那のみではない、世界



の大勢である。二つの廣い太平洋に依て世界の強國から隔絶した北米合衆國でさへ、今日に於ては強度の中央集權を必要とする感情に満ちて居る。千句、萬句、結る所は唯だ一句である『支那は世界に存在し得べき一國として中央集權の國ならざるを得ない』。斯う云ふ意味に於て袁及び袁の黨が『各省の自治を大ならしむべからず』、『政權は中央政府に集中せざるべからず』、『大總統は國會の同意を経ることなくとも内閣を組織する權能を有せざるべからず』、『議會を解散する權、緊急命令を發布する權、非常の場合に於て財務を獨斷する權、國會の議決した法律を裁可せざる權、國務委員を任意に任命する權、各省の都督を任命する權、事變の際に海陸軍を指揮し、且國庫金を運用する權を大總統の手に收めたい』と主張したのは必しも我田引水の議論だと云ふことは出来ない。加之、彼等が『大總統の任期を七年以上にしたい』と主張したことから議論倒れの支那、黨派倒れの支那を救ふ途としては必しも不穩當な議論だと云ふことは出来ない。さりながら反袁派は勿論、斯う云ふ説に耳を貸すべき性情を持つて居な

い。彼等は何處までも袁一派の中央集權、國家主義に反對した。反袁派の極端論に不満を懷いた北方の將軍は反袁派の徒らに議論の末に走つて現在の國務を等閑にするのを憤慨した。假りに反袁派の言ふやうに袁を木偶人同様にしてしまつたらどうであらう。其結果は支那を何時までも無政府同様の不定不安の状態に置くに過ぎない。北方の諸將は此理由に依て袁に同情を表し、反袁派に反感を表した。

(三二九) 南北支那の性情の差違。

此處まで議論が進んで來た上は我々は更に問題の中心に入らなければならぬ。それは外でもない。南の支那人と北の支那人の性情の相違である。前にも言つたやうに今の漢人は胡、夏、楚、越の混合人種である。しかし人種の合金作用は決して完全に行はれて居ない。概して曰へば今でも北支那には胡と夏の雜種が多い。中部の支那には楚と夏の雜種が多い。南には越の種類が多い。楚人は剽悍である。進むにも鋭くして



退くにも鋭きは楚人の特徴である。今日でも叛亂を以て尋常茶飯事として睡眊の怨も必ず起つて報いんとする湖南、湖北の人氣は彼等に楚人の血の濃厚なことを示して居る。福建は古の閩越の地である。兩廣は古の越の地である。越人は水上の勇者であり同時に海の世界に廣がる特性を持た人種である。我々は今日に於て支那の海軍が多くは福建人を以て組織され、支那人中の世界的市民が多くは福建人、廣東人たるを見て彼等の血管中に昔の越人の血の濃厚に流れて居ることを想はざるを得ない。總じて之を言へば漢人は斯う云ふ色々の種類から成立つて居るけれども、概して南人と北人の二に分けることが出来る。そうして長い歴史の結果として北人は常に南人を支配した。胡と夏の血に富んだ人種は多くの場合に於て治者になり、楚と越の血に富んだ人種は多くの場合に於て被治者になつた。斯う云ふ久しい習慣は、南人をして治者たる能力を失はしめた。支那が北人に依て治められることは久しい習慣になつた。それ故、宋の神宗の時に王安石、呂惠卿の徒が南人を以て政務に當つた時、當時の人は異常の例

として之を怪しんだ。蒙古が支那を統一した時は金の民であつた支那人(北支那の)を漢人と呼び、南宋の民であつた支那人(南支那の)を南人と呼び概して南人は政務に用ひなかつた。斯う云ふ長い慣習と人種本來の特質とは南人をして言に長じて行に短なる一種の性癖を養はしめた。後等は議論に長じて居る。比較的新しい主義に移り易い。さりながら彼等は復讐心が強い。彼等は排他的感情に富んで居る。明の末路に當りて彼等は滿洲人に攻撃され福建、兩廣、雲南あたりに追つめられて僅に前朝の遺臣たる獨立の操を保つて居た時でも彼等は一致して滿洲人に當ることは出来なかつた。長髮賊は一時南支那の全部を其勢力範圍とした程の優勢なものではあつたが其領袖等は決して一致せず、王と稱するもの百に餘り權分れ、勢散じて遂に亡びた。第一革命の時でも孫文派と黃興派では一致しなかつた。黃興派と岑春煊派もやはり多少は水と油に似た形があつた。康有爲と梁啓超は兎も角も廣東の先覺者である。さりながら廣東の同盟會支部は二人が嘗て保皇論を唱へ滿洲朝廷を其儘存在して立憲政治を敷いたが算



いと論じたのを理由として此二賊は民國を破壊するものなれば斷じて政府に採用すべからずと云ふ電報を袁に向て發し、剩へ廣東省會は二人の國籍剝奪を議する特別會議を開かうとした。政局の變化が極めて急激な時に當ては政客の位置は急流を舟に掉さして下るやうなものである。眼前の光景は須臾に變化して窮ない。何人も一定の議論を建てる譯には行かない。此事情は幕末から維新に掛けて日本の英雄豪傑の識見が恰も猫の目の變る如く變つたので分る。若し一たび或る論を立てたと云ふので事局の變化の後、それを謹むべき理由になるならば革命時代に於ては何人も罪を免れ得るものはあるまい。所謂『彼も一時是も一時』である。然るに南の支那人は斯う云ふ無理な執着を敢てして之を當然と思つて居る。彼等は黨派心の爲には昨日の友も今日の敵として敢て憚らないものである。此點に於ては我々は南の支那人と、昔の希臘人の類似を思はざるを得ない。彼等は共に哲學を持て居る。共に詩歌を持て居る。共に議論に長じて居る。彼等の文學は優に世界の文學史を飾るに足る。彼等の生活も文明人の

生活だと云ふことが出来る。さりながら彼等は共に國民としての凝集性を缺いて居る。共に國よりも黨派を重しとした。彼等は如何なる場合に於ても分裂する。彼等を凝結して組織的の一團とするのは沙を繩にするよりも六づかしい事業である。之に反して胡と夏の血の濃厚な北支那人は秩序を好む。彼等は強い權力に統一され易い。彼等は概して言へば南の支那人よりは文明でない。彼等は議論を好まない。彼等は説よりも力を信ずる。彼等は南人を嘲て空論家と云ふ。古から彼等は多くの場合に於て治者の位置に立て居た。彼等の感受性は鋭敏でない。彼等は寧ろ保守黨である。彼等の性情は遲鈍である。さりながら支那に於て政局の大綱を捉んで秩序を建て得べき可能性の多いものは彼等であつて南の支那人ではない。此事實は南の反袁派と北の袁派の性情に善く現はれて居る。反袁派の目的は唯だ袁を倒すに在つた。彼等は世界に於ける支那の位置よりも寧ろ多く袁退治に關心した。此猛烈な黨派心を最も露骨に現はしたものは宋教仁であつた。彼と袁派とは『汝、我を殺さずんば、我、汝を殺さん』と云ふ兩



立難の位置に陥つた。一九一三年(民國二年)三月二十日の夜、彼は上海に於て無頼漢に暗殺された。此無頼漢は袁の刺客らしかつた。反袁派は盛んに袁の罪を鳴らした。袁が若し刺客を用ひて宋を殺したことが事實であれば其暗殺の罪に就て袁が其責に任ずべきは勿論である。如何なる場合に於ても暗殺は罪惡である。言論の開放され、何人も其意志を機械的に抑壓される苦痛のない自由の時代に於ては別して罪惡である。さりながら革命の亂世に於ては刺客は多く行はれ易い。維新の前後に於て佐久間象山も此毒手に斃れた。慶喜の參謀原忠成も、肥後の名士横井小楠も、長州の俊傑廣澤兵助も斃れた。廣澤の倒れたとに就ては刺客を放つたものは當時の參議本戸孝允ではないかとさへ疑ふものがあつた。刺客を用ふるとの罪惡たるは勿論であるが兩黨の反感情が熱した斯う云ふ場合に於ては日本の歴史でも決して稀有の例ではなかつた。

(四〇) 袁將に皇帝たらんとす。

一九一三年(民國二年)の四月八日に兎も角も國會は開かれた。六月に五國借款は成立した。十月に袁は色々の手段を以て多數を制することを得て正式に大總統になつた。しかし國會に於ける反袁派の氣焰は衰へない。彼等は依然として空論を鳴して居た。是非とも大總統を木偶人同様の無權力者にする彼等の所謂佛蘭西式の制度、彼等の所謂政黨内閣の憲法を建てやうと敦囑いた。袁及び袁派の側から見ればそう云ふ憲法を作るのは無政府に還原するも同様である。今や大借款は既に成立した。正式に大總統は選ばれた。各國は中華民國の成立を承諾した。是れ正に舉國一致して中華民國の國民的存在を堅固にすべき時期である。此時に於て中華民國に於て最も必要なものは日本學を生呑活剝した憲法論ではない、同民の協調である、一致である、中央の命令に従つて組織的、統一的の働きをすることである。然るに國會の性情は全く之に反して居る。彼等は依然として反袁の黨派的感情に満ちて居る。彼等は言論の壯快を求めて實務の進行に注意を拂はない。彼等は到底中華民國の現状と兩立することが出



來ないのである。是は袁及び袁派の反袁派に對する感情であるが反袁派から見れば袁は民政の謀反人である。彼は馮國璋、倪嗣冲を始め北方の武人を誘導して彼が帝たらんことを希望する勸進表を出させやうとした。彼は民國大總統の名に依つて支那皇帝の實を行はんとする姦雄である。彼は民政の何ものたり、民國の何ものたるを知らない臨機應變黨である。彼の如きものを大總統にして之に重權を與へる憲法を作ることは彼を帝たらしむべき草分けをするものである。我々は是非とも民國創立の初心に還つて眞の意義に於ける民政の國を建てなければならぬ。反袁派の理窟は是である。その感情は到底一になりやうはない。其結果として同じ年の十一月十五日に袁は遂に反袁派の議員四百三十名に問ふに内亂謀反罪を以てし參議院、衆議院、諮議局を解散し、別に總統の命令を以て參議院を設け國會の代用をさせることにした。之と前後して黎元洪を始め二十二省の都督、民政長官、軍使二十八名は連署して國會中止を建議した。此情態を一言にして曰へば北支那の腕力が南支那の議論を壓倒したのである。

反袁派は袁が果して民政の謀反人であつたことを切齒した。反袁派の目星しい人物は或は殺され、或は海外に亡命した。一九一四年(民國第三年)參議院は袁監視の下に約法會議を開いた。其會議の結果が袁派の中央集權主義を具體的にしたものである事は勿論である。其年の暮に約法會議は大總統選舉法を通過し、袁は之を公布した。此法に依れば大總統の任期は十ヶ年である。參議院は、時政の状態に依り、其必要ありと認むるときは更に現任大總統の重任を決議することが出来る。大總統は次期の大總統候補者を推薦する權を持つて居る。其姓名は總統自ら之を書し、總統府中の石室内に納め總統の命令あるに非れば開くことを得ずとある。參議院が袁の鼻息を窺ふ單純な袁派の機械であつたことは此決議で分る。實際一九一四年(民國第三年)の袁總統は事實に於て半ば袁皇帝であつた。彼は其黨派たる將軍、巡按使を支那全國に配付した。彼の行方は頼朝が源氏の家人を以て守護にし地頭にして、日本六十餘州に分配したのに似てゐる。彼は頼朝と同じく天下總追捕使の位置を占めた。彼は民國の文武官は總



て大總統に忠節を盡くすべしと云ふ命令を發した。彼は天を祭る禮儀を行ひ、孔子を祭る舊慣を再興した。斯うして彼は大總統の位置を皇帝に類似したものに變化させた。此變化を注視した復辟論者はどうせ帝國に還る位ならば宣統皇帝の位置を昔に復して中華の皇帝にする方が善いと言ひ出した。袁は一方に於ては自己の黨派を使嚇し『共和政治は是非とも維持せねばならぬ、宣統皇帝が民國の時代になつて猶ほ皇帝の尊號を持つて居るは不都合である、そう云ふ不自然の存在物があるから動もすれば復辟論など、云ふ愚論も起る、此際宣統皇帝の皇帝たる尊號は除くべし、年金を廢すべし』と主張させ、自身は却て總統府申令を發して清國皇室を尊敬する意思の變らないことを宣言し暗に宣統皇帝を威嚇し、同時に各省の將軍、巡按使に復辟論の可否を諮問して之を不可とする意見を集め得た。斯うして彼は『支那は帝國にならなければ治まらな、しかしながら宣統皇帝の復辟は不可能だ』と云ふ事實を世界に示さうと試みた。彼が大總統から皇帝たるべき時期は眼前に迫つた。此年の九月四日支那から歸つて門いと語つた。

(四一) 袁皇帝出現の急務。

事實を云へば袁の總統から皇帝に移るのは支那の現狀に於ては已むを得ない要求であつた。此理由を明白にする爲に我々は此に少しく袁の政府の對外關係を記さねばならない。米國は袁が滿洲朝廷の陰謀に依て政治の圈外に放逐された前から支那の良友を以て自ら期した。袁の放逐された後も、頻りに支那の歡心を買はうとした。是が爲に一九〇九年(宣統元年)袁の怏々として河南に歸臥した同じ一月に於て米國は義和團賠償金の權利を放棄した交換問題として清國留學生の教育を引受けることになり、四年毎に毎年百名の留學生を受取り、五年目から更に其半數五十名を受取る契約を清國政



府との間に結んだ。彼は償金を放棄する好意を示して學生を教育する權を得たのである。同じ年（一九〇九年）の十一月には米國は更に突進して出し抜けて滿洲鐵道中立の提議を列國政府に送り同時に錦愛鐵道の計畫を公にした。國交に於ては何等の修練もない、一個の成金に過ぎない米國の外交家は日露の滿洲、蒙古に於て持つて居る歴史も、傳説も無視して旁若無人の態度に出ることを何の不禮でも失敬でもないと思つて居たらしい。米國は金持ちである。其弗の外交は勿論恐るべきものである。さりながら弗の外交には其方に限度がある。兵力に於ては弱國に過ぎない米國は日露の正言厲辭に逢つて忽ち其空威張の孔雀の翼を收めざることを得なかつた。さうして米國は外交界の物笑になつた。しかしながら米國は依然として支那の情人たるべき態度を易へなかつた。やがて革命は成立した。袁は河南の蟄居から飛躍して中華民國の總統になつた。米國の支那に對する仁義の押賣りは、益々甚しくなつた。彼は滿洲朝廷の時代に於て既に英佛獨の三國借款團に割込み、其財力を以て滿洲の現狀を破壊しや

うと試み日露の協同抗議に逢て尻込したが、民國政府の成立した後には一九一三年（民國二年）三月六國借款團體から脱退し、米國の富を政治的關係から離れて自由に支那に用ひ得べき下地を作つた。米國と中華民國とは同じ共和政治の國體だと云ふ事を理由にして巧言令色を以て支那人の感情を誘つた。米國の富豪は支那の教育の爲に多大の金を投ずることを厭はなかつた。袁の政府が米國を頼もしい伯父さんのやうに思つたのは勿論である。しかし米國の外交は到底弗の外交である。『戀は力であるが黄金は萬能力である』と云ふ諺も無いことはない。さりながら其實は弗の外交には其方に一定の限度がある。背後に兵力のない弗の外交は睨みが利ない。之が爲に米國は滿洲鐵道中立の問題にも、錦愛鐵道の問題にも四國借款に依て滿洲の現狀を打破しやうとした計畫にも美事に失敗した。此事實は袁と雖も認めざるを得ない。支那に居る英人は必しも日本人の突進を喜ばない。さりながら日英兩國は同盟國である。此親交に水をさすことは容易でない。英國が日本に抗して支那の味方となることも、日本



が英國と離れて支那に加勢することも日英同盟の必要がある間は支那の政府の豫期し得る所ではない。日、露の利害も一致して居るらしい。袁の位置から四顧すれば其得意の『夷を以て夷を制する』術も之を施すことは決して容易でない。米國は頼もしい伯父さんである。さりながら強い伯父さんではない。袁の政府は別に『強い伯父さん』を求めた。そうして獨逸に於て之を發見した。革命戦の起つた時に獨逸は始め滿洲軌廷を助けやうと試みた。しかしながら勢力の推移を見るに敏捷な獨逸人は間もなく新政府の味方になつた。第二革命の時は獨逸は士官と武器を袁の政府に貸した。六國財團に嚴重な取極のあるにも關はず、獨逸は數ば資金を袁の政府に供給した。一九一三年（民國第二年）袁のクーデターが成功し、其大統領たる位置が確實になつた時、袁は長子克定を獨逸に行かした。獨逸は袁の政府の爲に『強い伯父さん』になつた。治安も殆ど他人に依て維持され、財政も殆ど他人に依頼する支那の位置に於ては、斯う云ふ『頼もしい伯父さん』と『強い伯父さん』を持って居ることは勿論其政府の強み

である。袁は此強みに依て其政府を維持して來た。強いものに靡き易い支那の官民は袁に此後援のあるとを認めて袁に謳歌した。袁の位置は樂天的であつた。斯うして進んで行けば袁は遅かれ早かれ必ず皇帝となるべき機會に達することであらう。彼は無理をして皇帝になる必要はなかつた。さりながら人事は豫期し難いのが常である。今まで平和を粧つて居た歐羅巴は遽かに修羅の巷になつた。獨逸は他の列強から包圍攻撃をされた。袁は遽に『強い伯父さん』の影を見失つた。歐洲戦争の結果は借金で日暮して居た袁の政府に爾後の借款成立を容易ならざらしめた。袁の政府は之が爲に再び財政難の悲境に陥り、地方に依ては文官の給金を半減にせざるを得なかつた。日本の青島攻撃は袁の『強い伯父さん』たる獨逸の權威を極東から一掃した。日本は再び支那の恐怖の目的になつた。袁は駐米の自國公使に訓令して戦勝の威に誇る日本より來るべき支那分割の危険に際し米國の保護を歎願せざるを得なかつた。その交渉が三ヶ月間に亘り一九一五年（民國第四年）五月二十五日に北京に於て訂結された日



支條約は日本の側から言へば新しい世界の變局に依て日本が何等の利益を得たのではない。單に既得權を文面に書き現はしたものに過ぎないけれども支那側に於てそれを大きな屈辱に感じた。實際少壯の士官中には袁政府の日本に對する軟弱の態度を非難し、『袁は國を賣る賊だ』とさへ罵るものがあつた。一九一三年（民國第二年）のクーデター以來閉息して、空しく不平を懷いて居た反袁黨は袁が斯して逆境に落ちると共に再び氣力を恢復した。廣東、浙江、湖北には早くも政府顛覆の機關が設けられた。袁の政府は其報告を得る毎にそれを破壊した。海外から第三革命を煽動する色々の出版物が輸入された。實際革命黨の再起すべき危険が多くなつて來た。南方の軍隊と民主主義を懷いて居る少壯政治家は袁に對する不平を稍や露骨に現はすやうになつた。浙江、江蘇、河南、山東、廣東の一部に小さい騷動が起つた。勿論一般の人民は革命黨に對して何等の同情は無い。袁の皇帝たるは、大總統たるは、約法の民主主義なるはと、專制主義なるとは一般の人民に取つては始から何等の交渉もない。さりながら官

吏と、軍隊とは時勢の變化に動き易い。官界から放逐された古い官吏、軍隊から解放された將校、兵士の浪人は、自ら謠言を造り、且謠言に動かされ易い。一たびクーデターに依て閉息した反袁派の氣焔は再び揚がつた。新聞紙の袁に對する態度も一變した。袁の黨派は是に於て是非とも早く袁皇帝を實現しなければならぬ事を考へた。彼等の信ずる所に依れば袁皇帝を實現することが時局を救ひ得べき唯一の方便であつた。

(四二) 袁皇帝の現出を急ぎたる理由。

我々は誰が袁を皇帝にすることを以て當面の支那問題を解釋すべき急務と考へたかを悉しく知つて居るものではない。新聞紙の報ずる所に依れば廣東人士中の有力者梁士詒こそ其發頭人であると云ふ。しかし我々に取ては帝制論の發案者が甲たり、乙たる乎は問題でない。我々は唯だ此時に於て袁の皇帝たることは時局を救ふ爲には眞に必



要のことであつたらうと考へる。少くとも袁派がそう考へたことは決して無理ではないと思ふ。何故なれば『強い伯父さん』たる獨逸は歐洲戦争の結果、袁の後援として頼み得べきものでなくなつた。袁の政府の命の綱と云ふべき外國の借款は戦争の結果として、袁の政府のものはや頼み得べきものではなくなつた。袁の位置の頼少くなつたことを見た反袁黨は頭を擡げ出した。支那の世界は再び四分五裂に戻らうとして居る。斯う云ふ場合に於て士心を鼓舞して中央政府に集中せしむべき策は袁を皇帝にするより外に道は無い。古も同じ例がある。漢の蕭王劉秀(則ち後漢の光武帝)が皇帝の尊號を受けることを固辭した時に耿純と云ふものが劉秀を諫めた。耿純の言草が面白い。『天下の士大夫の親戚を捐て、土壤を棄て、大王に矢石の間に従ふものは、其計、固より龍鱗を攀ち、鳳翼に就き以て其志を成さんと欲するのみ、今大王時を留め、衆に逆ひ、號位を正さざれば純、恐らくは士大夫の望絶え計窮まり、則ち去歸の思あらんことを、大衆一たび散ずれば復た合すべきこと難からん』と云ふのが其論旨であつた。

之を平たく言へば『足下がつまらぬ氣理を立て、皇帝にならなければ、足下が皇帝になつたら其御蔭が甘い汁を吸はうと思つて居た連中が足下から離れてしまふ、そうしたら折角、今まで出來上つた統一事業が中途で廢絶するであらう、遠慮にも程があつたものである』と云ふのである。蟻は甘みに集り、人は利益の多い所に寄る。是は支那人に限つたことではない。足利尊氏も征夷大將軍になつたればこそ、天下の武士も其蔭に立つた。支那人は利己心の極めて濃厚な人種である。此濃厚な利己心は支那人をして個人主義者たらしめた。さりながら物の作用は必ず積極と消極がある。來る者には順風でも往くものには逆風である。支那人は利己心が強い。利己心が強い故に利益の源泉たるべき皇帝に歸服する。袁が皇帝になる事は袁を功名富貴の持主にし分配者にするのである。少くとも功名富貴の持主たり分配者たる外觀を與へるものである。魚は好餌の在る所に集る。支那に於ては天下の人心は利益の中心に集まる。此理由に依て袁が若し皇帝になれば支那の人心は袁に集らざることを得ない。この策に



依て或は亂世に還らうとする支那の人心を袁に繋ぎ止めることが出来ないとも限らな  
い。袁の爲に帝制論を鼓吹した策士の胸中には斯う云ふ秘略があつたに違ひない。加  
之袁は又軍人の跋扈を抑へる爲にも皇帝になる必要があつた。高く吠へる狗は必し  
も恐るべきではない。しかし黙て居る狗は恐ろしい。革命黨は吠ゆる狗である。軍人  
は黙つて居る犬である。革命黨も袁に取ては厄介物に相違ない。さりながら、六十餘  
衛の武定軍に擁せられ、山東江蘇の間に蟠踞し、旁若無人の舉動を敢てして居る張勳、  
三師團の兵を麾下に集め、南京に割據して袁の政府に對して隱然たる一敵國の威望を  
占めて居る憑國璋、凡そ斯う云ふやうな武人は革命黨のやうに面倒な議論はしない。  
さりながら彼等は袁が大總統たる間は袁を同輩と心得て居る。袁が皇帝の位號を正し、  
南面して彼等に臨むまでは袁は彼等の野心を抑へ眞實に歸服させることは出来ない。  
若し此の儘に放任するならば軍人割據の勢を生ぜざることを得ない。此點からも袁は  
皇帝たる必要がある。支那を堅固な中央集權の國にする必要が無いと云ふならば別問

題である。若し列國の生存競争に對し、時代が要求する堅實な國民的存在を支那に興  
すと云ふことが支那の急務ならば自然の結果として袁はどうしても皇帝とならざるを  
得ない。袁の皇帝たるは自然の要求である。帝制論者は斯う考へた。彼等の考が支那  
の現狀に適合した良策であるや否やは勿論別問題である。さりながら彼等が袁皇帝の  
出現を急いだ動機は決して單純な諂諛ではない。決して單純な我慾の發現ではない。  
彼等は事實斯うしなければ支那の現狀を整理することは出来ないと思つたのであつた。  
此帝制論には無論反對論者があつた。クーデターに依て解散された議會の名士は勿論  
大抵袁皇帝の現出を喜ばなかつた。彼等の或ものは袁のクーデターを不法として早く  
も憲政擁護會を作つた。彼等が袁の皇帝になることに反對であつたのは勿論である。  
帝政問題の發生した後には袁の親友と目すべきものでも帝制の主張者と與に朝に立つ  
を屑とせずして官職を離れたものもある。黎元洪、徐世昌、趙爾巽、李經羲、張蹇の  
如きは則ちそれである。彼等は袁の周圍に居るもの、功名に急にして袁を誤らんとす



ることを袁の爲に悲しんだ。しかし、袁皇帝の現出を以て時局の艱難を整理する爲に已むを得ざる急務と認められたものは、其よりも多かつた。梁士詒、王士珍、蔭昌、段芝貴は帝制派の中堅と指目された。朱啓鈴、周自齊、張鎮芳、袁乃寬は彼等に和して彼等と共に國體變更の賛成を各省の有力者に求めた。一九一五年(民國第四年)の八月頃には實際、袁は既に皇帝の如くであつた。中央の官制は唐制に擬した明治政府の太政官時代に似たものであつた。封爵の制度は新しい貴族を作るべく準備された。二十二省の將軍、巡按使は兩廣を除き大概袁の舊部下であつた。朝見の禮に於ける袁の態度は既に皇帝其者の如くであつた。此儘で進んで行けば袁の皇帝たることは既に明日に迫つた事實であつた。若し日本政府を主動者とする警告が起らなかつたならば袁は間もなく皇帝の位號を正ふしたことであらう。

(四三) 藪から棒の警告。

袁と袁の政府は日本政府から袁が皇帝になることに對する抗議が起らうとは蓋し豫期しなかつたことであらう。若し袁が皇帝になることに對して抗議を起し、若しくは抗議を起さないまでも不快を感じる國があるならば、それは必ず米國であらうとは袁が或は懸念した所であつたらしい。袁は是が爲に支那政府の憲法顧問米人グッドノー博士をして『支那に於ては君主制は民主制に優る、支那は君主制を廢すべからず』との説を唱へさせ、參政楊度、孫筠、嚴修等をして籌安會を作つて之を賛成せしめた。民主國に育ち、民主主義に滿幅の同情を持つて居る米國の博士ですら中國は君主制でなければ治まらなると主張する、袁が皇帝になるのは決して私心でないとの口實を以て其『頼もしき伯父さん』たる米國人の同情を維持して置かうと云ふのが袁のグッドノー博士の名を利用した奥義であらう。袁が米國に懸念した事情は、是で察しられる。しかし袁はよもや日本から帝政建立に對する抗議が起らうとは思つて居なかつたらしい。獨り袁のみではない。我々日本人と雖も、實は大隈内閣の外務省からそう云ふ抗議が



起つたと云ふのを聞いて、何となく不自然の響きのやうに感ぜざるを得なかつた。日本の公使日置は既に一九一四年（民國第三年）の九月に於て支那は事實上袁を皇帝と見て居ると言つても善いと認めて居た。若し袁が皇帝になることが支那の不安を招くものであると知つたらば、日本は何故に其運動が成熟しない時に方つて暗示、若しくは諷示を與へて支那の反省を求めなかつたのであらう。袁が皇帝たるべき運動が既に略ぼ成功に近づいた時も、日本帝國の内閣員は殆んど雲煙過眼にそれを看過した。剩へ大隈侯の如きは袁の皇帝たるは自然の勢であることを認めるやうな口氣を漏らした。されば一九一五年（民國第五年）十月日本政府が英、露、佛の諸國と共に北京政府に對し、「帝制實施は支那の内亂を激成する恐れがある、支那の平和を維持する所以でない」と云ふ警告を與へたと聞て我々は其藪から棒に驚かざるを得なかつた。我々は「多分是は日本の提議ではあるまい、民主主義に對して先天的の偏愛を持ち、支那の民主主義も歐米の民主主義も同じものであらうと皮相的に臆斷した英人あたりの首唱

であつて、日本の外務省が例の通り英國の尻馬に乗つたのに違ひない、馬鹿馬鹿しいことである」とさへ思つた位である。我々でさへそう思つたのであるから、袁の政府が日本の提議に依り斯う云ふ警告の來たのを見て意外に感じたのは勿論である。我々は大隈内閣がどうして斯んな突飛な抗議を試みたか、今に至て其意義を了解することが出来ない。大隈内閣若し袁帝の現出を以て支那に内亂の起るべき危険ありと知つたならば、何故、もつと早く袁の政府に向て暗示、諷示の手段を試みなかつたのである。袁皇帝の現出すべき勢は一年前から既に明白になつて居たのでは無いか。大隈内閣若し此事に就て確信があるならば一年前に於て早く忠告を試むべきである。しかし大隈内閣は其時に於て何等の抗議を試みないのみならず、寧ろ「他國の内事は我等の關する所に非ず、袁の皇帝たるは恐らくは自然の勢であらう」と云つたやうな冷淡な態度を示したではないか。袁の政府は是故に安心して帝制の計畫に従事した。日本人にして袁の政府に備はれた有賀博士等は始から袁皇帝の現出を道理あることとし、袁



の早く帝たらんことを希望した。有賀博士と日本の外務省とは何等の關係が無いに  
 た所で、日本外務省が若し、それ程袁皇帝の現出を危険に感じたならば有賀の勸進  
 を『吾關せず焉』の態度を以て眺めて居る理由はあるまい。然るに始に袁皇帝の現出  
 に對しては傍觀の態度を取つて居た日本が、其實行が既に明日に迫つた場合に突とし  
 て警告を與へたのは何としても藪から棒の態度と云はざるを得ない。或は大隈侯の爲  
 に、日本外務省の爲に、日本の内閣員總體の政治家たる面目の爲に、日本政府は袁皇  
 帝の現出に依て支那に内亂の起ることを信ずべき、我々の知り得ない秘密を握つて居  
 た故に、袁の政府に對して極力之を末蒨に防がうと試みたのであつて決して藪から  
 棒の氣違ひじみた警告を試みたのではない、其證據には此警告を試みた後、現に内亂  
 の起つたのでも、大隈内閣の支那に與へた警告は機宜に適した所置であることが分る  
 ではないかと云ふものもあらう。支那の現狀に就て何等の智識のないものならば、そ  
 んな言譯でも満足しやう。始から獨自一己の見識なく政府の應聲蟲たることをのみ能

事とする不學無術の新聞記者ならば、そんな愚劣な説明を尤と受取ることであらう。  
 さりながら日本帝國の一平民として我々はそんな馬鹿な辯護を道理のあるものとして  
 聞取ることとは出来ない。我々は勿論、日本の政府が斯う云ふ思切つた警告を袁の政府  
 に試みる位だから何か戰亂を豫期すべき捉へ所があつたのであらうと信ずる。そう云  
 ふ捉へ所さへ無いのに唯だ所謂支那浪人の輿論(則ち愚論)に動かされて警告を試みた  
 のならば大隈内閣の對支政策は狂人の舉動に均しい危険のものである。我々は勿論大  
 隈侯の信者ではない。大隈内閣の大連を政治家らしい人物だとも毛頭思つて居るも  
 のではない。さりながら眞逆に大隈内閣は狂人内閣だと思ふ程に敬意を表さないもの  
 でない。我々も袁が皇帝になれば支那に内亂を生ずると大隈内閣が見込を附けたの  
 には勿論何か捉まへ處があつたことであらうと信ずる。問題はその捉へ所の有無では  
 ない。たゞそう云ふ内亂の徴候がある場合に於て、藪から棒に袁の政府に忠告して既  
 に明日に迫つて居る袁皇帝の現出を中止する其事が果して支那の内亂を止める道で



あるか、それとも却て内亂を現出する道であるかの判断に就て大隈内閣の常識を疑はざるを得ないのである。事實を云へば歐洲戦争の起つた時から袁の政府の鼎は既に輕くなつた。内亂の徴候は既に此時から現はれた。袁の政府は此場合に於ける人心鎮壓策として帝制の現出を急ぎ、既に略ぼ其斷行の時期に達したのである。勿論是までにするには袁の政府はその仕事に色々の無理があつたには相違ない。さりながら反袁の感情が斯様に高かつた場合に於て、袁の政府が日本を中心とする日、英、露、佛四國の抗議に逢ひ帝制を中止しなければならぬ位置に陥つたと聞いて反袁派が『あゝ日本は善いことをして呉れた、日本の御蔭で帝制は止むであらう、我々も干戈に訴へずして已むことが出来る』と日本の好意を感謝して袁政府の良民に還るであらうか。大隈内閣がもしさう信じたならば是ほど間違つた觀察はない。反袁派の袁を惡むのは帝制問題が起つた時に始まらない。彼等が袁の獵犬を勤めて袁を大總統にした刹那から彼等は既に袁を以て民政の謀反人だと憤慨して居たではないか。別して一九一三年

(民國第二年)の十一月のクーデター以來は、彼等は袁を以て民國を破壊した逆賊だと宣言して居るではないか。彼等が袁に抵抗し得ないのは袁の皇帝に近い威望の爲である。今や袁は『強い伯父さん』の獨逸を頼むことが出来ず、剩へ日本を中心とする四國の警告に逢て帝政を中止せざるを得ない。是れ袁は外援を失ひ、剩へ人心を集中すべき手段を失つたのである。斯うして袁の威望が地を掃つた時は反袁派に取ては正に起て其復讐心の荒れを恣にし得べき好機會ではないか。他人の弱目につけ込んで吠へかゝるのは支那人の癖である。此意味に於て日本の警告は、其警告が強ければ強いだけ却て内亂を挑發する危険がある。我々は如何なる點から見ても大隈内閣の帝制中止の警告は支那に對する良友の態度であつたと賞讃することは出来ない。どうしても藪から棒の思慮なき警告であつたと思はざるを得ない。

(四四) 人心袁を去る。



斯う云ふ忠告を袁の政府が好意を以て聽くことの出来なかつたのは勿論である。それでも袁の政府は表面だけは列國の忠告に敬意を表した。しかし袁の政府の立場から言へば帝制は是非とも建てなければならぬ。頭が鱈で尾が山の芋のやうな中途二半の政體に行き詰つては益す政府の弱味を示す計である。政府の弱味を示すことは直ちに無政府時代の現出を餘儀なくする。斯う云ふ事情の上に座つた袁の政府が列國の警告あるに關はず猶ほ帝制の建設に急いだのは眞に已むを得ざる勢であつた。一九一五年（民國第五年）十一月各省の將軍、巡按使は『天に應じ、人に順ひ、速に天下を治むべし』、『國體變更は内政なり、外人の干渉を許さず』と打電した。其十二月、國民代表大會は國體を變更して帝制とすることを議決した。尋で帝制の實行期を今年の二月九日と定めた。今年の一には袁は既に皇帝の尊稱を用ひ、袁の政府は國號を定め、洪憲の年號を用ひた。袁は既に名に於ても實に於ても全く皇帝になつた。我々は袁の政府の苦心を推察することが出来る。犬に吠えられた時に、遁げれば犬は猶

ほ猛りかかる。列國の警告に従て袁の政府が若し帝制中止の態度を示したならば、反袁派の之に乗じて猛り狂ふべきは勿論である。袁の政府は今さら尻込する譯には行かない。もし一寸でも尻込したならば反袁派は直ぐに吠へかゝる。『辭、強きものは退くなり』と兵法にもある。帝制論者は此場合に於てたとへば心に於て退却を決したに於た所で弱い音を出すことは出来ない。若し弱い音を出せば天下の人心は直に彼等を去つてしまふ。故に彼等は故らに強い態度を示した。國內の事は他人の干渉を許さない、國體の變更は日本の抗論に依て中止すべき筈のものではない、帝制は必ず現出する、『まあ黙つて己の腕を見てくれ』と云ふやうな強い音を出して帝政の實現を急いだ。さりながら時機は既に後れた。日本を中心とする列國の態度に依て袁の孤立無援の狀態に陥つたことを見て取つた支那の人心は袁に對する態度を一變した。罰もあり、利生もあればこそ神は拜まれる。列國の抗議に恐れて皇帝になり得ない袁は、徒らに虚勢を張つて居ても其實は罰も利生もない神である。そんなものを拜む必要はない。人心



は日に袁を離れた。所謂第三革命は遂に斯う云ふ事情の下に発生した。大隈内閣は内亂の発生を見て『それ見たか、とうとう内亂になつたぢやないか、我々の先見は此通りで御座る、何んと肝がつぶれたか、エヘンどんなものだい』と云ふやうな態度を示した。日本の所謂賢しき輿論は大隈内閣の賢明なる政策を歎美した。

(四五) 第三革命の性質。

所謂第三革命戦はどうして起つたか。今日は猶ほ其悉はしい事情を穿鑿し得べき時期ではない。しかし事の大筋は考へられないことはない。事實を云へば大隈内閣が帝制反對の警告を袁政府に向て發した頃までは革命派は決して起て袁の政府と戦ひ得べき擬勢は無かつた。彼等の財源は全く涸渇して居た。急激論者の陳其美すら今は事の爲し難きを主張し、孫文も之に同意し、岑春煊、黃興の一派も死灰の再び焚えないことを諦らめた。『民心既に革命派を離る』とは彼等の均しく發した歎聲であつた。さ

りながら袁の政府は猶ほ他の恐るべきものを持って居た。それは外でもない。袁の政府に對して隠然敵國の態度を持して居た兵力ある武人である。袁が若し帝になるならば第一に苦痛を感じるものは革命黨よりも寧ろ此武人である。今までは彼等は袁を以て同僚の稍や大なる者に過ぎないと心得て居た。さりながら袁が皇帝になれば彼等は其足下に拜跪せざるを得ない。彼等は今までは彼等の兵權を恰も自分のもの、如く心得て居た。さりながら國體が變更すれば彼等は自己の兵權を以て袁皇帝の恩惠であると考へざるを得ない。是れは決して彼等の喜ぶ所ではない。彼等は時の勢で袁皇帝が現出してしまへば皇帝に反して反旗を翻へし得る程の野心はない。野心は有つても彼等は大抵貧乏大名である。彼等の辛うじて今日に於て爲し得る所は其武力の現勢を維持するだけだ。彼等は進んで天下を争ひ得べき財源を持って居ない。況んや彼等は革命派からは概ね袁派として睨まれて居るものである。革命派の氣焰の盛んな時は彼等は袁と共にその共同の敵として革命派を抑へなければならぬ。革命派が強い間は袁